
二振りの剣

千羽鶴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二振りの剣

【Nコード】

N4252N

【作者名】

千羽鶴

【あらすじ】

二人の少年がいた。一人は孤児という立場から天剣という地位まで登り詰め、しかし挫折する。もう一人の少年は初めて出来た友の立つ戦場にいつか自分もと、強くなることを誓い、都市を出ていく友に付いて行くことを決める。

これは鋼殻のレギオスの二次創作です。オリジナル主人公の出る話となっています。

9月20日にタイトルを少し変更しました。

プロローグ

自律型移動都市^{レギオス}。

それは、汚染物質により世界に人が住めなくなり、古の錬金術師たちが作り出したと云われる、この世界で唯一人の住むことのできる場所《世界》だ。

学園都市ツエルニ^{レギオス}。

世界を彷徨う自律型移動都市には様々な形態がある。学生の学生による学生のための都市。その一つがツエルニだ。

そこに二人の少年が足を踏み入れた。

「うわぁ……」

「ここが、ツエルニか……」

感嘆の声を漏らした茶色の髪と藍色の瞳を持つ少年の名はレイフオン・アルセイフ。

その隣で興味深げに辺りを見渡す、墨で塗り潰したような漆黒の髪と瞳を持つ少年の名は、ミロク・レイヴン。

「……ねえ、ミロク。本当によかったの？ 僕に付いてきて」

「くどい。俺が自分で決めたことだ。レイフオンが気にする必要はない」

レイフオンが気まずげに言うが、ミロクはそれを斬って捨てる。ミロクからしてみればグレンダンにいた時から何百回と繰り返し返されたやり取りなので、もうこれで終わりにするように言う。

「……………うん」

「じゃ、行くか」

二人はそれぞれトランクケース一つという、驚くほど少ない荷物を以って、放浪バスの停留所からツェルニの街へ足を踏み出した。

制服を受け取った二人は、学生寮へと向かう。幸いなことに同じ部屋に割り振られていた。

その道中。

「……やはり、武芸科じゃないんだな」

ミロクはレイフォンの一般教養科の制服を見て言う。

「うん。ちょっと離れてみようかな、って思ってさ。ミロクは武芸を続けるんでしょ？」

ミロクの制服は武芸科のものだ。

「ああ。お前と同等の強さになるのが目標だからな。それに、俺は戦うことしか能が無い」

「そんなこと無いと思うけど」

「俺自身の認識だ。それよりレイフォン。……もう、武芸はしないのか？」

レイフォンの顔に苦渋が浮かんだ。

「……どうだろう？ 今の僕は剣を取る理由が無い。理由が無い以上は戦えない。これから先の事は解らないけど、今は武芸を続ける気は起きないよ」

「……そうか」

どこか遠くを見るように、悩むように言うレイフォンに、ミロクはそれ以上何も言わなかった。

「――と、着いたな」

そうこうしている家に学生寮に到着していた。

「入学式、楽しみだね」

「ああ。俺もこういうのは、初めての経験だからな」

二人は明日から始まる学園生活に心を弾ませていた。

入学式

「何で僕まで呼び出されるんだろう？」

「判らん。俺は騒ぎを起こした連中を叩きのめしてしまったから納得いくが、レイフォンまで呼び出される理由がまるで判らない」

二人は、生徒会の制服を着た女生徒の先導で、生徒会会長室に向かっていた。

ことの発端は一時間ほど前。入学式に限らず、式と呼ばれる以上必ずといっていいほどあるお偉いさん——ツエルニは学園都市なので生徒会会長の話の最中に、事件は起きた。

武芸科の生徒同士の喧嘩だった。どうやら都市間の諍いを持ち込んだようで、口論から実力行使に移行しようとしていた。

だが、幸運と言うべきか、不運と言うべきか、ミロクは偶々その近くにおり、止めるように諫めたのだが、二人は聞き入れず、仕方なくミロクは二人をノックアウトした。

その騒ぎの所為で入学式は中止。レイフォンとミロクは近くの休憩所で休んでいたのだが、そこに呼び出しがかかった、という訳だ。前後関係からミロクが呼び出されるのは解る。だが、レイフォンが呼び出される理由は解らなかった。——彼のこの言葉を聞くまでは。

「呼び出したりしてすまないね、ミロク・レイヴン君。そして、レイフォン・ヴォルフシュテイン・アルセイフ君」

なぜその名前を知っているのか？　それが最初の感想だった。

大きな執務机を前に腰を下ろしているカリアン・ロスと名乗った六年生は、白銀の長髪で飾られた秀麗な顔を、柔和に崩した表情とは裏腹に、銀色の瞳は冷静さをたたえていた。

「まずは、ミロク君。君に感謝を。君のおかげで新入生たちに怪我人が出ることは無かったよ」

爽やかな笑みを浮かべてそう言ってくるが、聞きたいことはそんなことではない。

「何で……その名前を」

声が震えている。当然だ。グレンダンから遠く離れたツエルニにこのことを知る者がいるなど予想外すぎる。

「君のことは偶然知ったのだよ、レイフォン君。さて、その事は私にとつてさほど重要ではない。本題を話させて貰っても構わないかな？」

「……何でしょう？」

「レイフォン君に頼みがひとつ。だが、その前にミロク君には質問がひとつ。これは、先の武芸科の生徒のようなことを君自身が起こさないのか、というものだ」

カリアンは目線でミロクにどうなのだ、と問う。

「心配は無用とお答えします。俺はレイフォンに負の感情を抱いていない。そもそも彼とは友好関係にあります。彼の害となることをする理由が無い」

「……なるほど。それを聞いて安心したよ。では、レイフォン君。頼みというのはね、君に武芸科へ転科して貰いたいというものだ」

冗談ではない。カリアンの言葉を聞いてレイフォンはそう思った。自分は武芸で失敗をした。だからこその他の道を探すためにツエルニ

に来たのだ。ここでも武芸をしていたら本末転倒ではないか。

「僕には、そんなつもりはありません。僕はここに、普通の勉強をするために来たんです」

「武芸科も一般教養は学ぶとも。いや、どの学科だって三年までは一般教養は選択しなければならぬ」

「だからって……。僕には武芸をするつもりが初めから無くて。それに、僕は奨学金の申請と就労学生の手続きをしています。勉強以外の時間は働かなくてはいいけませんし、武芸に使う体力の余裕はありません」

「なるほど、正論だ」

カリアンはそう言うときから二枚の書類を取り出した。

「ふむ。レイフォン・アルセイフ。奨学金はDランク。就労先は……機関部清掃か。清掃時間は深夜から早朝。力仕事な上にこの時間帯で、報酬はいいが、きつい仕事だ。納得がいくね。ただ、君の場合、報酬のほとんどは学費で消えると思うが？」

「納得の上で、僕は就労先を決めました」

「なるほど。さて、こちらはミロク・レイヴン君だ。彼の奨学金はCランクだが、就労先は君と同じ機関部清掃だ。彼の事を私は詳しくは知らないが、自分ならば武芸をしながらでも可能と判断したのだろう。そして、実際上級生の中には武芸科の生徒でありながら機関部清掃をしている者もいる。彼らに出来て君に出来ないとは思えないのだが、ヴォルフシュテイン君」

「う……」

恐らくはレイフォンとミロクの情報の載っているであろう書類に目を通しながら、自らの考察の述べるカリアン。

自分の就労先の労働のきつさを引き合いに出したが、通じなさそ

うだ。

「無論ただ転科をしろと言っているのではないよ。君の奨学金をAランクにしよう。つまり、学費は免除だ。こちらが頼む立場にあるのだから当然の措置だね。贅沢をしなければ機関部清掃もしなくてよくなる。どうだろうか？」

「……どうしてそこまでして僕に武芸科に転科したいのか、訊いてもいいですか？」

「もちろんだとも。——学園都市対抗の武芸大会の事は知っているかね？」

「……いえ」

「二年ごとに訪れる都市間の戦争。学園都市同士で行われるそれを武芸大会と呼んでいるのだよ。もちろん、学生らしく健全な戦いを目指している。学園都市同盟が監督を行い、武器は非殺傷——刀剣は刃引きされ、射撃系の武器は麻痺弾しか許可されていない」

レイフォンからしてみれば、何ともまあぬるい戦争もあったものだと思った。

だが、仮にも戦争と言われるという事は、つまり——

「とは言え、戦争は戦争だ。勝者が得るものと敗者が失うものは変わらない」

「……セルニウム鉱山」

都市は生きている。そして、生きている以上は食べ物が必要となる。機械にしても作動するために動力源となる物が必要となるように。

都市の動力源……それは、セルニウムという名の金属だ。

「その通りだ。セルニウムは大地の汚染が始まってから生まれた金

属だ。簡単な話、そこら辺の地面を掘っても出てくる物ではあるが、汚染獣のことを考えるとそれを行うのは危険だ。となると、純度の高いセルニウムを得ようと言うのであれば、それなりに良い鉱山を保有しておかなければならない」

戦争の勝者は相手の所有している鉱山を得、敗北すれば失うことになる。だからこそ、都市同士は争うのだ。自らの大地をより長く栄えさせるために。

「しかし、ツエルニが保有する鉱山は、ひとつだけだ」

「つまり、後が無いと？」

「そういうことになる。だからツエルニは君のような強い武芸者を必要としているという訳だ。」

私は六年で、今年で卒業だ。もはや自分には関係ないとも言えるが、私はこの学園を愛している。愛しているものが失われないように手を尽くすのは当然と思わないかい？」

ああ、なるほど。自分を戦わせようとするカリアンに対して感じていた憤りが霧散していくのを、レイフォンは感じた。彼はグレンダンにいた頃の自分と同じだ。ただ、どんなことをしてでも、誰に恨まれようと大切なものを失わないようにしているだけなのだ。

——だが、それでも。

「転科はお断りします」

「……元天剣授受者の協力を得るには、誠意が足りなかったかな？」

カリアンの表情から笑みが消え、目が細まる。レイフォンの事を見定めようという観察者の顔になっていた。

「そういう訳ではありません。僕の武芸をするという心は折れてい

ます。そんな者が無理に武芸を続けても、自分にも周りにいる人たちにも害悪にしかならない。そう言っているんです。

それに、強い武芸者と言うのならミロクがいます。彼がいるなら、戦争でも負けることは無いでしょう」

「ふむ。彼はそんなに強いのかね？　確かに、入学式の騒ぎを収めた手際は見事だったが」

「元天剣授受者の保証は当てになりませんか？」

「……いや、そんなことは無いよ。ただ、ミロク君？　君自身に訊きたい。君はレイフォン君にこうまで言わせるほどに強いと、そう言えるのかな？」

それまで沈黙を保って、レイフォンとカリアンのやり取りを聞いていたミロクだが、話を振られて口を開く。

「自分で自分を強いと言えるのは、真の強者のみの権利です。自分がそうであると思うほど、俺は思い上がっていません。——ただ」

ミロクは確かな力強さを感じさせる声で、

「自分が弱いと思うほど、学園都市にいる他の者に後れをとるほど弱いつもりありません」

そう言っていた。

「………なるほど。二人とも長く引き留めてすまなかったね。下がっていいよ」

「失礼します」

一礼して、レイフォンとミロクは部屋を出て行った。

生徒会会長室の椅子にカリアンは座ったままだ。

部屋にはカリアンしかいない。先程までいた二人も退室して、既に足音も聞こえなくなっていた。

「……少し急ぎすぎたか」

カリアンは焦って判断を急いでいたことに気が付き、反省する。

レイフォンの情報を得て、何が何でも彼の協力を得ようと、気持ちが先走っていたようだ。

冷静になってみれば、自分はレイフォンがグレンダンを追い出された経緯しか知らないのだ。

何故彼がツエルニに来て、しかも一般人になる道を選んだのかを知らない。

だというのに、事前情報から金銭を第一とする人物像を思い浮かべていた。それをレイフォンとの会話中に修正しなかったのもミスだ。

彼は金銭にそこまで執着していない。奨学金の話に食い付いてこなかったのがその証拠だ。

戦いが怖い。これも無い筈だ。汚染獣と頻繁に戦うというグレンダンで戦い続けた彼だ。いまさら都市の戦争——それも学生による武芸大会を怖がるとも考えづらい。

解らないことが多いが、それでも収穫はあった。

ミロク・レイヴン。

最後の問答で感じたが、彼も相当な実力を持つ武芸者だろう。それも、レイフォンが言っていたように武芸大会では彼がいれば十分だと思えるほどの。

だが、より確実さを求めるなら、やはりレイフォンの力も欲しい。

最悪半年後の武芸大会までに協力を得られるようになればよい、
とまずはそのための情報収集をしようと頭を切り替えた。

入学式（後書き）

作者内の強さ表

アルシェイラ SS

天剣授受者 S

レイフォン（天剣無し、刀） A+

レイフォン（天剣無し） A

ディック A-

ミロク B+

ハイア、ニーナ（廃貴族憑き） B

グレンダンの武芸者、サリンバン教導傭兵団団員 C+〜C-

ツエルニ小隊隊員 D+〜D-

ツエルニ学生武芸者 E+〜E-

老性体 S〜A

雄性体、雌性体 B〜C

幼生体 D

となっております。このキャラはもつと強い、弱いなどの感想があればおよせください。修正します。

新たな出会い

「何であの人は僕のことを知ってたんだろう？」

「知らん」

「諦めてくれるかな？」

「……おそらく、ないな」

「……やっぱり？」

「お前のことを知っているなら当然だな」

レイフォンとミロクは話しながら廊下を歩く。

入学式だけの今日は、既に校舎の中に人の姿は無い。人気の無い廊下を通り、二人は自分の教室に向かう。寮も同室で、教室も同じ。見知った人間がいて安心と言えそうだが、どこか操作されたのではないかとも感じてしまう。

教室に辿り着き、引き戸を開けると、女生徒の声が二人を出迎えた。

「あ~~~~！ 良かった。帰っちゃったかと思ったけど、まだいたじゃん。イエ~~~~イ、ラッキー！」

レイフォンとミロクの姿を見るなり、女生徒の一人がピョンピョンと跳ねる。二つにくくった明るい栗色の髪がその度にふわふわと揺れた。

教室にいたのは三人の女生徒だった。

いきなりなことだ訳の分からない二人は硬直し、教室に入ろうとしていた足を止めてしまう。

「ミィ、落ち着け。彼らが困っているだろう。メイもな」

赤い髪の女生徒が、ツインテールの少女を諫める。彼女は他の二人と違い一般教養科の制服ではなく、武芸科の制服を着ていて、武器の吊られていない剣帯が腰で揺れていた。

「あ、ごめんごめん。ほら、メイっち」

「あ」

ツインテールの少女に背中を押されて、もう一人の少女がミロクの前に出た。

肩を越えた長い黒髪の、大人しげの少女だった。俯き加減で、おどおどしている。今にも泣きそうな眉、上目づかいにミロクを見る大きな瞳の下、頬の辺りがかすかに赤らんでいた。

「あの、さっきは……ありがとうございました」

それだけを言うのが精一杯という様子で、黒髪の少女は顔を真っ赤にして赤毛の少女の背中に隠れてしまった。

「悪いね、こいつは昔から人見知りが激しいんだ」

「それでも、入学式で助けてくれたからお礼をしたいって。ねえ？」

ツインテールの少女に言われて、黒髪の少女はさらに赤毛の少女の後ろで小さくなってしまった。

「……えっと、ミロク？」

「……そういえば、騒ぎを起こした二人を叩きのめした時、そばにいたような気がするな。大事は無かったか？」

ミロクの問いかけに、顔を真っ赤にしながらも、小さく頷く少女。

「そうか。それは重畳」

ミロクが僅かに笑むと、もうこれ以上ないほどに赤くなってしまった。

それに、赤毛の少女は呆れた吐息を零す。

「まったくこの子は……と、そういえば自己紹介がまだだったね。

私はナルキ・ゲルニ。武芸科だ」

「私はミイファイ・ロットエン。でもって、こっちの隠れてるのがメイシェン・トリンデン。私たち二人は一般教養科ね。ちなみに同じクラス」

「ミロク・レイヴン。武芸科だ」

「僕はレイフオン・アルセイフ。一般教養科だよ」

「で、自己紹介も終わったところで、ちょっと提案なんだけど」

「「？」」

+

「ふうん。じゃあ、二人はグレンダンから来たんだ。だからあんなに強かったんだ」

場所はとある喫茶店。提案というのは一緒に昼食を取ろうというものだった。

断る理由の無い二人はこれを了承し、現在に至る。

ミイファイが納得したと頷いている。

「別にグレンダンの人間全員が強いわけではないが」

「確かにそうかもしれないが、ミロクは相当な実力者だろう？ どうして学園都市に来たんだ？ というより、よく都市から出られたな」

ナルキの疑問ももつともである。武芸者というものは都市にとって重要だ。戦争であれ、汚染獣との戦いであれ、貴重な戦力となる。強い武芸者ならなおさらだ。

だからこそミロクのような人物が都市を出て、学園都市に来たのか聞きたいのだろう。

「レイフォンがツエルニに行くというので、それに便乗させて貰った。元々俺はグレンダンの生まれじゃなく、移住しただけだったからな、都市を出るのに問題は無かったな」

「移住？ そりゃまた何で？」

「……色々事情があつてな。あまり聞かないでくれると助かる」

その言葉に三人は黙り込んでしまう。三人とも聞いてはまずいことを聞いてしまったという顔をしている。

「えーと、じゃあ、レイとんは何でツエルニに来たのでしょうか？」

気を取り直して、スプーンをマイクに見立ててレイフォンに質問するミイフィ。

「……レイとん？ なにそれ」

いきなりの不可思議な呼び名に、レイフォンは危うくジュースを吹き出しそうになった。

「そ、レイとん。ナツキにメイっち、ミツ君で、わたしがミイちゃん。オーケー？」

「オーケーではない。ミツ君とは俺のことか？ 訂正を要求する」

「えー、いいじゃんミツ君。呼びやすいし。ね、レイとん」

「私もいいと思うぞ、ミツ君。なあ、レイとん」

「……ミツ君でいいと、思います。レイとんは？」

「……もう、好きに呼べ」

「右に同じ」

レイフォンもミロクももう訂正する気力をそがれてしまっていた。

「で、話を戻すけど。レイとんがツエルニに来たのは何で？」

「武芸で失敗しちゃってね。一般教養科で、自分が何をしたいのか、何ができるのか探すため、かな」

レイフォンとしては何て事はないという顔をして言ったつもりだった。だが、三人の表情を見る限り、失敗したようだ。また三人とも気まずそうな顔をしている。

「武芸を止めたのは自分で納得してるし、別に怪我したとかじゃないから大丈夫だよ」

「怪我が無いなら良かった。また武芸を始めるようなら仲間だな。その時はよろしく頼む」

「レイとんもなんか色々あるみたいだね。けど、何かを探すのならミイちゃんに任せなさい！ ツエルニの情報なら何でも集めて見せるから。だからレイとんも何か特ダネあったら教えてね」

「へえ、じゃあ、ミイフィは新聞社に就労するの？」

努めて、話題を逸らして欲しかったようで、レイフォンはその気遣いに感謝しながら浮かんだ疑問を口にした。

「新聞社もいいけど。出版関係もあるみたいだから、情報系の雑誌作ってるところを探すつもり」

「私は警察だな。メイはどうする？」

「……お菓子、作ってるよ」

「ふむふむ。二人は予想通り。そっちの二人は？」

「僕らは機関掃除をするよ」

それを聞いて、三人と顔を顰めた。

「何でまた、二人とも一番しんどい仕事を？」

「特にミツ君。武芸科は体力を使うと聞いているぞ。そんなところで生活リズムを崩して大丈夫なのか？」

「……きつい、よ？」

「俺達は孤児だからな。奨学金以外頼れないのだから仕方が無い」

『孤児』という単語に三人は目を？き、また気まぎれな雰囲気になる。だが、同時に納得したという顔でもある。ミロクの触れて欲しくない話とは、孤児ということが関係していると思ったのだろう。事実深い関係がある。

「あゝ、そっか。ごめんね。頑張れ」

「うん。私にできることなら手伝うからな」

「……私も」

「いや、別にこれといって辛いと思ったことは無いから」

「同情されると、むしろこちらが困るな」

そうは言っても、ミイフィとメイシェンは困った様子で視線を交わしている。すぐに気にするなというのも無理な話だろうと思っていたので、どうも思わなかった。

「よし、わかった。気にしない」

だから、ナルキがすぐに頷いたことに驚いたぐらいだ。

「ん？ どうした？ 気を遣うなど言ったのはそっちだろう？」

「いや、そうなんだけど。……姐御だなあと思って」

「あ、わかる、わかる。こうびしつと締める所とかまさになって、感じがするよね」

「年下の女の子にも好かれてるもんね」

何やら一気に和気あいあいという雰囲気になってしまった。笑いながら無駄話を続けていると、不意にその声がかかった。

「あの……すいません」

声のした方を向くと、人形がいた。

いや、人形のようにきれいな少女がいた。腰まで届く銀髪と色素が抜けたように白い肌、伏し目がちの銀の瞳の上では長い睫毛が揺れていた。

武芸科の制服を着ており、剣帯のラインの色から二年生であることが判る。

「ミロク・レイヴンさんは、どちらでしょうか？」

「俺ですが、何か？」

「用があります。一緒に来ていただけますか？」

「ふむ？ わかりました。……何だか知らんが行ってくる」

「う、うん。行ってらっしゃい」

ミロクは無言で背を向けて喫茶店を出ていく少女の後を追いかけて行った。

「何だったんだろ、今の？」

「華々しい学園デビューだったからな。目を付けられたんだろう」

「？」

ナルキ以外、全員が頭に疑問符を浮かべる。

「さっきの先輩。胸のポケットにバッジを付けてただろう？」

「銀色の丸いヤツ？」

「そうだ。アレは小隊所属者に与えられるもののさ。小隊っていうのは、武芸科の中のエリート集団ってところかな」

「じゃあ、ミロクはそれにスカウトされたってこと？」

「多分な」

「けど、ミツ君って機関掃除もするんでしょ？ それってきつくない？」

「……レイとん？」

「まあ、ミロクなら大丈夫だよ」

レイフォンは、気軽にそう言った。

入隊試験

銀髪の少女に連れて行かれた先は、一年校舎よりもさらに奥まった場所にある、少し古びた感のある会館だった。

その一室に案内されると、金髪の少女に出迎えられた。

「よく来たな。私はニーナ・アントーク。第十七小隊の隊長を務めている」

そう名乗った少女。ここまで連れてきた銀髪の少女。気だる気に寝転がっている背が高く、長い金髪を後ろで結った男。そして、機械油と触媒液で汚れたツナギを着て、キャップ付きの帽子を逆さにして被った男の計四人が、壁に様々な武器が並べられた、教室二分ほどのスペースの部屋にミロクと共にいた。

ニーナは小隊の説明をミロクにしていく。

「解ったか？」

「……おおよそは。それで、要は俺に小隊員になれと、そういう事ですか？」

曰く、武芸大会で部隊分けされた時の中心となる部隊である。

曰く、小隊に所属する生徒は指揮能力、到、念威といったもので何かしら突出していなくてはならない。

曰く、個々の能力だけではなく、チームとしての総合能力が必要となる。

わざわざ呼び出して、そんな説明をするという事は、そんなところだろう。

「話の早い奴だな。まあ、その通りなんだけどよ」

金髪の男が起き上がって、頷いている。やはり、予想は正しいようだ。

「……ちなみに誰ですか？」

「俺はシャーニッド・エリプトン。四年だ。ここじゃ狙撃手をしている」

「あ、僕はハーレイ・サットン。三年で、第十七小隊の装備担当。よろしくね」

金髪の男シャーニッドに続いて、ツナギの男が名乗る。

「ふむ。……そちらは？」

「フェリ・ロス。二年です」

銀髪の少女はそっけなく名乗る。何やら不機嫌そうだが、何かあったのだろうか？

そんな疑問が頭をよぎったが、ニーナが待ちきれないというように口を開いた。

「さて、自己紹介は終わったな？」

では、ミロク・レイヴン。私は貴様を第十七小隊の隊員に任命する。拒否は許されん。これは既に生徒会長の承認を得た、正式な申し出だからだ。何より、武芸科に在籍する者が、小隊在籍の栄誉を拒否するなどという軟弱な行為を許す筈が無い」

咳払いをひとつした後に、ニーナは堂々とそう断言した。

ニーナ・アントークという人物が、ミロク・レイヴンという戦力を手に入れると宣言しているようでもあった。

「まあ、別に断る理由もないから構いませんが。……で、俺はその小隊で何をすればいいんです？」

「それを決めるために、今から試験を行う。貴様が我が小隊でどのポジションに相応しいのか、それを見極める。

好きな武器を取れ、私はこれで相手をする」

そう言うと、ニーナは剣帯から二本の鍊金鋼ダイトを抜き、復元する。

両手に持ったそれは鉄鞭と呼ばれる打撃武器。素材は頑丈さに定評のある黒鋼鍊金鋼クロムダイト。

ミロクも壁際に行き、そこにあった武器を手取る。

「おいおい、マジかよ」

シャーニッドが驚きの声を上げる。

ミロクが選んだのはニーナと同じ双鉄鞭。壁に掛けてある予備のそれを選んでいた。

「普段は双剣を使うんですが、両手にかかる重さと間合いが同じ武器となると、これが一番よさそうなので」

「ほう」

ミロクはそう言うと、上着とネクタイを脱ぎ捨てる。部屋の隅に放り投げられたそれらがパサリと音を立てた。

そして、剽息——日常生活から使い続けている剽息から活剽に入り、双鉄鞭を軽く振って感触を確かめる。

多少重めだと感じたが、動きに支障はなさそうだ。

頷き、ミロクは双鉄鞭を構えた。

「身体は温まったようだな？　では、いくぞ」

瞬間、ニーナが飛び出した。

金属音を鳴り響かせ、二人の少年少女が激突する。

ニーナは左右の鉄鞭を連続で縦横無尽に打ち込み、薙ぎ払い、突き込んでいく。

ミロクはそれらを受け止め、躲し、受け流す。

「ははっ、ニーナの初撃を凌ぐなんて。やるなあ、あいつ」

「うん。素人の僕から見てもいい動きだと思うよ」

感心したように笑うシャーニッドに、ハーレイが頷く。

ニーナが吼える。

活剏を駆使し、身体能力をさらに強化。それに伴って振るわれる鉄鞭の速度も増す。

だが、それでもミロクの身体には届かない。

渾身の打ち下ろしは交差させた鉄鞭に火花と金属音を上げて受け止め、胴の薙ぎ払いは僅かに退くことで躲し、空気を破るかのような鋭い突きは受け流す。

「外力系衝剏は使えるか？」

何十合かの打ち合いをして、仕切り直すように多少の距離が開けると、ニーナが唐突に質問してきた。

意図は解らなかったが、とりあえず無言のまま頷く。

「ならばよし」

ニーナは嬉しそうに笑みを浮かべ、胸の前で鉄鞭を交差させる。

「受けきれよ」

放たれる衝剄。ミロクはそれを真っ直ぐ見つめ、

「外力系衝剄の変化、鏡反衝」

己が剄技で迎え撃った。

†—————†

「外力系衝剄の変化、鏡反衝」

衝剄を放った後、ミロクがそう言ったかと思うと、ニーナは吹き飛ばされていた。

「ぐっ……、一体何が……」

ニーナは起き上がろうとするが、

「一本。勝負あり、だ」

喉元に鉄鞭を突きつけられた。

「……あ、ああ、私の負けだ」

「立てますか？」

「大丈夫だ」

頭を振りながら、ニーナは立ち上がる。

身体の所々に痛みが走るところもあったが、そんなことよりも目の前の一年に訊きたい事がある。

「……今、何をやったんだ？」

これだ。

周りの皆も疑問に思っているようだ。

ハーレイは武芸者ではないからさっぱりだし、シャーニッドにしても、フェリにしても良くは解らなかつた。ただ衝剄がミロクの前の空間での向きを変えたように見えただけだ。

まあ、そう簡単に自分の手の内を明かしてはくれないだろうとは思ったが、それでも訊かずにはいられない。

「ああ、そちらの放った衝剄を鏡反衝で跳ね返しただけです」

「……なんだ。その……鏡反衝というのは？」

簡単に言うと、衝剄で流れを持った盾を作り、相手の攻撃を反射する剄技らしい。

先程のような衝剄を自分に向かってくる水の流れに例えるのなら、自分の衝剄で水路を創りだし、水の向かう向きを相手に変えるのだという。

ただ、技の性質上、相手とある程度間合いが開いていなくてはならず、衝剄や射撃、投擲武器は反射できても、単純な打撃、斬撃攻撃は逸らすことしかできないという。

だが、それでも相手の衝剄を正面から受けて無傷で済ませる技量には舌を巻く思いだ。

「それで、試験は終わりですか？」

「え？　ああ、そうだ」

「では、訓練などは何時から？」

「ああ、それは明日からにでもここで……」

「了解です。では、明日の放課後。——これ、ありがとうございます」

ミロクは、鉄鞭を元の場所に戻し、上着とネクタイを拾い上げて一礼し、部屋を出て行った。

それを、ニーナはただ呆然と見送った。

自分の本気の攻撃はかすりもせず、放った衝剄は跳ね返された。しかも相手は息を乱すどころか汗一つかいていなかったのだ。

「……なんつか、すげえ一年がいたもんだ……」

シャーニッドの言葉が部屋にいる全員の気持ちを表していた。

強さを求める者

翌日の放課後。

授業終了からほとんど間をおかずに現れたハーレイに連れられてミロクは教室を後にした。

案内された装備管理部で帯剣許可証を提出し、保管係から木箱に収まった自分の鍊金鋼ダイトを受け取る。

そのままでは殺傷設定のままでは危険なため、非殺傷設定にパラメータを設定し直すためにハーレイの——とはいっても数人で共同で使用しているらしい研究室に向かった。

「僕は武器の調整を専門にしているね。もちろん、開発の方もするけど、それよりその人に合った最適なセッティングをするのが楽しいんだ。トレーナーとはちょっと違うんだけど、何て言うんだろう？」

「グレンダンでは、ダイトメカニックと呼ばれていましたね」

「ああ、なるほどね。とてもわかりやすいや」

研究室は雑多そのものといえる惨状だった。

言うなれば腐海。

真っ黒に焦げたような色の粘つく何かが床に張り付いていたり、雑誌やら紙の束やらが積み上げられて埃をかぶっていたり、縁の汚れたマグカップや食べ掛けて放置されたパンがあったりした。

鼻を撫でる刺激臭が部屋に充滿しているのだが、ミロクもハーレイも顔色一つ変えない。まあ、ミロクは部屋に入った瞬間、僅かに顔を顰めはしていたが。

「よし、ミロク。これを握ってみてくれない？　まずは握力から確認したいんだ」

青みの混じった半透明の棒状の物体に、テーブルの端にあった機材の端子を繋いで手渡ししてきた。

これから調整を担当する者として、少しでもデータが欲しいらしい。

「じゃあ、まずは力いっぱい握ってみてくれるかい？ 拳を作るような感じで」

言われて、殴るときのように力いっぱい握り締める。半透明の物体は、外見は柔らかそうに見えても意外に頑強で、潰れることは無かった。

「うん、かなり握力があるね。見かけによらないな。じゃあ、次は剣を握っている時の感じで」

握り方を変えて物体を持つ。絞るような握り締め方だ。

「うん。了解、了解。それぞれ違った調整が必要だね、時間がかかりそうだ」

「大変ですか？」

「まあね。でも遣り甲斐はあるよ」

ミロクは白金鍊金鋼製の双剣と共に、ルビーダイト紅玉鍊金鋼製の手甲と脚甲プラチナダイトも持ち込んでいた。

「けど、双剣を使うって言ってたのに、格闘も出来るんだね？」

「ええ。元々ある程度鍛えていたんですが、グレンダンにいたときに格闘術の名門の人に目を付けられて、週一、二回のペースで死合いをするようになってかなり上達しました」

「へえ、そんなペースで仕合いをしてたんだ。それだと言っぱり上達も早いのか？」

「まあ、一度の実戦の方が、数回の訓練より身に付きますね」

「実践ね。だからあんなに強いんだ？」

微妙に両者の間の認識に齟齬があるのだが、それに気づかず、ハイレイは錬金鋼ダイトの調整を行っていく。

「……よし、終わった。また何か不具合があったら言ってよ、すぐに直すから」

「ありがとうございます。俺はこれから練武館に行きますが、先輩は？」

「僕は、今日はこのまま研究室にいるよ。ニーナによろしく」

「了解です。では」

バイトは今日からだったが、まだ時間はあるし、設定の変わった錬金鋼ダイトの調子を知りたかったし、放浪バスの生活で鈍った身体を鍛え直したいというのもある。

ミロクは研究室を後に練武館に向かった。

+

「遅い！ 何をしていた!!」

練武館の第十七小隊に割り当てられた部屋の扉を開けると怒声に出迎えられた。

「自分の錬金鋼ダイトの受け取りと設定の変更で遅れました。すみません」
時間のかかることをしていたから仕方がないとは思ったが、遅れ

たのは事実なので謝っておく。

「むっ、ミロクか。……いや、すまない。シャーニッドかフェリか
と思ってな」

「? 一人、ですか?」

ミロクは部屋を見渡すが、ニーナの他には誰もいない。

「……ああ。あいつらは……何というか、あまり訓練に出てこなく
てな」

そう言ってニーナは苦虫を噛み潰したような顔をする。

「なるほど。ハーレイ先輩から今日は研究室にいるからよろしく、
だそうです」

「……そうか。まあ、もういない奴のことは放っておくでしょう。

……レストレーション」

ニーナは錬金鋼ダイトを復元させる。

シャーニッドもフェリもおらず、ミロクとニーナの二人だけなの
だが、訓練を中止にする気は無いらしい。

「昨日の試験で、お前の防御力は解った。今日は、お前の攻撃力を
見せて欲しい」

「つまり、こちらから攻めろと?」

「ああ。実力は……正直私より上と感じた。だが、隊長は私なのだ。
隊員をどう使うか決めるのが私の役目だ。防御力からディフェンス
には申し分無かった。今度はオフフェンスとしてはどうなのかを知り
たい」

「……解りました」

ニーナの言っていることは正論だ。隊を指揮する者として隊員の
実力は把握しておかなければならない。

双鉄鞭を構えたニーナと向かい合って、ミロクは双剣を復元した。

「それが、昨日お前が言っていた得物^{もの}か？」

「そうです。……では、いきます」

「こいっ！」

内力系活剄の変化、旋剄。

脚力を大幅に強化し、高速移動を可能とする、武芸者の間でよく
使われる剄技だ。

ミロクは瞬時に間合いを詰め、同時に活剄で身体能力を強化。双
剣に剄を奔らせて右の剣を振り下ろす。

これは鉄鞭に受け止められた。ニーナがこちらの実力を計ろうと
しているように、ミロクもニーナの実力を計ろうと様子見の一撃だ
ったのだが、簡単に受け止められた。どうやらニーナは攻撃よりも
防御は得意のようだ。

ならば、どこまで防げるか試すことにする。

左の剣による刺突。頭を狙ったそれは弾かれた。剣速は一段階ほ
ど速くしていたが、これもニーナは防いでみせる。

下段からの斬り上げ。袈裟斬り。胴薙ぎ。唐竹割り。逆袈裟。刺
突。徐々に活剄の密度を上げる。それに伴って徐々に速度を上げて
いく剣戟。

双剣と双鉄鞭。

異なる武器同士がぶつかり合い、金属音が四重奏を奏でる。

鋼の音楽はどこまでもリズムを上げていくようだった。

しかし、ニーナは最初の頃はまだ余裕がありそうだったが、数十
合の剣戟を凌いだ今ではもう防ぐのがやっとといった感じだ。

（こんなところか）

ニーナの実力をおおよそ把握したミロクは、一気に剣速を上げてニーナの鉄鞭を弾き飛ばす。乾いた金属音が部屋に木霊した。

「くっ……、私の負けだ」

ニーナは悔しそうに痺れる自分の手を見ている。その手には何も握られていない。ミロクの剣戟を受けきれず、鉄鞭は手から離れてしまっていた。

（やはり、剋の通りが悪いな）

ミロクは自身の双剣を眺めながら、そんなことを考えていた。安全装置がかかっているとどうも扱いづらい。だが、外すことは非常時でもなければ出来ないのも、慣れるしかない。

ミロクに勝利したことの喜びは無い。学園都市の生徒の実力など高が知れる。それがどの程度なのかを改めて確認しただけのようなものだ。ついでに錬金鋼ダイトの調子も見ていただけにすぎない。

「おい、ミロク」

「ん？」

いつの間にか、ニーナが鉄鞭を拾い上げてこちらを見ていた。自分で思っていたより思考に沈んでいたようだ。

ニーナは真っ直ぐミロクを見つめて、

「……お前は……どうしてそんなに強いんだ？」

そんなことを口にした。

どうして？ どうして強いのかと言われれば、それは――

『生きたければ勝ち続ける。負けた者は死ぬ。弱い者は死ぬ。貴様らには戦う以外の価値は無い。それを忘れるな』

「……………っ……………」

脳裏に響いてきた声に、ミロクは不快そうに顔を顰めた。しかし、それも一瞬のことで、すぐに表情からは消える。

「……………どうして、と言われても……………そうあるしかなかったから……………ですかね？」

この答えで納得してくれるかどうかは疑問だったが、ニーナにはこれぐらいしか言えない。あまり他人に言いたくないのだ。

それに、嘘は言っていない。ただ強くあるしかなかった。そうあらねば死ぬしかなかった。生きるためには、強くなければならなかった。ただ、それだけだ。

「……………そうか。……………もうひとつ訊かせてくれ。お前は、どうして強くなりなりたいと思った？」

「……………昔は、そんな風に思ったことはありませんでした。今は、友の立つ戦場にいつか自分も立ちたいから、ですね」

「？ その友人とは、一緒に戦えないのか？」

「そいつは、強いんですよ。それこそ俺が足元にも及ばないほどに。……………しかし、友と対等の立場にいない自分が嫌だと思うようになって……………だから俺は、強くなりたと思っています」

どこか遠くを見るように、ミロクは呟くように言った。

「……お前が足元にも及ばないとは、想像もつかんが……そうか。そういうことなら私たちは強さを求める同志——仲間だな」

「……いきなりそんなことを言われても訳がわからないんですが」

「ん？ ああ、そうだな。すまない。私はな、このツエルニを守りたいと思っている。だから、周りから無謀だと、無茶だと言われている、それでも自分の小隊を立ち上げました。自分の未熟さも知ってはいるが、行動は起こした。未熟ならば強くなるだけだ。ツエルニを守るために、守れるぐらいに強くなるだけだ。」

ほら、理由は違えど、私たちは強くなりたいと思っている」

だから同志だと、仲間だとニーナは言う。

言いたい事は、まあ多少は解る。ろくな友好関係を築けない過去を持つ身としては、仲間と言われて悪い気はしない。

ただ、個人的には——

「……仲間と言うなら、まずは俺と同じ強さになる事ですね。今のままでは俺に頼りきりになりかねない」

仲間というのであれば、対等であるべきだ。少なくともミロクはそう思っている。

「ぐっ……う、まあ……そうだな、その通りだ。よし！ ミロク、もう一度勝負だ！」

「——いつでもどうぞ」

ミロクは双剣を、ニーナは鉄鞭を再び構え、ぶつかり合った。

迷う天才

（ミロクは、今頃訓練かな）

放課後、レイフォンはすることが無いので寮への帰路を行きながら、友人の事を考える。

武芸科の中でもエリートと呼ばれる小隊の隊員となったミロク。対する自分は、これからどうするのかさえ決まっていない一般教養科の一学生だ。

なんだか出だしから差を付けられてしまった感じだ。

取り敢えず機関部清掃以外にも何かバイトをしてみようと思って本屋で情報誌を買ってみたが、武芸以外に自分に出来ることがあるのか不安だ。

停留所に辿り着くと、レイフォンの目にひとつの色が目に残った。

銀色だ。長い銀髪。武芸科の制服を小柄な身に纏い、鞆を下げた一人の少女がそこにいた。

見覚えがあった。確か、ミロクを呼び出したときの少女だ。

思わず視線を向けていると、その視線に気が付いたのか、相手もこちらを向き、視線が交差した。

「……貴方は……」

「……あ、どうも」

無表情な上に、感情を感じさせない銀色の瞳で見つめられ、レイフォンは軽く委縮してしまいながらも頭を下げる。

「えっと……」

それほど——というか全く関わりが無いので、何を話せばいいのか分からない。視線に気づかないでくれれば良かったのだが、運悪くレイフォンと少女しか停留所にいなかったため、気付かれたようだ。少女は暫くレイフォンに視線を向けていたが、そこに路面電車がやってきた。

扉が開き、少女が乗り込むのをボーッと眺めていたら、少女が振り返る。

「……乗らないんですか？」

「えっ、あ、乗ります」

少女に言われて、慌ててレイフォンも電車に乗り込む。

レイフォンが電車に乗るのと同時に扉が閉まる。車内にはレイフォンと少女しかいなかった。

「……確か、ミロクさん呼びに行ったときに、一緒にいた方ですよね？」

「あっ、はい。レイフォン・アルセイフです。えっと……」

「フェリ・ロス。二年です」

「ロス？」

聞き覚えのある姓に首を傾げる。

「兄は生徒会長です。そう言えば分かりますか？」

「えっ!？」 あ、お兄さんだったんですか？」

「……ええ、認めたくないことですが」

不快そうにそう言うフェリを見ると、確かにカリアンとの共通点が多いなど、レイフォンは納得した。

「……第十七小隊は小隊の最低人数である四人を下回っていました」
そのまま不機嫌そうな表情になって、唐突に話し始めるフェリ。
いきなりどうしたのだろうか？

「入学式後、一ヶ月の間に人員が揃わなければ自然消滅する筈だったのですが、ミロクさん——貴方の友人の所為で第十七小隊は小隊として正式に機能することになってしまいました」

「……はあ。……というか先輩？ その小隊の訓練は？ ミロクはそれに出てくると言ってたんですけど」

「サボりです。なぜやる意思の無い私がわざわざ訓練に出なければならぬのですか？」

そう言つてさらに不機嫌そうになるフェリ。

えっと、要するに本当は小隊員になりたくなかったのだが、ミロクの所為で正式になってしまったと、そういうことだろうか？
つまり、今彼女の愚痴を聞いているのは……とぼっちり？

(……ミロク。恨んでいいかな？)

この場にいない友達をちょっと呪いつつ、レイフォンは疑問に思つたことを訊くことで、このまま愚痴から八つ当たりを発展しないようにしようと試みる。

「やる意思が無いって小隊を、ですか？」

「武芸そのものです」

「え？」

武芸科の生徒なのに、武芸をやる意志が無い？

「私は、元々一般教養科だったのですが、兄が無理矢理転科させたのです」

「……あの人は、自分の妹にもそんなことを……」

レイフォンは呆れてしまう。グレンダンにいた頃の自分とどっちが酷いだろうか？

孤児を救おうと必死だった自分。その為ならどんなことでもしてやると闘試合に出た。誰を傷つけても構わないとガハルド・バレーンを殺そうとした。カリアンに負けず劣らず酷い奴だろう。

だが、家族を利用しようとは考えなかった。そもそも家族の為にしていたことの延長なのだから当たり前だ。大切なものの違い、守りたいものの違いなのかもしれないが、家族を利用するというのは嫌悪感がある。

「……『にも』？」

「……あ……」

うっかり口が滑ってしまったので、レイフォンは自分が元武芸者であること、カリアンに転科するように言われたが断ったことを話した。

どうせフェリはカリアンの家族なのだし、知ろうと思えば知られることなので話した。

「……そうでしたか。兄が迷惑をかけたようすみません」

「いえ、大丈夫ですから」

「……ところで、貴方はなぜ一般教養科の生徒に？」

「武芸以外の道を探すためです。……って、どうかしましたか？」

いきなりフェリが驚いた顔をしたので、レイフォンもびっくりし

てしまう。

「……いえ、少々驚いただけです。自分と同じことを考えている方がいるとは思っていなかったもので」

「はい？」

同じことを考えている？ それはつまり――

「私は……自分で言うのもなんですが、念威の能力が非常に高いのです。そのため、幼い頃から念威専門の訓練を受けてきました。誰もが私が念威繰者になる将来を疑っていませんでした。しかし、ある時から誰もが自分の将来を知らないのに、自分だけが念威繰者になることが決まっている。そんな状況に耐えきれなくなっていたんです。

才能があるから進む道が決まっている。それが嫌で、変えたくて学園都市に来ました。しかし、それを兄は許してくれませんでした」

ツエルニの状況はレイフォンも知っている。カリアンは妹の実力を知っているが故に、ツエルニを救うために彼女に念威繰者であることを強いたのだろう。そして、おそらくレイフォンにもそうしようとしている。

「貴方が羨ましいです。武芸以外の道を選ぶ貴方が、とても羨ましいです。

私は兄を恨みます。私に念威繰者の道しか示さない兄を恨み、憎んですらいいます」

「……………」

淡々としたフェリの弦きを、レイフォンは黙って聞いていた。感情の揺らぎの見えない淡々とした声なのに、軋むような悲しみの音

が、その内側にこもっているように感じられた。

「そして、念威繰者にしかなれない。そんな自分が嫌いです」

才能があるが故に、決まってしまった自分の将来から逃げられない少女は、そう呟いた。

才能があつたが故にそれを利用し、挫折した少年は、道に迷うが故に少女にどう声をかければいいのか分からなかった。

「あつ、僕はここなので。失礼します」

寮の近くの停留所に着いたので、レイフォンは立ち上がる。

「レイフォンさん」

「はい？」

電車から降りようとしたところで、フェリに呼び止められた。

「兄には気を付けてください。自分の目的のためならば、どんな卑怯なことでもするのが兄です。私たちの意思なんて関係ないんです。だから、気を付けてください」

「……わかりました」

頷き、電車から降りて次の停留所に向けて出発するのを見送ると、レイフォンは長く溜め息を吐いた。

「ああ言うってことは、会長は諦めてくれないってことだね？
あゝもう……ホント、どうしよう？」

空を見上げて、誰に言うでもなく問うレイフォン。当たり前だが

その問いに答える者はおらず。ただ空に消えていった。

機関部の邂逅

レイフオンは寮に帰って、数時間ほどぐっすり眠った。目覚ましの音に叩き起こされると、同じように叩き起こされているミロクがいた。

睡眠時間はレイフオンが眠っている間に寮に帰ってきたので、レイフオンよりも短い筈なのだが、ミロクに疲れた様子は無い。

たとえ短い睡眠時間であったとしても体力を回復するのは、数日にわたって戦う事もある武芸者にとって大事な能力のひとつだ。その点でもミロクは優秀といえる。

二人は事前にもらっていた地図を片手に、居住区郊外にある地下への入り口に辿り着く。警備員の生徒に通行証を見せ、奥へ進むと鉄柵が囲っているだけの昇降機があり、それに乗ってさらに地下に降りる。

機械油と触媒液の混じり合った臭いが濃厚になっていく中、昇降機は全身を震わせて停止した。

必要最低限の証明が、目の前の光景を淡く映し出している。パイプの入り組んだ狭い通路に、あちこちで一定のリズムで様々な動きを見せる歯車達。ガラス状の透明なパイプの中で、触媒液によって溶かされたセルニウムが、まるで血液のように一点に向かって流れていく。そして、色を淀ませた液体が隣のパイプを逆の方向へ流れていく。

都市の地下にある、機関部。

自律型移動都市^{レギオス}の心臓部の光景が、二人の目の前に広がっていた。

「これは、すごいな……」

「ああ……」

レイフオンもミロクも、初めて見る機関部の光景に圧倒されて、

昇降機の前で呆然としていると、通りがかった同じ就労学生らしい青年が声をかけてきた。二人は彼に従って責任者の下に行き、機関部掃除を始めた。

初心者の仕事は、通路のブラシがけだった。

磨く。磨く。ただひたすらに、迷路のように入り組んだ通路を磨いていく。

通路にこびりついた混合液の取り方のコツは、二人とも何度か擦っている内に理解していた。それからは担当範囲を二つに分けて別行動にする。その方がノルマを早く達成できる。

バケツの水が汚れてきたので、水を交換しに水場に行くとミロクがいた。

「休憩？」

「いや、水を換えに来ただけだ」

「そっか。どのくらい終わった？」

「大体半分ぐらいだな。そっちは？」

「同じくらい、かな」

「なら、あともう少しだな」

「そうだね」

喋りながら担当区域に戻っていく。

二人とも単純作業は嫌いではない。その間は何も考えなくていいからだ。ただ、一心に身体を動かしていると、意識が次第に自分の身体の中にある流れに収束していく。それは、血管を走る血液の流れであったり、剋路を貫く剋の流れであったりする。

二人はそういったか感覚を楽しみながらブラシがけをしているのであった。

「そこ！ サボるな、新人！」

「すみません」

注意が飛んできた通路の方に向き直ると、金髪の少女がいた。柄の無いブラシと汚れた水が入ったバケツを片手に、レイフォンやミロクと同じ清掃員の作業着に身を包んでいる。鼻や頬、さらには髪までもが作業着と同じように汚れて黒ずんでいた。

「ニーナ隊長？」

「え？」

先輩ではなく、隊長？　　というか二人は知り合い？
ちらりと横を見ると意外そうな顔をしているミロクがいた。

「ん？　　おお、ミロクか。お前もこのバイトをしていたのか。――
そちらは？」

「ええ。こっちは、友人です」

「あ、レイフォン・アルセイフです」

視線を向けられたので、軽く会釈をしながら名乗る。

「そうか。私はニーナ・アントークだ。第十七小隊の隊長を務めている。つまり、ミロクの上官にあたる者だ」

なるほど。だから先輩ではなく隊長だったのかとレイフォンは納得する。

「――ふむ。ミロク。すまないが私のバケツの水を換えてきてくれ。代わりに二人には夜食を奢ろう。集合場所はここだ。頼むぞ」

ニーナはそう言うバケツを残してさっさと歩いて行ってしまった。

バケツの水を換えて戻ってくると、ニーナも戻ってきていた。

「ん、ご苦労。ほら、これだ」

弁当を受け取り、バケツを通路の端に置くと、ミロクがニーナと並んで腰を掛けるのにちょうどいい高さのパイプに座ったので、さらにその隣に座る。

渡された弁当の中身は、サンドイッチだった。

鶏肉と野菜と辛味のあるソースがうまい具合に合っていて美味しかった。

「美味しいですね」

「ああ」

「うむ。配達される弁当の中でも人気のある品だからな。すぐに無くなる。配達時間を把握していないと手に入れるのは難しい」

ニーナが唇の端を緩めて、レイフォンとミロクに紙コップに入れたお茶を差し出してくれた。

よく冷えた紅茶だ。砂糖が嫌みにならない程度で、これもまた美味しい。

「これも売り物ですか？」

「いや、こっちは自前だ。これは忠告だが、飲み物は自分で用意しておくといい。ここの飲み水は不味い」

ふと見ると、ミロクがニーナの横顔を眺めていた。

「何だ？ 見られていると食べづらいぞ」

ニーナも気付いたのか、文句を言っている。

「いえ、少し意外だと思ったもので」

「？ 何がだ？」

「ここで働いていることが、です」

それはレイフォンも少しだけ感じていた。何となくだが、ニーナが機関部清掃で働くといことに違和感を抱いていた。

「そうだな。体調管理としては最悪の仕事場だ。しかし、金がいい。私のような貧乏学生には、ここの高報酬はありがたい」

貧乏学生という部分に、ミロクは首を傾げていた。

「そんなに意外か？」

「いえ……ただ、ニーナ隊長からは立ち振る舞いや言葉の端々から、上流階級特有の『匂い』を感じていたもので」

違和感の正体が判った。ミロクの言う通り、ニーナからは武芸を嗜む人間特有の重心を常に中心に置こうとする立ち方以外に、そういうものがあつたからだ。

「まあ事実、実家は貧乏ではない。これは確かだ」

「……では、なぜ？」

「言っただろう。あくまで実家は、だ。親が学園都市に行くこと反対してな。半ば家出のようにここに來た。だから、実家からの仕送りはない」

「それは……どうして？」

「お前は、どうしてここに來た？」

質問に対して、質問で返すのはどうなんだろう？ とは思ったが、

口には出さない。何となく「話を折るな」と殴られる気がしたからだ。

「レイフォンと同じ所の奨学金の試験を受けて、ここともう一ヶ所受かり、しかしレイフォンはここしか試験に受からなかった。だからここに決めました」

ミロクの返答にニーナは怒りを感じたようだ。どうでもいいけど、ミロクは人の試験結果を暴露しないでください。何だが僕がすごく頭が悪いみたいで悲しくなる。いや、まあ、頭が悪いのは否定しないけどさ。

「俺たちは孤児なんで、お金が無いんですよ」

怒りの気配を感じたのか、ミロクは言葉を付けたしていた。すると、たちまち反省した色を見せる。

「……そうだったか、すまない。レイフォンも、すまなかった」

「いえ、別に気にしてません」

「はい、気を遣わないでください」

なんだか面白い人だと思った。立ち振る舞いが頑^{クール}なで、冷静なように思っていたのだが、表情がクルクル変わるのでイメージが変わってしまった。

「私は、外に出たかった」

ニーナはサンドイッチを摘まみながら、語り始めた。

「自律型移動都市に生かされている私たちは、そのほとんどがひと^{レギオス}

つの都市で一生を終える。まるで、鳥籠の中の鳥のようにな……しかし、一方で都市間を放浪バスで旅する者達もいる。ほとんど人がひとつしか見ない世界をたくさん見ている。私はそれが羨ましかった」

解るような気がした。外の世界をもっと見てみたいという気持ちは、放浪バスの旅を経験している内に、レイフォンの中にも少し芽生えた感情だ。

「旅行者になる事は出来なくても、学園都市に行くぐらいならばと思い、両親に話したらえらく反対されてしまった。実際、父親とあそこまで口論したのは初めてだった。向こうがどう思っているかは判らないが、私はとても楽しかった」

本当に楽しかったのだろう。当時の事を思いながら話すニーナは、どこか悪戯に成功した幼い子供のように見えた。

「それで、援助無しだと？」

「ああ。勝手に試験を受けたのがバレてな。出発を強行する私を両親は部屋に閉じ込めた。ギリギリで脱出してバスに飛び乗ったのだ。ここに着いてから手紙を送った。私の隠しごとの無い正直な気持ちを書いたのだが、返事の文面は短かったな。帰りのバス券と一緒に『それ以上の援助はしない』だ。だから、私はこうしている」

話し終わると、ニーナは黙ってサンドイッチを食べ出した。

話を聞くことに集中して、手の止まっていたレイフォンもミロクも食べることに集中する。

三人ともサンドイッチを食べ終わり、お茶を飲んでいると通路を誰かが走る音がした。それは、そのまま徐々にこちらに近づいてくる。

やって来たのは、同じ作業着を着た年長らしい男だった。無精ひげを顎にたっぷり蓄えている。手袋をしていない手の、爪の間に深く機械油が染み込んでいる。おそらくは機械科の上級生だろうと、レイフオンはあたりを付けた。

「おい、ニーナ。この辺りで見なかったか？」

「またか？」

「まただ。悪いな！ 頼む！」

やけっぱちな様子で大声を上げると、男はまた走りだした。

うん。主語の無い会話は何を言っているのか、何が起きているのかさっぱり解らない。さっきの先輩は、もう少し説明をしていくべきだ。

「やれやれ」

残っていた紅茶を飲み干し、ニーナは立ち上がる。

「あの、何が？」

「ああ、手伝え。今日はもう掃除はいいはずだ」

「は？」

「何か、捜すんですか？」

まだ状況の解っていないレイフオンとミロクとは違い、ニーナは楽しそうに笑みを作っていた。

「都市の意識が逃げ出したのさ」

都市の意識って何ですか？

顔に出ていたのか、ニーナが声を上げて笑った。

「まあいいから、ついて来い」

ニーナに従って、レイフォンとミロクも歩きだす。

「都市の意識というものは、好奇心が旺盛であるらしい」

分かれ道に差し掛かって何の迷いもなく奥へと進んでいくニーナは、唐突に口を開いた。

「だからこそ動き回るのだそうだ。汚染獣から逃げるという役割もあるのだろうが、それ以上に、世界とは何かという好奇心を止めることが出来ずに動き回る……まあ、これは受け売りだが」

落下防止の鉄柵に行く手を阻まれ、ニーナは足を止める。そこから見下ろせる下層には、山のようなこんもりとしたプレートに包まれた機械が、駆動音で空気を揺らしていた。

その天辺に何かいた。

何かが金色に発光している。

「好奇心旺盛だからこそ、自らの内にある新しいものにも興味を寄せられてしまう。今ならば、新入生——つまりは、お前達とかな。ツエルニ！」

ニーナが叫ぶと、発光体は飛び上がり、真っ直ぐニーナの胸に飛び込んで行った。

「はは、相変わらず元気な奴だ」

発光体を抱いて、ニーナが笑う。

間近に見て、レイフォンとミロクは言葉を失ってしまった。
発光体の正体は、小さな子供の少女だった。

「しかし、ちゃんと動いてやれよ。お前が手を抜くと、整備士たちが、調整だ何だと走り回らなくてはいけなくなるからな」

赤ん坊のような大きさなのに、手足はしっかりとてそうだ。長い髪が足の先まで届きそうで、クリクリとした大きな瞳で嬉しそうにニーナを見上げている。

「……電子精霊……」

ミロクが、小さく呟いた。

「そうだ。この子がツエルニ。この都市の電子精霊だ。ツエルニ、紹介しよう。そっちの黒髪の奴がミロク・レイヴン。その隣がレイフォン・アルセイフだ」

「僕、電子精霊なんて初めて見たよ」

「俺も知識として存在は知っていても、見るのは初めてだ」

レイフォンとミロクは興味深そうにツエルニを見ていると目があった。

すると、ツエルニはニーナの腕から脱して、レイフォンの腕の中に飛び込んできた。

慌てて受け止める。小さな体には相応の重さも無く、ただ、暖かさが分厚い作業着を通して染み込んできた。

胸の辺りの服を掴んで、しっかりと抱きつくツエルニは無垢な瞳でレイフォンを暫く見上げていると、今度はミロクの頭にへばりついていた。

「……なぜ、俺だけ頭なんだ？　って、痛い、痛い。髪を引っ張るな」

ニーナが黒髪と言ったからだろうか？　ツエルニはミロクの髪の毛を無邪気にいじって遊んでいた。

「ほう、二人とも気に入られたようだな」

声を殺して笑いながら、ニーナが言った。

「「は？」」

「気に入らない相手には触らせてもくれないのがツエルニだ。電子精霊というのは磁装結束という状態であるらしい。触る事は出来るのだが、結束を緩めるとその子の身体を構成している雷性因子が相手の身体を貫く。人が落雷を受けるのと似たことになるそうだ」

言われて、レイフォンは啞然としてしまった。ミロクの頭の上にいる無邪気な女の子が人に害を為すなんて信じられない。

「しかし、気に入った相手というより、玩具として認識されている気が——痛い、痛い、だから引っ張らないでくれ」

「くくく。さて、もう十分だろうか？　ならばそろそろ元の場所に戻ってくれよ。お前だって、不調な訳でもないのに整備士たちにいじられるのは嫌だろう」

ニーナはそう言いながらツエルニをミロクの頭から引き剥がした。
——これが、僕らのツエルニとの初めての邂逅だった。

訓練を経て

ニーナは苛立っていた。

第十七小隊の面々は武芸科用の野戦グラウンドで連携訓練をしていた。

最初は訓練時間に遅れてきたシャーニッドが、特に反省する様子も、だからと言って不満の色を見せることも無く軽薄な謝罪を述べただけという態度を取っていることに対して苛立っていた。

では、今はどうか。

シャーニッドへの苛立ちは既に無い。あるのは、ただ己に対してのみの苛立ちだ。

連携が上手くいかなかったのではない。いや、シャーニッドの狙撃による火力支援は最低限で、上手くいったとは言いがたいものだった。しかし、ミロクはほぼ完璧と言っていいほどにニーナをサポートして見せたのだ。

ニーナが来て欲しいと思った場所に来て、援護が欲しいタイミングで攻撃をしてくれた。

本来なら喜ぶべきことだ。

だが、連携が上手くいったのはミロクがニーナに合わせてくれたからだだった。そう判ってしまった。

そう、逆にニーナの方はミロクをサポートできなかったのだ。ミロクがどう動くのかが全く読むことができなかった。

阿吽の呼吸で動いているかのように感じられたのに、立場が逆になったとたん呼吸が合わなくなった。

だから、ミロクになぜそこまで自分の動きが読めるのかと尋ねてみたところ、

『組み手であれだけ手合わせすれば、大体の動きの癖や行動パターンは読めます。俺は集団戦の経験は少ないですが、相手の隙を見つ

け出すのは得意なんで』

だからニーナの隙を見せるタイミングに合わせて、フォローに入る事が出来たのだという答えが返ってきた。

ふざけるなと思った。

組み手をしたという条件ならニーナとて同じことが言える。しかし、ニーナにそんな真似は出来ない。己の未熟さを突き付けられた気がした。

（私とミロク……一体どれだけの差があるというのだ……）

組み手でも一本取るどころか、攻撃を掠らせることさえできなかった。動きの癖や行動パターンまですでに把握されているというのに、自分は呼吸を読むことすら出来なかった。

訓練は終わり、ロッカールームに戻ってもニーナの苛立ちは収まらない。他人に対してのものならば相手に言う事で少しは発散されるだろうが、自分に対しての苛立ちは溜まっていく一方だ。

シャーニッドが腰掛けに寝転びながらひらひらと手を振る。

「初めてにしては上手くいった方なんじゃねえの？ 特にお二人さんは」

「ああ……そうだな。シャーニッドに関しては狙撃手だ。他の隊員と呼吸が合わなければ射撃の援護は出来ないだろう。これは時間の関係上無理もないことだ。

フェリは、位置の割り出しが遅すぎだったが、もっと早く出来ないのか？」

「あれが限界です」

「……そうか」

（こりゃ、重症かしんねえな）

シャーニッドは内心溜め息を吐いていた。フェリの返事はそつけない。だが、ニーナはそれに腹を立てるようなことはしなかった。自分の未熟さを思い知ったことが堪えているのだ。

「……俺の動きが読めないならば、常に剋息をするといいですよ」
「……………え？」

平然とした顔で壁に寄り掛かっていたミロクが、唐突に口を開いた。

「活剋や衝剋を使わないままに、剋息で日常の生活をするんです。常に剋息を使っていれば、剋脈もある程度以上の剋を常に発生させるようになります。この際、剋息を乱してはいけません。まあ、これは普通に運動するときに呼吸を乱してはならないことと同じですが」

「…………ミロク…………？」

「剋を形にしないままに剋息を続けて普通の生活をするのは初めは辛いですが、出来るようになればそれだけで剋の量も、剋に対する感度も上がります。剋を神経と同じように使えるようになり、相手の剋を見れるようになれば、剋の動きから相手の、相手だけでなく味方の動きや技を把握できるようにもなります。剋息こそ、剋の基本です」

剋息こそ剋の基本。

それは、武芸科生徒用の教科書の、最初に載っている説明だった。だが、教科書に載っていないことも言っている。剋息のまま日常生活を送れだなんて、教科書のどこにも書かれていない。

「…………お前さん。普段からそんなことしてんのか？」

シャーニッドも驚いている。

「はい。まあ、俺がそうするようになったのは四年ほど前に、友人からそうアドバイスされてからですが。

効果は保証します。慣れてからかなり剋の瞬間発生量と剋に対する感度は上がりましたから」

「そうすれば、私もお前のように強くなれるのか？」

「すぐに効果が出る訳ではないんで、即座に強くなりませんよ。俺と同じ強さに至れるかはニーナ隊長次第です。

ひとつだけ言えるとするならば、自分に未熟さや弱さを見つけ、それを認められることが出来たなら、正すことで強くなれる。俺に言えるのはそれぐらいです」

淡々とミロクは告げていく。

だが、それでもニーナにとって十分頭の冷える言葉だった。

(……ああ。私は何を苛立っていたのだ)

ミロクの言うとおりで。自分は未熟だ。その事実は認めるしかない。未熟だからこそ研鑽を積み、努力し、経験を重ね、強くなるのだ。

ミロクと組み手をした時、自分は何と言った？ 未熟なら強くなるだけだと、そう言っていたではないか。

強くなれる。そう言うのであれば、

ニーナはミロクを見る。

こいつの言う鍛錬をしてやろう。それだけでなく、盗めるものは盗めるだけ盗んでみせる。

ニーナから苛立ちが消え去り、代わりにやる気が満ちていた。

「……随分人が多いんだね」

野戦グラウンドの観客席の一角に、レイフォン、ミイファイ、メイシェン、ナルキの四人の姿があった。周りも人で埋め尽くされている。席は満席で、席に座れなかった人は手すりに寄り掛かっていたり、階段の前でたむろしていたりする。

小隊戦を前にしたざわついた空気を感じて、レイフォンはグレンジンを思い出していた。その時は闘技場で、観客席にいることはほとんどなかった。それでも観客の熱気というものは凄まじいものだと知っているつもりだったが、今改めて実感した。

今日は対抗試合のある日であり、第十七小隊の初の試合がある日でもある。

「まあ、学園を上げてのイベントだからね」

「それは解るけど……やっぱりすごいよ」

そこらかしこに樹木が植えられたデコボコなグラウンドの両端には、柵や塹壕で囲われた陣と呼ばれる場所がある。その上を錬金科が作成した中継機が運営委員の念威操者によって操作され、飛び回っている。撮影テスト中なのだろう。観客席のあちこちに設置された巨大なモニターに、野戦グラウンドの色々な場所が次々と映し出される。

「そろそろ始まるかな？ ミツ君の試合は何時だ？」

「今日は四試合。ミツ君達は三試合目。機動力を売りに行っている第十六小隊に、実力未知数の第十七小隊がどう対抗するか？ みんなの注目はそこ、一年にして小隊デビューするミツ君の活躍だね」

「……そういえば、第十七小隊の隊長も一年の頃から小隊に入っていたと聞いたな」

「え？ それ初耳。詳しく教えて」

ミイファイとナルキの会話を聞きながら、レイフォンはミロクの試合の事を考えていた。

万が一にも負けることなどあり得ないと思うが、ミロクは集団戦の経験を積むために周りに合わせて全力は出さないと言っていた。そうなるとうとう戦うのかレイフォンでも予想が付かない。何しろミロク以外の隊員と多少の面識はあっても実力も戦い方も知らないのだ。どう戦うのか少し楽しみだった。たりした。

「レ、レイとん」

「ん？ 何？」

ぼんやりと思考に沈んでいたレイフォンは、メイシェンに話しかけられて思考を中断した。

見ると不安そうに眉を寄せているメイシェンがいた。

「……ミツ君、怪我とかしないかな？」

「なに、刃引きしてある武器だから。怪我の方は心配ないんじゃないのか？」

ナルキが安心させようと、軽く笑いながら首を振って見せた。

「ちなみに、毎年の武芸科の怪我人の数は平均三百人。これは他の科の三倍ね。しかもその多くは訓練か試合」

ミイファイの言葉で、メイシェンは泣きそうな顔になった。

ナルキは黙ってミイファイの頭に拳を落としていた。

「レイとん……」

「大丈夫だよ。ミロクなら掠り傷ひとつ負わないから。心配するな
ら相手の方だよ」

レイフォンは苦笑しながら、メイシェンからモニターのひとつに
視線を移した。試合が始まろうとしていた。

対抗試合

野戦グラウンドに出ると、控え室で感じていたざわついた空気は一気に倍加してミロク達を包み込んだ。

「んー、いいねえ。こういう雰囲気こそが俺には合っている。普段の三倍は実力が出せそうだ」

「……俺も三倍ぐらいに引き上げた方がいいですか？」

「シャーニッドのあれはただの冗談だ、相手にするな。そして、お前が言うのと冗談に聞こえない。本当に出来そうだ」

実際可能だとは言わない。普段から技量などはそれなりに実力を出しているが、到は半分どころか三分の一も出さないように抑えているため、三倍ぐらいは余裕に引き上げられる。別に隠している訳ではないが、目立つのは嫌いなため抑えるようにしている。しかし、試合になると小隊員の実力が三倍になるならばそうも言ってもらえないと思ったのだが、冗談だったらいい。冗談が通じないとグレンダンではよく言われたが、その通りのようだ。

「作戦としては、私とミロクが囷となって敵のアタッカーを引きずり出す。その間に、シャーニッドがフラッグを狙撃。典型的な作戦だが、人数が少ない以上贅沢は言えん。

フェリは開始と同時に敵の位置の割り出しと罠の探知だ。頼むぞ」
「……期待はしないでください」

小隊の編成は、戦闘要員四人をもって最低人数とする。そう武芸科の生徒手帳には書かれている。

第十七小隊は四人の最低人数だ。ハーレイは戦闘要員ではないのでこの中には加わらない。

上限となると、これは七人と定められている。

対戦相手である第十六小隊は五人。これは小隊の中では少ない方だ。多くの小隊は七人という上限数を揃えている。

戦力を揃えるという事は、勝つ上でも、生き残る上でも当たり前にしなければならぬ努力であり、第十七小隊はその努力を欠いたという事になる。

時間が無かったという言い訳など、戦場では通用しない。敗者の言い訳は負け犬の遠吠えでしかなく、そんなものに耳を貸す必要などない。ニーナもそんなことを口にするつもりはないだろう。

しかし、相手は五人。たった一人の戦力差だ。

覆せないでもない数の差だと思う。

小隊員の実力がニーナやシャーニッドと同格程度ならば、ミロクが本気を出せば一人で殲滅できるが、そうする気は無いのでこれは除外。

しかし、連携訓練初日後からニーナは、そして普段の飄々として軽薄な態度からは意外だとも思ったがシャーニッドも、剽息による日常生活という鍛錬を続けていた。その甲斐あって、剽の扱い方と剽に対する感度は上達を見せ始めていた。

ニーナ達が剽息の鍛錬方法を知らなかったことから、この鍛錬法はツエルニでは知られていないのだろう。ならば、たとえ上級生であってもその実力差を埋め、人数の差を埋められるかもしれないと考えていた。

試合開始の合図とともに、ミロクは手甲と脚甲を復元。ニーナに並走する形で敵陣に向かって駆け出した。紅玉鍊金鋼ルビーダイトに覆われた四肢が陽光を照り返し、紅く輝いた。

小隊戦において攻め手が勝つには敵小隊を全滅——行動不能にするか、敵陣に置かれているフラッグを破壊するしかない。対して、守り手側の勝利条件は敵司令官の撃破か、制限時間までフラッグを守り抜くかだ。守り手側は、試合に先んじてグラウンド内に罠を仕掛けることもでき、守りに徹するのであれば守り手側に有利とも取

れる。

故に、この試合も当然罠が仕掛けられているとミロク達は考えていたのだが、その予想は外れた。

罠は無かった。

落とし穴、落とし網、電気を通した導線から草を結わえただけのものも、念威爆雷による地雷まで、何一つとして罠が存在しなかった。

「フェリ、敵の位置は？^{つか}めたか？」

「陣内に反応が二つ。陣前に反応が三つ。動きはありません」

ニーナの質問に、鱗や花卉に似た念威端子越しからフェリの淡々とした声が返ってくる。試合前でもやる気は感じられなかったが、それでもわかる状態なのだろう。

「罠も無く、消耗していない敵を陣前で迎え撃つ気か？ 舐められている？」

「舐めてかかってくるなら、その隙に叩き潰せばいいだけの話です。落ち着いて下さい」

「む。……そうだな。すまない」

会話をしながら並走していると、念威端子から新たな声が届いた。

「こちらシャーニッド。位置に着いた。フラッグをやるには、ちょっと障害物があるな。適当な位置はもうない。二射する隙があるなら確実に仕留められるが？」

「では、俺か隊長が障害物を破壊しましょう。先輩、どれが邪魔か教えてください。後は先輩のタイミングで。それでいいですか？」

隊長」

「……そうだな。それで行くか。フェリ、ルート変更だ。障害物付

近に出るルートを教えてくれ。シャーニッド、障害物は我々に任せろ。後はお前に任せる」

「了解だ。任せたぜ、お二人さん」

「……そのまま右に進路を変更してください」

作戦が決まり、ミロクは双剣を、ニーナは双鉄鞭を復元する。白と黒。異なる双牙が二人の手の中で振るわれる瞬間を待っていた。

+

生徒会長室で、二人の人物がモニターを眺めていた。

一人は部屋の主であるカリアン。もう一人は筋骨隆々とした大男だ。ヴァンゼ・ハルデイ。彼は武芸科長つまりは武芸科のトップだ。

「随分と動きがいいな。本当に一年なのか？」

「れっきとした一年生だよ、ヴァンゼ。入学式の一件は君も見えていただろう？」

「そうだがな。一年にしてこれだと、末恐ろしい奴がいたものだと思うってな」

「……しかも、恐らく彼は周りに合わせて実力を落としている」

「………何？」

カリアンの言葉を聞いて、ヴァンゼは啞然としてカリアンを見た。

「気になる人物がいてね。その人物と一緒に彼についても調べてみたのだが……彼は実戦経験者だ。対人戦、汚染獣戦もかなり数をこなしていた。そして、恐らく非公式に——いや、これは私のただの推測だ。気にしないでくれ」

カリアンの言う事が信じられないのか、ヴァンゼはモニターに映

るミロクを見ていた。

「ヴァンゼ。私たちは未熟者だ。所詮は卵にすぎないアマチュアの集団の中に、プロの世界を知る専門家が来たのだ。その実力を、見てみようじゃないか」

それだけ言うと、カリアンもモニターに視線を戻した。

念威によって遠隔操作された撮影機が、野戦グラウンドの一角をクローズアップしている。

二つの小隊の面々がぶつかり合おうとしていた。

+

第十六小隊の初撃は、衝剄による目くらましだった。地面を衝剄が抉り、土埃が煙幕となって舞い上がる。

「来るぞ！」

ニーナに言われる間でも無い。漂っている土煙に三つの渦が巻いたのが見える。そこに剄の高まりも感じられた。

土煙を突き破って三つの人影が躍り出た。

一つ目の影を躲し、二つ目の影の攻撃を右の剣で、三つ目の影の攻撃を左の剣で受け、そのまま振り払う。

「なっ……！」

誰かの驚愕の声が聞こえる。大方、一年生ごとくと侮っていた相手に攻撃を防がれたことを驚いているのだろうが、ミロクには関係無い。そもそも戦場に立つ者には年も性別も関係無い。そんな認識を持っている方が悪いのだ。

敵小隊のアタッカーは三人。狙撃手と念威繰者は後方に控えているのだろう。陣前でアタッカー同士の総力戦となっていた。

アタッカーの一人がミロクへ向けて衝剄を放った。

ミロクはそれを構えも取らず見ているだけだったが、

外力系衝剄の変化、鏡反衝。

流れを持った剄の楯が相手の衝剄の向きを変更。放った相手にそのまま跳ね返す。この技は楯を形成するものだから構えなど必要としない。

「ぶっ……！」

放った衝剄が返ってくるとは思っていなかったアタッカーが無様な声を上げて吹き飛び、後方に立っていた木にぶつかった。頭を打ったのか、そのままそいつは気絶した。

「馬鹿な……」

倒された仲間を見て敵二名が呆然としていた。

その隙について一気に倒してもいいが、それだとミロクの勝利であって、小隊の勝利にはならないので止めておく。

「……さて、これで数は五分。お相手しますよ、先輩方」

ミロクは残った二人に向かって悠然と双剣を構えた。

「くっ、ニーナは俺が押さえる。そっちは任せた！ 狙撃手は援護だ！」

隊長格らしい人物が矢継ぎ早に指示を飛ばす。

それを受け、残ったもう一人が高速で向かってきて、そのまま剣を振るってきた。

それをミロクはその場にしっかりと足を喰い込ませ、交差させた双剣で受け止めた。

甲高い金属音が鳴り響き、火花が散る。

「旋廻か……」

内力系活廻の変化、旋廻。ミロクも使う高速移動を行う廻技だ。衝廻からの目くらまし、その次の旋廻による高速攻撃。あの一連のコンビネーションからして、相手の小隊は旋廻を重点的に訓練しているのだろうとミロクはあたりを付けた。

剣で押し合っていた相手が、再び旋廻を使用。後方に飛び退く。

「む……」

ミロクも旋廻を使い、その場から離れる。

銃声。

先程まで立っていた場所に銃弾が撃ち込まれていた。

「狙撃か」

どうやら向こうは自分を二人掛かりで仕留めるつもりらしい。

ちらりとニーナを見る。少し離れた位置で相手の隊長と打ち合っていた。時折ある場所を気にするような動きが見られる。位置的にはニーナの方が目標地点に近い。ならば自分は残りの相手二人を引きつけることにする。せいぜい目を引く技を見せることにしようと、廻を練り上げる。

「そちらは旋廻が得意なようなので、俺の編み出した旋廻をお見せしましょう」

「ほざけっ！」

相手が再び旋廻を使用。高速攻撃を加えようと真っ直ぐ突進してくる。

それを、ミロクは軽く、しかし武芸者の脚力で二メートル近く跳び上がった。躲す。

「はっ！ 馬鹿が、空中で銃弾が躲せるものか！」

男がミロクを嘲笑う。確かに男の言う事もつともだ。人間は空を飛べない。空中を移動できない以上格好の的になるしかない。

「なっ！」

だが、次の瞬間男は驚愕に目を？いた。

+

「……まるで……飛んでるみたい……」

誰かがそう呟いた。

それは、この光景を見ている者全てが持つ共通する感想だろう。

モニターには試合の様子が余すことなく映され続けていた。

一年生でありながら相手小隊の一人をたいした動きも見せずにノックアウトして見せたミロクに、観客達の歓声が沸き上がった。

その時を上回る歓声が今沸き上がるようとしている。

ミロクは空中にいた。空中にいて、そのまま高速で移動し、空中に留まり続けている。

まるで空を自在に飛び回る鳥のように、上へ、前へ、左に、右に、下や後ろに360度全方向に自在に空中を飛び回っていた。

「ナツキ。……あれ、どうやってしてるの？」

「……いや、私にも解らない……」

ミイフィの質問にナルキは答えられない。高速で動いているのは旋廻に似ているように見えるが、空中で旋廻を使うなんてことをどうやってしているのか、そもそもそんなことが可能なのか分からない。

「活廻衝廻混合変化、天翔廻てんしやうけい。その発展型、天翔廻・舞羽まいはね」
「え？」

声をした方を見ると、レイフォンがじっと空中を移動するミロクを見ながらそう呟いていた。

「ミロクが今使っている廻技の事だよ。足の裏に化鍊廻で物質化した廻を作って、それを足場に旋廻で移動してるんだ。それを連続して使っている」

レイフォンの解説で納得した。要はただの旋廻よりも高度な旋廻という事なのだろう。それを一年生で使いこなしているというのは驚くばかりだったが。

「本当は空中にいるときに攻撃を避けたりするのにミロクは使ってたんだけどね。今は多分注意を惹きつけるのに使ってる。何度か隙があったのにわざと攻撃しなかったから、他の十七小队の人が何かするのをしやすくしようとしてるんだよ」

そうなんでも無いように言うレイフォンをナルキは驚愕の面持ちで見ている。

ミロクが隙があったのにわざと見逃していた。ミロクの行動も驚

いたが、それよりもその事実になルキは気付けなかった事に衝撃を受けていた。いや、それに気づいている者が観客席に何人いる？
元武芸者だと言っていたこの少年は、ひょっとしたら今戦っているミロクと同じくらいすごい奴なんじゃないだろうか。ナルキはそう思った。

+

「ニーナ・アントーク！ 所詮、三年ごときが小隊長になるなど、思い上がりでしかないと教えてやる！」
「っ！」

敵の衝隊長がトンファ^{ダイト}を振るう。鍊金鋼が纏った衝剋も一緒になつて受け止めた手に衝撃をもたらす。

ミロクを見ると、空中を動き回るといふ芸当をやって見せて他の小隊員の注意を惹いてくれている。

目標には自分の方が近い。これはミロクがニーナにやれと言っているようなものだ。

ならばやるしかない。

「未熟なのは認めます！」

攻撃を受け流す。その動作を利用してすぐさま体勢を整える。

ミロクから攻撃は出来るだけ避けるか、受け流すかした方がいいとアドバイスされ、衝撃を吸収し、受け流し、その一連の動作から次の動作に持つて行く動きのレクチャーを受けた。まだ完璧にものにしたとは言い難いが、防衛力はさらに上昇したと思っている。

「ですが、強くなると！ ツェルニを守ると、そう決めたのです！
その思いは間違いなどではないと、胸を張って言えます！」

「戯言を！」

「戯言かどうかは、私を倒してから判断していただきたい！」

ニーナは吠え、今まで練り上げて高めた剄を全て衝剄へと変換する。双鉄鞭を振るい、振り抜いた勢いにそって衝剄を放つ。

衝剄は真っ直ぐに敵の小隊長に向かうが、相手もそんな単調な攻撃が通るほど甘くはない。

横に動いて躲し、ニーナに再び肉薄する。

「あんな攻撃が通じると思ったか？ お前の負けだ、ニーナ・アントーク」

「いいえ。私“たち”の勝ちです。先輩」
「何？」

怪訝そうに眉を寄せた小隊長の背後で破壊音が響いた。
小隊長が振り向く、視線の先では木々と障害物が衝剄で破壊されていた。

「——っ！」

次いで、銃声が響く。激しいサイレンの音が空気を震わした。

「フラッグ破壊！ 勝者、第十七小队！」

司会のアナウンスが興奮気味に叫び、観客席がどっと沸き上がった。

「はっはぁ！ どうだ、見事に打ち抜いてやったぜ！」

興奮したシャーニッドの声が、念威端子から聞こえてきた。

「な……」

ニーナは錬金鋼ダイトを基礎状態に戻して剣帯に納めると、ゆっくりと小隊長に向かい合う。

「第十七小隊にいるのは私だけではありません。私たちの勝利です」
「……そのようだ。前言を撤回する。君は立派な小隊長のようだ」
「……ありがとうございます！」

ニーナは深々とお辞儀をする。

第十七小隊の初試合は、大半の予想を裏切る形で勝利に終わった。

対抗試合（後書き）

ようやくバトルシーンに持って行けました。戦闘描写は難しいけれど、一番書いていて楽しいところなので、この作品を読んでくださる方に楽しんでいただければ幸いです。

ちなみに本文のオリジナル劉技が、黒髪で空を飛ぶ黒い鳥カラスⅡレイヴンといったように名前決定につながりました。割とどうでもいい作者の名付け方、名は体を表すでした。

忘れぬ過去と踏み抜いた災厄

「改めて初戦の勝利、おめでとう。ミロク君」

「……本来その言葉を受けるべきなのは、隊長だと思いますが？」

目の前にはカリアンが執務机に座っていた。

対抗試合の二日目が終わった翌日、深夜にミロクは生徒会室に呼び出されていた。

「……ふむ。その通りだ。しかし、君に少し確認しておきたい事があったね。夜遅くにすまないとは思ったが、呼び出させてもらった」
「では、用件を述べて下さい。バイトが無くて、久しぶりにたっぷり眠れそうなんです」

少し失礼かとも思ったが、何か嫌な予感がする。彼は、あの何を考えているのか読めない笑みを浮かべてはいなかった。それが逆にそう感じさせる。さっさと退室したかった。

「……では、本題に入ろう。」

以前呼び出して都市外の問題を持ち込まないか尋ねたときに、『自分はいフォンに負の感情を抱いていない。そもそも彼とは友好関係にあります。彼の害となることをする理由が無い』と、そう答えたね？ あの言葉は、本当に君とレイフォン君が友人だから言った言葉なのかね？」

「……何が言いたいのですか？」

カリアンの質問の意味が分からない上に、内容が不快極まりない。

「いや、不快にさせてすまない。ただ、私は——君がレイフォ

ン・アルセイフという人物に隷属しているのではないか？ そう考えてしまったのだよ。無論勘違いならそれに越したことはないと思っ
っている」

「……むしろ、どうすればそんな発想に至るのが不思議でなり
ま
せんね」

「……レイフォン君についての情報を集める際、君についての情報
も集めた。しかし、グレンダンに四年前よりも前にミロク・レイヴ
ンという人物がいた記録は無かった。考えられる可能性としては移
住だが、他の都市にも——少なくとも私の調べた限りは、グレンダ
ンの近くに君がいたという都市は無かった」

「では、まだあなたが調べていない都市にいただけです」

「私もそう思った。もしくは君の名前が偽名かとも考えた。しかし、
四年前の、君という存在が確認できる最初の記録の時期と、あるも
のが一致することに気が付いた」

ミロクはピクリと僅かに眉を動かすが、無言を通す。カリアンの
言葉は止まらない。

「都市間の戦争だ。グレンダンは汚染獣との遭遇率が高い地域にい
るため戦争は少ないようだが、全く無いという訳ではない」

（止める）

制止の言葉は声にならず、口から出ない。

「グレンダンと戦った都市は戦争に負けた。そしてその都市は、政
治に関わる者ならば聞いたことのある名だ。一般の都市からすれば、
顔を顰める風習のある都市だよ」

（思い出させるな）

「退廃都市メオル。その都市の名だ。この都市には三つの階級があり、上から貴族、平民、そして………奴隷だ。奴隷階級の人間は、人間として扱われない。その存在は記録にすら載せられず、労働力として死ぬまで使われる。武芸者がその階級にいた場合は、使い捨ての兵器として扱われたり、犯罪者たちと殺し合いをするなどという、ふざけた見せ物にされる。

ミロク君、君はメオルの奴隷階級にいて、グレンダンとの戦争に負けたときに——通常戦争後、武芸者たちは当たり前だが自分の都市に帰るものだ。しかし、君は負けて用済みとされ、そのままグレンダンに捨てられた。それが、私の推測だ。違っているならそう言うてくれたまえ。こんな失礼な推測をしてしまったことを謝罪しよう」

「……………」

何の音も聞こえなくなる。思考が停止する。何も言う事が出来ない。違うと否定しなければ認めているようなものだというのに、声が出ない。

目にはカリアンは映っていない。映っているのは闘技場。その観客席には、戦争でもないのに人が死んで嗤っている貴族たちがいる。闘技場に立つ自分の鼻につく、濃厚で噎せ返るような錆びた鉄のニオイ。

倒れ伏す相手は徐々に冷たくなっていき、じきに物言わぬ骸となる運命だ。

フラチナダイト
白金鍊金鋼の双剣とそれを握る手は、赤い血で染まり——

「……！ ……君！ ……ク君！ ミロク・レイヴンっ！」

「——っ！——」

意識が過去から現在に戻る。

嫌な汗をかいている。張り付いた服が不快さを増す。今すぐ脱ぎ捨てたい衝動にかられた。

「……すまない。まさか本当にあたっていたとは……しかし、それならやはり君はレイフォン・アルセイフに従っているだけなのかね？ それなら何か手を打つ「確かに俺はメオルの奴隷でした」む」

カリアンの言葉を遮るように言う。

カリアンの推測はあたっていた。しかし、レイフォンについては見当違いも甚だしい。生まれて初めて出来た友を、あんな腐った貴族どもと同列に考えられるのは不愉快の極みだ。

「グレンダンに特攻部隊として侵入した奴隷達おれたちは、たった一人の武芸者に敗北しました。俺と同じ年だったその武芸者は幼さ故の甘さか、或いは倒した相手にとどめをさす時間が惜しかったのかは知りませんが、命を奪うような真似はしませんでした」

「……その武芸者とは、レイフォン君の事かい？」

「はい。会長の言ったように使い捨ての兵器でしかなかった奴隷武芸者は、戦争に敗北した後グレンダンにそのまま放置されました。幸いグレンダン政府の恩情によって治療を受け、居住権が与えられて、移住者という形でグレンダンに住むことも許されましたが」

「武芸者というのは、どの都市でもそれなりの扱いを受けるものだ。メオルのような都市が異常なのだ」

「……そうですね。それが普通なんでしょう」

その普通の扱いを知らなかった自分達の驚きと喜びは、言葉で表すことなど出来ない。

一般の都市で、一般人として生まれた者には想像すら出来ない筈だ。

「話を戻しましょう。グレンダンに住むことになった俺は、自分を倒した武芸者つまり——レイフォンのいる孤児院によく訪れるようになったんです。そして、彼をはじめとする孤児たちと友人と呼べる間柄になった、そういう訳です」

「……なるほど。君と彼の関係は、私の勘違いだったという事だね。いや、すまない。君を、ひいては君の友人を侮辱するようなこと言っただけにすまなかった。君の過去を暴いたことも含めて謝罪しよう」

カリアンは立ち上がると深々と頭を下げた。

カリアンに対するミロクの認識が変わった瞬間だった。

「……しかし、少々意外でした」

「何がだい？」

「元奴隷なら、それこそ兵器としていいように使うと考えると思っていたので」

その言葉にカリアンは苦笑する。

「いや、レイフォン君を利用しようとしていたのは事実だから仕方ないことかもしれないが、私はこれでも生徒会長だよ？ 生徒が特定の個人に隷属するような状態を、教育者として見過ごすことは出来ない。まあ、それは杞憂だったようだが。レイフォン君についても、彼に戦って欲しいと持ちかけたとき、その意思を尊重できないツエルニの状況を心苦しいとも思っていた」

「……それも意外な告白ですね」

「……君とは一度、私をどのように認識しているのか詳しく話を聞いてみたいものだ」

「謹んで辞退させていただきますよ」

「いやいや、遠慮することはない——おおお？」

突如として激しい揺れが襲いかかってきた。

ミロクは絶妙なバランス感覚で立ったまま揺れをやり過ごすが、武芸者でもないカリアンには無理な話だ。必死に机にしがみついて揺れをやり過ごしている。

「な、何事だい、これは」

「都震です！」

「都震？　これが……」

カリアンも都震は初めての経験なのか、戸惑った様子を見せている。

揺れが収まって一息吐いたところで、悲鳴のようなサイレンが激しく鳴り響いた。

悲鳴のようなサイレンではなく、それはまさしく悲鳴だ。脅威が迫っていることに怯え、電子精霊が上げる都市の叫び。

ミロクは天を仰ぎたくなった。それでもすでに頭は戦闘に向けて切り替わりつつある。

「なんて平和だ」

「一体どうしたのかね？」

カリアンはこの意味に気付いていない。年齢よりずっと大人びた印象を受けていたが、それでも学生だ。ツエルニ全体で見ても気付いている生徒はどれくらいいる？

その事実を嘆いたところでどうにもならない。この都市の長に動いてもらうために自分の持ちうる情報を伝えるしかない。

「汚染獣が来ました」

「……何？」

「状況から考えて、繁殖のために地下で休眠していた母体のいた場所を踏み抜いてしまったんでしょう。生まれた幼生体は共食いをしたり、母体を喰らって成体となるのですが、近くに代わりの餌があればそんなことはしません」

ミロクは話しながら窓に近づく。

「それが、我々人間だと？」

「そうです。自前の都市外装備があるので、それを使って俺が都市外で幼生体を殲滅します。念威繰者には母体を探させて下さい。幼生体が全滅した後、三十分以内に母体を潰さないと母体は応援を呼ぶので、それまでにどうにかする必要があります」

窓を開け、窓枠に足を掛ける。

「俺は広範囲の面制圧を行う劉技を持たないので、取りこぼしが出てきます。武芸科の生徒に防衛ラインを作ってもらい、それらを迎撃させて下さい」

「待ちたまえ」

足に力を込めようとした時に、カリアンから待ったがかかった。

「おおよその状況と、その対抗策は解った。実戦を経験した者の意見だ。信用に足るものだろう。しかし、問題が二つ、疑問が一つある。

まず問題だが、ツエルニの都市外装備は長い間使用していないため、使えるかわからない。つまり都市外に出る君のサポートを行える者がいない」

「俺一人でも幼生体程度に後れは取りません。他の武芸科の生徒は全て防衛に回ってくれていいです」

「……では、問題の二つ目だ。都市外まで念威を飛ばして正確な探查を行える念威繰者。これには一人心当たりがあるが、おそらく協力してくれないだろうという点だ。そして、その人物以上の念威繰者はいないという事」

「汚染獣が来ても協力しないത്？」

その人物は死にたいのだろうか？ いや、そんなことを言っては今のレイフォンもどうするか解らないから、何か戦えない理由があるのかもしれないと思い直す。

「そうだ。先のサイレンに聞こえていない筈がないのに、何も言っ
てこない。おそらく、話すまでもなく協力する気は無いということ
だろう。それを踏まえて君に訊きたい。念威繰者の補助無しで母体
とやらを潰すことは可能かね？」

「補助無しとなると時間が厳しくなります。いつそ幼生体の来るの
を逆に辿って母体の探索を行った方が、まだマシかもしれないぐら
いです」

「では、そうしてくれ。都市に来る汚染獣は、武芸科の生徒にどう
にかしてもらえないかない。

最後に疑問だが、レイフォン君はこの状況でも戦わないのかね？」

「……レイフォンは、グレンダンでは家族を守るために戦い、孤児
を救うために金に執着し、闇試合に出ていました。ツェルニには家
族がいない。金に執着する理由ももうない。だから戦う事を選ぶか
は俺にも判りません」

勝手に話していいものかとも思ったが、今は緊急事態だ。戦力と
して当てになるかどうかは都市の長に伝えなくてはならないだろう。

「……守るべき、救うべき者がいないから戦うか判らないか。戦力
として頼るには不安があり、説得にかかる時間もこの状況では惜し

い……」

「そういう事です。では、もう行きます」

窓から飛び降りる。

天翔劉を使い、都市外装備の置いてある自室に向けて最短距離を文字通り飛んで行く。

忘れぬ過去と踏み抜いた災厄（後書き）

少しずつ出していたオリ主の過去をカリアンに暴露していただきました。やや不自然かとも思ったのですが、原作でニーナやヴァンゼに試合後にレイフォンの過去を暴露していたので、あまり引つ張るのも何だとこのタイミングで入れさせていただきました。

『オリジナル部分の説明』

『退廃都市メオル』

支配階級の貴族と一般市民の平民に加えて奴隷階級がある都市。イメージとしては古代ローマのコロッセオ。奴隷の武芸者は犯罪者や奴隷同士で殺し合いをさせられます。さらに戦争や汚染獣戦では捨て駒として扱われます。勝てば死なないように最低限の治療は受けたり出来ますが、負ければ死のうがどうでもいいと放置されるか、処分されます。奴隷武芸者は、あまり高い戦闘能力を持って反抗されないように剋の基本的な扱い方と簡単な剋技しか教えられません。

『ミロク・レイヴン』

退廃都市メオルの元奴隷武芸者。初めて戦争参加したのが槍殻都市グレンダンで、その時参戦していたレイフォンに敗北。グレンダン内部に侵入していたのでグレンダンに捨てられる形で放置され、その後グレンダンに住むことになった。元々きちんとした武門で鍛えられていれば、かなりの実力を持つ武芸者になる素質があり、グレンダンで基礎から鍛え直されていると隠れていた才能が目覚めていた。ある程度強くなった時点でサヴァリスに目を付けられ、ルツケンスの武門に出入りするようになって化鍊剋も覚えた。

このような設定となっております。

戦いの中で

エアフィルターを抜けた瞬間、粘り付くような感覚が襲ってくる。この感覚は何度経験しても慣れないと思う。

漆黒の汚染物質遮断スーツに身を包み、首から上はグレンダンで使われていた汚染物質遮断効果の高い布の包帯で覆い、ゴーグルを付けたミロクはエアフィルターを抜けて都市の外部に飛び出した。

鍊金鋼ダイトの方は、見つけ出したハーレイを半ば拉致する形で連れ出し、安全装置を解除させたから問題無い。

少し悪いことをしたかとも思ったが、非常事態で仕方ないと割り切る。

そういえば、部屋にレイフォンの姿は無かった。シェルターに避難したのだろうか？ 正直、レイフォンがいればかなり助かる——いや、戦う意思の無い者に戦いを強制するのは自身の嫌う事の一つだ。戦えと言ってしまふようなことにならなくてよかったと思う事にしよう。

落下する途中で、自分の真下、落下先に踏み割った大地からツエルニの足を伝って這い出てきたり、耳障りな羽音を立てて飛ぶ幼生体が視界に入る。

回転する。空中で独楽のように身体を回し、紅玉鍊金鋼ルビーダイトの手甲に剄を収束させる。

ミロクの周囲に炎が渦を巻いて燃え上がった。

外力系衝剄の化鍊変化、渦竜炎かりゆうえん。

飛んでいた幼生体は炎の渦に吞まれて焼け焦げ、炭となって次々と落下していく。

そのまま荒れ果てた大地にぶつかった炎剄を操作。四方向に拡散させ、十の字を描くように炎が奔り、群がっていた幼生体の群れを焼き払う。

外力系衝剄の化鍊変化、焰十字。ほむらじゆうじ

幼生体のいなくなった地点に着地し、即座に駆け出す。その手には双剣が握られている。本来光を受けて白銀の輝きを放つ刃は自ら光を放ち、周囲の闇を払っていた。

外力系衝剄の化鍊変化、光輝刃。こうきじん

本来は瞬間的に、激しい光を放って敵の目を眩ませる技だが、これから光の届かない地下を念威繰者のサポート無しで行くにはこの技をライト代わりにして行くしかない。

ミロクは大地の裂け目に飛び込んだ。

+

「……何をしてるんだろう？ 僕は」

レイフォンの周囲には誰もいない。みんなシェルターに避難していた。

深夜にサイレンに叩き起こされたレイフォンは、経験によって汚染獣が来たのだとすぐに分かった。

思わず剣帯を探したが、そんなものは無かった。その事に呆然としたが、すぐに自嘲の笑みを浮かべていた。

一般人とは武器を持たない存在なのだから、それは当然だと。

制服に着替えると寮を出て、あてもなくふらふらと街の中を歩いていた。

シェルターに避難する気も起きず、心と身体が不協和音を立てる中、ただ空の星を眺めていた。

心は戦う必要は無いと言っている。

身体は戦えと内力系活剄を高めて汚染獣との戦いに備えている。

「戦場にいないか……」

そんなのは何年振りだろうか？

グレンダンでは戦場に出られるようになってからは、出られる戦場には全て出ていた。シェルターに避難していた頃なんて、もう記憶の底にあっておぼろげにしか覚えていない。

猛り声が聞こえた。

レイフォンの強力な活剗で強化された聴覚は、街中にいてなお戦場の音を拾っていた。

汚染獣の唸り声や羽音、爆発音、火花を散らす金属音、恐怖を払おうとする叫び声、指揮官の必死な指示の声が聞こえる。

レイフォンが戦場にいらなくても戦いは始まり、今も続いている。

「……僕が戦う必要なんて、もうないんだ」

まるで呪文のように、そう呟いた。

それに、そうだ。戦場にはミロクがいる筈だ。それなら幼生体相手に負ける筈が——待て。どういう事だ？ 戦場にミロクの剗が感じられない。なぜだ？ ミロクが逃げたなんて考えられない。それなのにどうして？

集中してみると、いた。都市の外。それも地下であろう場所に大きな剗の高まりが感じられる。

「……まさか。単独で母体を潰しに？」

母体の居場所が分かっているにしては、あちこちに動き回りすぎている気がする。念威線者のサポートがないのかもしれない。だが、そんなこと——

そこまで考えて気が付いた。ここは学園都市だ。グレンダンではない。未熟者しかないツエルニには、都市の外まで念威を飛ばせる人がいないのかもしれない。

耳に届く戦場の状況は劣勢だ。一般の都市ではたとえ幼生体とい

えども油断ならないのが汚染獣なのだから、当然とも言える。

もし防衛ラインが突破されるようなことになれば、ミロクは間に合わない。そうなれば一般生徒が死ぬ事態になるだろう。

死ぬ？ 武芸者でもないのに？

レイフォンの脳裏にツエルニで出会った人達の顔が浮かぶ。メイシェンにミイフィ、休み時間に雑談で盛り上がっているクラスメイト達。

そんな一般人が死ぬのか？ そんなことが許されるのか？

「……………許せる訳、ないだろう…………」

ここに、ツエルニ最強の武芸者が戦うことを決めた。

+

ハーレイは目を丸くした。

「君、どうしてここにいるんだい？」

前線である都市外縁部から少しだけ離れた場所に、仮設テントが設けられている。そこには医療科と錬金科の生徒達が待機しているのだが、ハーレイの目の前には一般教養科の生徒がいた。

「非難しそこねたのかな？ それならここから一番近いシェルターの入り口は「違うんです」え？」

まず、一番あり得そうな可能性を口にしたが、否定された。

「僕は一般教養科ですが、武芸の心得があります。戦うのに錬金鋼ダイトが必要なんです。用意して貰えますか？」

「え？ あ、ああ。そういう事？」

剄脈を持っても能力が低かったり、何かしらの事情で武芸を続けられず武芸科に入学しない生徒もいる。目の前の彼はそういう生徒なのだろう。

しかし、汚染獣襲来という非常事態で、それでも戦おうという事だ。

「オーケー、解ったよ。素材は……青玉サファイアしか残ってないや。これで作るけど、形状は？」

ここでは鍊金鋼ダイトの安全装置の解除を行っていたが、今は予備の鍊金鋼イトも作っている。青玉サファイア以外にも素材はあったが、それらは今戦っている武芸科の生徒の使っている物の設定になる物ばかりで、余っているのはこれしかない。

「剣と、あともう一つ。二つ設定を作れますか？」

「え？ ふ、二つ？」

「出来ませんか？」

「出来るけど……使えるの？」

「以前使っていた鍊金鋼ダイトもそうしてました。起動設定に剄の発生量を設定しければ大丈夫です」

真っ直ぐに見つめてくる生徒の目を見て、ハーレイはその言葉を信じることにした。機材と鍊金鋼ダイトを繋ぎ、数値を打ち込んでいく。

剣の方の設定は適当に決めていいという発言に戸惑ったが、ハーレイは自身の経験を基に彼の体格に合わせた形と大きさに剣を設定した。

もう一つの方は、先程の剣の設定は何なのだと言いたくなるほど細かい設定だった。

思わず指を止め、訊いてしまった。

「こんなの、使いこなせるの？」

「出来ます」

即答された。

+

錬金鋼^{ダイト}は手に入れることが出来た。だが、あともう一つ。念威繰者に協力して貰わなければならないことがある。

しかし、レイフォンはツエルニの誰が念威繰者なのかを知らない。だから、まずは全体の指揮を取っているであろうカリアン^{ダイ}の許に向かう事にした。カリアンならば誰か念威繰者を紹介してくれるだろうと思つて。

内力系活剷で身体能力を高め、建物から建物へ飛び移りながら、生徒会棟を目指して駆け抜けていく。

もう少して到着するといった所で、レイフォンは足を止めた。

深夜の闇の中だからこそより映える銀色の髪と白い肌。武芸科の制服を着た女生徒が道の端にあるベンチに腰を掛けていた。

「フェリ、先輩？」

「レイフォンさん？ どうして、ここに？」

それは前線付近にいない彼女に言うこちらの台詞なのだが、それはどうでもいい。ちょうど良かった。以前彼女は自分が念威繰者だと言っていた、それも高い能力だと。

「ちょうど良かった。念威繰者の助けがいるんです。手伝って下さい」

「嫌です」

「はい？」

見ると、フェリは嫌悪の感情を込めた表情でレイフォンを睨んでいた。

「嫌だと言ったんです。そんなに、私に念威を使わせたいんですか？　好きで手に入れた訳でもない、誰かが欲しいならばあげたいぐらいのものを、そんなものを私に使わせたいんですか？」

レイフォンを責めるフェリの髪が燐光を放っていた。念威だ。髪の毛全体が光るなんて膨大な念威なんて見たことがない。感情が高ぶって制御が甘くなっているのか。だが、それだけのことでこれなら、カリアンが武芸科に転科させたという話も納得できる。

「貴方だって、そうだと思っていました。欲しいなんて思っていない才能を、使いたくないのだと。でも、違うんですね。貴方は……」

フェリの視線はレイフォンの持つ鍊金鋼ダイトに注がれている。

「僕にとって武芸とは、お金を稼ぐ手段でしかありませんでした」「え？」

「ただお金を稼ぐために戦場に出て、強くなって行って、気が付くと天剣授受者に、グレンダン最強の地位まで登り詰めていました」「レイフォンさん？」

フェリの訝しげな声を見無視して話を続ける。

レイフォンが武芸でその頭角を現す少し前に、グレンダンではひどい食糧危機の問題が起きた。食糧の生産プラントに問題が発生し、生産が間に合わなくなったのだ。

生きるためには金がいる。幼かったレイフォンはそう思った。何しろ経済活動の基本を理解したような年頃だったのだ。金があるからといって食糧が手に入るとは限らないのだが、それでも盲目的に衝動に従った。

天剣授受者の俸給は、自分の孤児院を潤すには十分なものだった。しかし、レイフォンはグレンダンにある全ての孤児院の為に金集めようとした。理由としては、孤児と呼ばれる者全てがレイフォンにとっての仲間だと感じたからだだろう。

「足りないお金を闇試合に出て違法に稼ぎ、それがばれて追放処分になりました」

「……………」

フェリは無言だ。軽蔑しているのかもしれない。

「僕は武芸で失敗しました。ここで二度も失敗したくないんです。同じように、この都市にいる誰かの未来を、夢をこんなことで失わせたくないんです」

そのためには、先輩の探查能力が必要なんです。僕に出来ることがあるなら、どんなことでも先輩に協力すると誓います。だから、今は先輩の力を貸して下さい」

頭を下げる。視界にあるのはフェリの足だけで、彼女の反応はまるで判らない。少女の靴はその場で身じろぎもせず、レイフォンにつま先を向けたまま動かない。

「……貴方は、どうしようもないお人好しです。見ず知らずの赤の他人の為に犯罪に手を染め、私にはどんなことでもすると言うなんて……」

嘆息する声が聞こえた。顔を上げる。

「私の貸しは高いですよ。トイチなんてものじゃありません。法外な利子を付けて返してもらいます。それでもいいんですか？」

「はい。約束します」

フェリはもう一度嘆息すると、杖状に復元された鍊金鋼ダイトを握った。花弁状の端子が舞う。

「私は何をすればいいんですか？」

淡々と問いかけてくるフェリに、レイフォンはもう一度頭を下げた。

フェリは頬を赤らめてそっぽを向いた。

終戦と選んだ未来（前書き）

この話が原作一巻のエピローグにあたります。次話から二巻に相当する予定です。

終戦と選んだ未来

強くなると決めた。守ると誓った。何があろうとこの想いが間違いでないと信じられるのなら、乗り越えられると思っていた。

未熟なのは知っていた。力が足りないのは解っていた。それを、今ほど呪ったことは無い。

「はあああつ！」

内力系活剗によって肉体を強化し、さらに衝剗を乗せた鉄鞭を叩き付ける。

黒鋼鍊金鋼クロムダイトの鉄鞭は幼生体の殻を打ち破れず、形を歪ませ、僅かにひびを入れる事しか出来なかった。

舌打ちしてその場から飛び退く。

それを追って向かってくる幼生体の突進を避けて、先程と同じ場所に鉄鞭を叩き込む。

それを繰り返す数回の攻撃でようやく殻が碎け、痛みでよがり、耳障りな奇声を発する幼生体に剗弾が何発も打ち込まれてようやく幼生体は絶命した。

ニーナの後ろではシャーニッドをはじめとする射撃部隊が控え、空を飛ぶ幼生体を地面に叩き落とし、ニーナのような接近戦をする生徒を援護し、先程のように殻が碎けたものは集中砲火で仕留めていた。

「ぎゃああああああつ！！」

ニーナの近くで悲鳴が上がった。

見れば一人の生徒が右手で左の肩を押さえていた。その先は無い。肉も骨もごっそりと食い千切られていた。

その生徒の庇い、壁となるように回り込む。

腕を食い千切ったであろう幼生体の頭部に鉄鞭を叩きつける。仲間を傷つけられた憤怒の感情のまま渾身の力を込めた鉄鞭は複眼を潰し、頭蓋を叩き割った。体液を飛び散らせて頭を潰された幼生体は沈黙する。

「負傷者は下がれ！ 治療を受けろ！」

ニーナはそう指示を飛ばしながら歯噛みする。

日々の到息による鍛錬の賜物か、まだスタミナは持つが、一体の汚染獣を斃すためには何度も鉄鞭を打ち込まなければならなかったため、いつまで続くか判らない。その事実が、己の活到はまだ甘いのだと教える。

どれほど時間が過ぎたのかも解らないが、傷付き倒れた者もいれば、剉脈疲労で倒れた者もいる。幸いと言うべきか、死者は出ていないが、今はまだといったところだ。

ニーナの周りには戦い続けている者もいるし、軽傷者で治療を受けて戦線復帰した者もいる。しかし、戦う者は最初よりも数を減らしている。

対する汚染獣の数は衰えることを知らないかのように次々と増えている。このままでは――

「――っ」

頭に浮かび掛けた絶望を振り払う。

「……こんな所で死ぬるか。……こんな所で、ツエルニを終わらせてたまるかっ！」

代わりに、言葉で心を奮い立たせる。

自分よりも強い部下はここにいない。だが、それがどうした？
生徒会長はこの汚染獣は幼生で都市外には母体がいるが、そこらは頼りになる戦力を向かわせたと言っていた。鍊金鋼ダイトの安全装置の解除の際にミロクは都市外装備を着ていたとハーレイは言っていた。それらから解る事は、つまりミロクは都市外で戦っているという事だ。生身では五分で肺が腐って死に至るような汚染された世界で、幼生よりも強いであろう母体を斃すために幼生体と戦っている筈だ。部下が、仲間が自分よりも過酷な戦いをしているというのに自分が先に諦める訳にはいかない。

「お、おおおおおおっ!!！」

腹の底から声を張り上げ、幼生体の群れに立ち向かう。

まずは一体目。真っ直ぐ突進してきた勢いを利用したカウンターで複眼を潰し、苦悶で怯んだ隙に開いた口に衝刺を放つ。鱗と殻がいかにかたくとも内部での衝撃は防げず、脳を内側から破壊されてそれは崩れ落ちた。

二体目。上空に飛び上がり、重力で加速、強化した鉄鞭の一撃を背中に落とす。甲殻がひび割れた所に連続して鉄鞭を叩き付ける。殻が爆ぜると鉄鞭を突き刺して衝刺で内臓を抉る。二体目を潰した。三体目。そう定めて走り出そうとしたところで目眩に襲われた。

「……………っ……………」

既にニーナの限界は近づいていたのだ。それに気付かず残っていた力を一気に消耗してしまった。

「ニーナ!」

シャーニッドの声が聞こえたような気がする。朦朧とした視界に

こちらに向かってくる幼生体が映る。

身体が鉛を付けられたように重い。意思に反して膝をついてしまう。

剄を上手く練れない。鉄鞭の重さが何倍にもなったように感じられる。半ば呆然と向かってくる巨体を眺める。

(……悔しいな……)

こんな所で死ぬ事が悔しかった。何も成せないまま終わる事が悔しかった。そして、何よりもツエルニを守れない事が何より悔しかった。

唇を噛み締めながら迫り来る死を凝視する。剄弾が何発も打ち込まれているが、幼生体を斃すには至らない。

ここまでかと諦めた瞬間、

——世界がズレた。

「え？」

目の前に迫った幼生体が、斜めにズレた。

その巨体が上と下で斜めにズレていき、上半分が地面に落ちる。

甲殻の中の柔らかい臓物が零れ、体液が噴き出す。むっとした濃い嫌な臭いが辺りに充満していった。

そして、その後ろにいた幼生体たちも次々とズレていく。

一体、二体、四体、八体と、瞬きの間にあれほど苦戦した汚染獣が駆逐されていく。今まで自分が戦っていなければあの殻が硬い事など信じられないほどに、たやすく切り刻まれていく。次々と、次々と。

「……一体」

何が起こった？

周囲一帯に力強い気配が満ちている。血の流れのように脈打ち、周囲に漂うように満ちている。

劉の気配だ。だが、こんなにも力強い劉の気配は感じた事が無い。

この劉は一体――

「これより、汚染獣駆逐の最終作戦に入ります。全武芸科の生徒諸君。私の合図とともに防衛策の後方に退避」

声が響いた。カリアンの声だ。声の出所を探すと宙に浮かんだ念威端子を見付けた。カリアンの声はそこから発せられていた。

念威端子に気を取られていると、傍に誰かが降り立つ気配を感じた。

「無事ですか？ 先輩？」

「……レイフォン？」

傍に立っていたのは機関部清掃のバイトで知り合った後輩、ミロクの友人だった。彼の手には柄だけがある奇妙な鍊金鋼だ。^{バイト}しかし、一般教養科の学生のレイフォンがなぜ戦場において、鍊金鋼^{バイト}なんて物を持っているのか判らない。

そもそも、目の前にいるのは本当にレイフォン・アルセイフなのだろうか？

バイトで知り合ったレイフォンは、いつも何かに戸惑っている印象を受けた。落ち着きなく視線を動かし、自分のいる場所に対する違和感を感じているような雰囲気纏っているのが、ニーナの知るレイフォンだ。

それが、今はどうだ？ 力強さに溢れた気配を纏い、真っ直ぐに外縁部にいる汚染獣の群れを、その先の汚染された大地を見詰めて

いる。

「先輩はそこを動かないでください。微調整が出来ていないのでコントロールが甘いんです。下手に防衛柵の向こうに退避しようと動かれると、間違っって切り殺してしまうかもしれません」

「何？」

それがどういう事か訊こうとした時、カリアンのカウントがゼロになった。

再び世界はズレていく。

向かってくる幼生体も、外縁部の端に群がっていた幼生体も、その全てが一瞬の内に切り裂かれ、屍の山と血の海と化していく。

「……な………」

動くなど言われても動けないほど疲労していたニーナは完全に固まり、言葉を失った。

これをレイフォンがしている。それは理解出来た。しかし、レイフォンがどうやってこれを行っているのかまるで理解出来ない。

鋼糸というものがある。それがレイフォンの使っている武器だった。ただの糸でも使い方で圧力と摩擦で人の肉さえ切断可能だ。研ぎ澄まされた鋼の糸は、それだけで十分な凶器となる。

レイフォンが握る鍊金鋼ダイトは柄があるだけの状態なのではない。本来剣身となる部分が遥かに細く、長く、無数に枝分かれしており、レイフォンはその鋼糸に剉を走らせて自在に操り、目の前の幼生体たちを、それだけでなく都市の全外縁部に糸を伸ばして幼生体全てを切り裂いているのだった。

「フェリ先輩！ ミロクは！？」

突如としてレイフォンが念威端子に向かって叫んだ。その事からあの念威端子はフェリのものなのだと解った。

「見付けました。母体も既に発見し、ルートの割り出し中です」

「ありがとうございます。情報はミロクに渡して下さい」

「解りました。」

「……レイフォン。……お前は……」

呆然としながら、ニーナはレイフォンを見上げる。

「もう大丈夫ですよ。幼生体の駆逐は終わったので、あとはミロクが母体を斃せば終わりです」

そう言つて笑うレイフォンに抱いたのは、武芸科全生徒が束になつても苦戦した汚染獣を圧倒して見せた力に対する恐怖か、憧れか、興奮か、或いは別の感情か、ニーナには判断が付かなかった。

十
――
十

事態は一刻を争う。

実際に手合わせして解ったが、ツエルニの武芸者では幼生体にする梃子摺るだろう。故に、一秒でも早く母体を探し出して斃し、救援に向かう必要がある。

なのだが、

「……迷った……」

ミロクは地下の空洞で道に迷っていた。

初めの頃は幼生体の来る方へ逆に辿って進んでいたのだが、全て地上に出てツエルニに向かってしまったのか、幼生体はもう見えな

い。それならばと、勘でさらに進んだ先は行き止まり。もはや方角すら分らない。やはり念威繰者の補助無しは無謀だったかと反省する。しかし、補助が出来る念威繰者がいないというのだから仕方ない。無い物ねだりやめて他の道を探して進もうと振り返った所で声がかかった。

「見付けました」

「……フェリ、先輩……ですか？」

念威端子が一つ浮かんでいる。

そこから発せられる声はフェリのものだった。

「……そうか。生徒会長が言っていた念威繰者は貴女か……」

都市外で補助出来る念威繰者は一人心当たりがあるが、協力してくれるか判らないと言っていた。

ここにフェリの端子があるという事は、彼女が件の念威繰者なのだろう。

「力を貸して貰える。そう取っていいのですか？」

「……はい。嫌々ながら、途方もないお人好しに貸するという形で助ける事にしました。帰ったらご友人に礼の一つでも言うのですね」

「！　そうですか。レイフォンが剣を取ったんですね？」

「そういう事です」

レイフォンが戦うのならツエルニの心配はもういらぬ。後は母体を潰すだけだ。

「誘導をお願いします」

走り出す。念威端子の先導を頼りに複雑に入り組んだ穴を走り抜ける。

「そこを曲がって下さい」

フェリの指示に従い、裂け目のような横穴に飛び込むと、それはいた。

汚染獣の母体——雌性体。

体躯の三分の二を構成する腹部は無残に裂けている。そこが胎内であり、千に及ぶ幼生体たちに長い安息を与えていたのだ。幼生体より遥かに大きい頭部には赤い複眼があり、二つに分かれた顎が絶息を零すように動いて、殻が擦れ合う音が地下に充満していた。

「生きたいという気持ちは同じかもしれないな」

その姿と恐れず対峙して、剄を練りながらミロクは母体に語りかけた。

「生きるだけで満足できない人間は、傲慢なのかもしれない」

あの退廃した都市の腐った貴族のように、人間というモノは平和であることだけでは満足出来ず、争う事を自ら生み出して高揚を得ようとする生き物なのかもしれない。

「だが、それでも俺は生きたいんだ。死にたくないんだ。だから——」

俺はお前を殺すと、最大にまで高められた剄を解き放つ。
衝剄が雌性体の頭を完全に、粉々に粉碎した。

「全ての汚染獣の生命反応無し。新たな汚染獣の増援もありません」

フェリの言葉が、戦いの終わりを告げていた。

同じく、汚染獣の殲滅の報告を受けたツエルニで勝利の雄叫びが上がった。

†――†

カリアンは生徒会長執務室で雑務に追われている。

汚染獣の幼生体との戦いでは、ツエルニは甚大な被害を被った。

死傷者ゼロ。再起不能者数名。重、軽傷者多数。

汚染獣の襲撃に遭いながらも死傷者がいないというのは、学園都市であるツエルニでは奇跡に等しい。

今病院では怪我人で溢れ返っており、収まりきらない者を収容するために空き家を臨時医療棟とし、そこにいる生徒も多くいる。

身体ではなく心に傷を負った者も多くいた。汚染獣と戦いでの恐怖のあまり眠れなくなった者。錯乱し、狂人のようになってしまった者もいる。そういった生徒達は怪我の治療と共にメンタルケアを受けている。

死傷者こそいなかったが、ツエルニからいなくなった武芸科の学生もいた。汚染獣の戦いのショックや武芸大会への見通しと幸先の悪さから自主退学を申し出た生徒もいたからだった。

人的被害から目を逸らせば、都市外縁部での汚染獣の死骸の撤去作業や補修作業が行われている。

トントンと扉をノックされて、カリアンは書類仕事を中断した。

「入りました」

「失礼します」

ガチャリと扉を開けて、ツエルニでの死傷者が出なかった最大の要因であろう少年が入室してきた。

「……………忙しそうですね」

レイフオンは執務机に積まれた書類の山を見てそう言った。

「戦後処理となるとやらねばならない事も多くてね。おかげで暫くは碌に眠れそうにないよ。っと、そうだ。お礼がまだだったね。ありがとう。君のおかげでツエルニで死傷者が出る事は無かったよ。生徒会長として感謝するよ」

「別にいいですよ。自分が生きるためでもあったし、貴方のためではなかったですから」

「それでもお礼は言わせて貰うとも。……さて、それで用件は何かな？ 見ての通り忙しいので、用件を手短に済ませようじゃないか」

本来ならばアポイントがあっても誰かに時間を割くことはしたくないほどの忙しさだ。しかし、それがレイフオンならば話は違ってくる。彼がここに来た要件にも予想が付いているだけになおさらだ。

「そうですね。では、用件ですが……………以前の転科の話を受けさせて貰う事にします」

「……………いいのかね？」

本来なら即座に書類を取り出したいところだが、教育者の一人として最後の確認を取る。

「はい。せっかく汚染獣を退けたのに、ツエルニが無くなるのは困ります。心配ないとは思いましたが、僕も力を貸した方がより確実なので」

ツエルニの武芸者が聞けば、確実に気分を害するだろう傲慢な台詞。しかし、たった一人で幼生体のほとんどを殲滅した彼だからこそ言える台詞だった。

カリアンは用意してあった書類を取り出す。

レイフォンはそれを受け取り、内容を確認するとサインをした。

内容は二つ。一般教養科からの武芸科への転科と奨学金をAランクにすることだった。

「さて、君には武芸大会で単独で動いて貰うために、小隊に入って貰いたい。小隊員ならば単独行動の指示が出せるのでね。まあ、小隊の対抗試合ではミロク君のように周りに合わせて手加減して貰う事になるが」

レイフォンは小隊の簡単な説明を受けると頷く。

「解りました。それくらいでしたら問題ありません」

「そうそう。本来小隊には小隊の勧誘を受けて入るものだが、今回は特例という事で推薦状を用意した。好きな小隊を選んで入るといい。まあ、既にどの隊に入るか予想は付いているが」

そう言うときカリアンのサインの入った推薦状と武芸科の制服を手渡した。

「失礼します」

レイフォンはそれらを受け取って退室した。

「……ツエルニの被害は大きかったが、得たものも大きい、か……」

これからどうなるか予想は付かない事も多いが、それでも少しはましな結果にするために努力する事にしようと、ひとまずカリアンは次の書類に手を伸ばした。

+

こうして君に手紙を書くのは何回目になるかな？

僕は元気です。ミロクも元気にやっています。そっちはどうだろう？

ミロクにも手紙を書くように言ってみたけど『書いた事が無いからどう書けばいいのか判らない。レイフォンが書いているなら俺が書く必要はないだろう。元気だと伝えてくれればそれでいい』だって。僕ではどうしようもないので、リーリンの方から何か言ってくれると助かるよ。

リーリン。君は嘘をつくな。僕がすぐに他の人と仲良くなれる訳がない。普通の人と一緒に、普通の学生生活なんて出来る訳がない。そう手紙で言ったよね？

………酷いね。僕は嘘なんてついてないよ。入学式の日に知り合ったメイシエンにナルキ、ミイフィは本当に仲良くしてくれているよ。バイト先で知り合ったミロクのいる小隊の隊長——ニーナ先輩もいい人だしね。

ツエルニが汚染獣に襲われました。初めは、僕はもう戦わなくてもいいと思ったけど、再び剣を取る事にしました。何をいまさらと、君や養父^{とつ}さん、院の皆は言うかもしれないけど、もう一度武芸を僕はする事に決めました。けど、今度は間違えないからもう一度だけ剣を取る事を許して欲しい。

ツエルニで知り合った人達が自分の夢を持っていて、未来に向かっている姿が眩しくて、それを失わせたくなかったから。思えば、君も院の皆もそんな風に眩しい姿をしていたのかもしれない。

だから、僕は皆を守りたいと思ったのかもしれないと、そう考えるようになりました。

いつか僕もそうなれたらと思うし、そうなれるように色々とバイトに手を出してもいます。武芸をしても、やり直す事を諦めた訳じゃないから。

君が、君の夢を失う事がないように祈っています。

親愛なるリーリン・マーフエスへ

レイフォン・アルセイフ

終戦と選んだ未来（後書き）

新たな日常と災難

はい、元気にしてる？

こちらにも忙しく学校生活してるけど、二人に比べたら全然平凡だよ。

この前手紙を送ってから、何通かまとめてこちらにやってきました。この手紙がレイフォンにいつ届くのか分らないけど、出来るだけ早く届けばいいな。

友達が出来ました。面白い人だけど、一緒にいるとすごく疲れるのが玉に瑕かな。

園の方は相変わらず賑やかです。養父さん^{とう}だけど、道場を開くことになりました。今までみたいな、園の子供たちを相手にするだけじゃない、ちゃんとした道場です。グレンダンで道場経営は大変だけど、近所の人たちが通ってきてくれるのでとりあえず収入になっています。あと、政府からの支援金の申請などもしてるから、こちらの心配はあまり必要ないかもしれません。レイフォンがお金を稼いでくれていたときほどではないにしても、何とかやっていけると思います。

こちらはいいとして、そちらは大丈夫ですか？ 病気とかはしてない？ 食事もちゃんとしてる？ レイフォンはあまり栄養の事とか考えないで作っちゃうし、ミロクにいたってはきちんと食べるかどうかすら怪しいしで、少し心配です。

たくさん友達が出来てるようで安心したけど………どうして女の子ばかりなのかな？

それが気になります。

もしかして、レイフォンってすごいスケベだった？ それともミロクの方？

そっちの意味では不安だな。やっぱり、ツエルニに行くのをもっと強く反対すれば良かったと思ってしまおうよ。

まあ、これは冗談という事にしておいてあげる。一応は、ね。

そうそう、これも一応。一応言わせておいて。

レイフォンが武芸を捨てなくて、私は嬉しいよ。

色々悩んで、それで解決したんだね。私はレイフォンが武芸を続けてくれる事を許すよ。きっと養父さん^{とう}だって許してくれると思うよ。でも勘違いしないで欲しいのは、それはグレンダンにいた頃のレイフォンでいて欲しいという訳ではないからね。

武芸に打ち込むレイフォンの姿は格好いいし、羨ましいと思ったけど、天剣授受者でいた頃のレイフォンはあまり好きじゃないよ。

この区別、解ってくれるよね？

手紙と一緒に来た事で、面白い話を聞けたよ。

もしかしたらレイフォンをびっくりさせられるかもしれない。

何かは教えない。

ちよっとしたビックリになれいいんだけどね。

それじゃあ、また手紙を送ります。

親愛なるレイフォン・ヴォルフシュテイン・アルセイフへ

リーリン・マーフェス

追伸

ミロクの手紙の件だけど、私よりも適任の人が手紙を書くそうなので、その人に任せる事にします。

初めて訪ねて来た時には、本当にビックリしました。いつの間に知り合ったのか知りたいから、こちらでも機会があれば訊いてみる

けど、返事を書くときに教えてね。

+

先日の汚染獣襲来より数日。

ようやく戦後の事後処理や復旧作業も終わり、今日から授業も再開されることになっていた。

とある教室の入り口に三人の女生徒がいた。

「くそ。臨時休暇もここまでか。この扉を開けると再び勉強の日々が来ると思うと、これが地獄の門に見えてくる」

「いいからさっさと教室に入れ。後ろがつかえている」

「ぐあ。開けたくない」

「……もういい。行くぞ、メイ」

「え、う、うん」

いつまでもごねるミイフィを無視してナルキは教室に入り、メイシェンも後に続く。

「あつ。おはよう、三人とも」

「おはよう」

ツエルニに来てから知り合ったクラスメイトのレイフォンとミロクが挨拶をしてきた。

「ああ、おはよう……む」

「お、おはよう……え？」

「ん。どうしたの？ 二人とも——って、ああ……！！
レイとん、服！ 制服変わってる！ 何々、何があったの？」

先程までの暗鬱とした様子から一転、目を輝かせてレイフォンに詰め寄るミイフィ。レイフォンの制服が、以前の一般教養科のものから武芸科のものに変わっていた。

「え、えっと……」

その勢いに押されてレイフォンはやや及び腰だ。
見かねたナルキは一先ず止めに入る。

「落ち着け、ミイ。そろそろ授業も始まるし、詳しい話は後にしろ」
「む。その特ダネ、予約だからね。他の人に詳しく話しちゃだめだよ」

しぶしぶミイフィが折れ、レイフォンはほっと溜息を吐いていた。

+

「ふーん、なるほど。汚染獣戦で戦って、武芸大会に危機感を持って転科したと、そういう事？」

「うん。まあ、そんなところかな」

昼休み。約束通りに三人の許に行くと、ミイフィは万全の準備でレイフォンを待ち受けていた。

テーブルには弁当だけでなくメモ帳とペンが置いてあるが、おしぼりもあるので衛生面でも気を遣っているようだ。その為ナルキもメイシェンもマナーを注意しようにもできないようで、顔を顰めていた。

「で、レイとんもひょっとして小隊のスカウトを受けてたりする？」
「スカウトは受けてないけど、小隊には入るよ。生徒会長からこん

なの貰ったし」

レイフォンはそう言うのと鞆の中から推薦状を取り出し、ミイフィに手渡す。

推薦状には、汚染獣戦の活躍によりレイフォン・アルセイフを生徒会長の権限により小隊に推薦するといった事が書かれていた。

「へえー。こんなのあるんだ」

「こんなものが貰えるとは……。やっぱり、レイとんは強かったんだな」

ミイフィとナルキが感心していると、メイシェンが心配げに割り込んできた。

「レイとん……いいの？ 武芸じゃない、他の事がしたいって言うてたのに」

「うん。今年ツエルニが負け越したら困るし、自分で協力しようって決めたから。頑張るよ」

レイフォンの答えにいくらかの前向きな感情を感じたのか、メイシェンは少し安心したようだった。

「レイとんが戦ってくれるなら、随分と心強そうだな。同じ武芸科としてよろしく頼む」

レイフォンとナルキは握手をする。

ミイフィはふむふむと頷くと、次の質問に移る。

「小隊に入るってことは、ミツ君もいるし、やっぱり第十七小隊？」
「うん。ミロクがいなくても、その方がいいかなって」

「ほう。その心は？」

「他の小隊だとある程度戦い方が決まったりするけど、出来立ての小隊なら僕を戦力に組み込みやすそうだからね」

「なるほど。では、第十七小隊の一員として、レイとんの参入をどう思いますか？ ミッ君」

「む」

メモ帳にペンを走らせたミィフィの矛先が、黙々と弁当を食べていたミロクに変わる。

「レイフォンは俺よりも強いし、手札も多い。人数の少ない部隊には心強いと思うぞ」

「え……レイとんって、ミッ君より強いのか？」

「そうだが……それがどうかしたのか？」

「いやいや、どうもしてないよ。これは書き応えの有りそうだったと思っただけで」

『武芸科に期待の新星登場』とかで、テンションが上がったミィフィを宥めているうちに、昼休みは過ぎていった。

+

放課後、レイフォンとミロクは練武館へと赴くと、部屋には既にニーナの姿があった。

「ん？ 来たか、ミロク。……レイフォン？」

レイフォンの姿を認めると、ニーナは目を大きくした。

「武芸科に転科したのか？ どうして第十七うち小隊に来た？ 何か用

か？」

「えっと。それはですね」

レイフォンは鞆から推薦状を取り出してニーナに渡し、経緯を簡単に説明した。

ニーナは推薦状を黙って読む。しばらくして頷くとレイフォンを真っ直ぐに見詰めてきた。

「大体の経緯は解った。その実力も汚染獣戦で見ているため、申し分ない事は知っている。我が隊としても即戦力となる存在は喉から手が出るほど欲しいのも確かだ。しかし、あの力は強すぎる。正直言って、私は恐怖を感じた。あの力を人に向けて、対抗試合で使う訳にはいかない」

ゆるぎなく、真っ直ぐにレイフォンを見て、ニーナは言った。あれは人に向けて使っていないものではないと、危険だと言った。

レイフォンは困ったように笑う。

「まあ、確かに。先輩の懸念ももつともですけど、鋼糸は対抗試合では使いません。使えないと言った方が正しいですけど」

「何？」

「強力すぎて、使われると試合にならないと、生徒会長と武芸長に封印されましたから。だから僕が使う武器は剣だけです」

「そうだったのか。いや、会長たちの判断も当然か……しかし、それなら……」

ぶつぶつと何かを呟くニーナ。

どうしたものかとミロク見るが、肩をすくめただけだ。

「……えっと。先輩？」

「ん？ ああ、すまない。では、レイフォン。お前はこれから――」

鋼糸を使わないレイフォンの実力を知りたいと、ミロクと組み手をする事になった。

準備運動で身体をほぐしている間に他の人達もやって来た。

フェリと、面識は無いもののシャーニッドがいる事は知っていたが、汚染獣戦のときに鍊金鋼ダイトを用意して貰った先輩――ハーレイが十七小隊のダイト・メカニックだったのは驚いた。向こうも驚いたようだったが、事情を話すと納得してくれた。

シャーニッドは気さくで、あまり武芸者っぽくなかった。遅れた事にニーナが怒っても慣れたように飄々と受け流していた。

フェリは無言のまま本を読んでいたが、怒りのオーラが立ち昇っているように見える。転科や十七小隊に入ること伝えていなかったからだろうか？ 刺々しい視線が突き刺さる。何か機嫌を取ることをした方がいいかもしれない。

「二人とも準備はいいか？」

レイフォンとミロクの身体が十分温まって来た頃を見計らって、ニーナが声をかけてきた。

「はい」

「いつでもどうぞ」

剣を正眼に構え、ミロクを見据える。

「お前の錆び落としにはちょうどいいだろう。本気で行くぞ」

「うん。僕も本気で行くよ」

意識が戦闘用に切り替わる。戦闘に不要な感情が切り離され、目

の前の相手を観察する。手に持った双剣はだらりと下げられているが、隙は無い。どう攻めるか……。

「では、いくぞ。——始め！」

ミロクから動いた。旋剄。目にも留まらぬ高速移動から、双剣を振り下ろす。

受け止める。青玉鍊金鋼の剣との間に火花が散った。サファイア・ダイト

弾き飛ばし、今度はレイフォンが剣を振り下ろす。防がれた。再び火花が散る。

お互いの顔に笑みが浮かんだ。

剣戟の嵐が吹き荒れる。

切り裂かれた大気が空隙を埋めようと唸りを上げる。

激突し、相克し合う二種類の斬線は、秒刻みで描かれる桁を上げていく。

一瞬という概念ですら切り刻まれそうな超高速の剣戟は、一般人では残像すら見る事は適わない。

巻き込まれれば、斬られたことすら分からないままに死んでしまいそうな攻防が繰り広げられていた。

一際強くぶつかり合い、鏢迫り合いになる。ギリギリと剣と双剣が鬨ぎ合う。

「一年もブランクがあってこれとは、凄まじいな。まったく」
「ミロクも。やるね」

ギインとお互い相手を剣で弾いて飛び退く。間合いが開き、相手の隙を窺う。再び激突しようと両者が足に力を込めた瞬間、

「そこまで！」

横から止められた。

「くう」

「む」

いきなりの制止で、二人は体勢を崩してしまう。

「そこまでだ。レイフォンの実力は解った。これ以上はいい」
「しかし……」

途中で止められ、ミロクは不満そうだ。まあ、これからまだやろうという時に待ったがかかれば仕方ないかもしれない。

「……お前たちがここの修繕費を出すなら続けてもいいぞ」
「はい？」
「あ」

言われて周囲を見渡すと部屋がえらい惨状になっていた。

「タイル、捲れてるね」
「……ああ。窓ガラスも罅が入ってるな」
「……そうだね」

ニーナがどこか怖い笑顔を浮かべている。

「さて、二人とも。まだやりたいか？」
「「止めておきます」」

＋――＋
練武館が使えなくなったので、訓練は無しで、解散という事になった。

帰り道、レイフォンはフェリと一緒に帰っていた。

ミロクは動き足りないらしく、外縁部に行くと言って別れたので、二人だ。

「小隊に、しかも私のいる小隊に入るとは初耳でした。意外とサプライズ好きなんですね」

レイフォンにフェリの嫌みが突き刺さる。

「えーと、それはですね。……すみません。言うのを忘れてました」

下手ないい訳は聞きたくないという眼光に負け、レイフォンは素直に白状する。

汚染獣戦後、フェリとは連絡先を教え合い、端末を使ってメールのやり取りをするようになっていた。まだ、特に助力の要請や呼び出しを受けた事は無いが、フェリが念威繰者以外の道を探す手助けの一環で、借りを返す内の一つだそうだ。

連絡し合っているというのに、小隊の件を事前に知らされていないかったので、フェリは怒っていた。拗ねているのかもしれない。

「まあ、もう済んだ事ですから、許してあげましょう。ただし、次から一言言う事。いいですね？」

「はい」

「では、このままレストランに行きましょう。勿論お代はレイフォ

ン持ちで。新作のデザートは割高で、諦めようかと思っていたのですが、いい財布を手に入れました」

「え？ あの、ちょっと待って下さい。何で僕が――」

「『どんなことでもする』と言ったのは、どなたですか？」

「……僕ですが、それでも――」

「『私の貸しは高いですよ。トイチなんてものじゃありません。法外な利子を付けて返してもらいます』。この言葉に頷いたのは、誰でしたか？」

「……ワタクシデゴザイマス」

「文句は？」

「アリマセン」

項垂れながらレイフォンはフェリに付いて行く。

この日。レイフォンの懐は恐ろしいほど寒くなり、レイフォンはただ盛大な溜息と共に肩を落とすしかなかった。

＋――＋

ふざけています。まったくもってふざけています。何なんですか？ 貴方は。

レイフォン様がグレンダンを出なくてはならない事は知っていました。いえ、むしろ知らない方がどうかしています。

ですが、ミロクまでそれに付いて行くことなんて聞いていません。多少なりとも関わりのある人物にはそういった事柄は伝えておくものです。非常識にもほどがあります。貴方と手合わせに行ったはいものの、家が空き家になっていたため、管理者に呆れられた私が酷く間抜けのようではありませんか。

おまけに今の住所を知る人物を探すのにも手間取り、大変でした。手紙の一つもよこさないとは一体どういう見なのですか？

まあ、愚痴と言うか、文句はここまでにしておきましょう。

そちらはどうですか？ 私は元気です。

レイフォン様は武芸を続けているのですか？ ミロクも腕を落したりなどしていないでしょうね？

最終目標と現目標に追いつくのではなく、追いつかせて貰うなど不愉快でありませんからね。

しかし、近くに目標がないというのは、どこか虚しいものです。まったく、ガハルドのような愚か者の所為でレイフォン様はおろか、ミロクまでいなくなるとは。今からでもあの愚か者を殺し行こうかと思ったくらいです。大した実力も無いのに天剣授受者になれると思うなど、愚者の極みです。身の程をわきまえて欲しいと思います。

話が逸れてしまいましたね。

とにかく、次に会う時は必ずミロクも、レイフォン様も越えて見せます。それまでそちらも鍛錬を怠るような事の無いようにして下さい。

返事くらいは書いて下さい。待っています。

ミロク・レイヴンへ

クラリーベ

ル・ロンスマイア

+

迷い込んできたその手紙を、細く白い指が折り目にそって元に戻し、しまいこんだ封筒を慎重に、勝手に開けてしまった事が誰にも判らないように願いながら元に戻した。

新たな日常と災難（後書き）

入学式でメイシェンを助けたのがミロクのため、リーリンの手紙は誤配されても読まないだろうと思い、クララにミロクあての手紙を書いて貰いました。サヴァリスに気に入られるなら、この人もきっと気に入っている筈だと思ったので（なぜかミロクがバトルジャンキーに好かれる体質になってしまった）。

移ろい行く日常（前書き）

遅くなりましたが、更新です。

移ろい行く日常

どうしてこんな事になったのだろうか？

昨日のフェリに強制的に奢らされた精神的ダメージが尾を引いていたが、それでも授業には何とか出ようと教室に到着した瞬間に、それは起きた。

瞬きの間に身体に縄が巻き付き、ぐるぐる巻きにされて身体の自由を奪われ、床に転がった。

「レイとんの捕獲完了！」

「観念してお縄につけ、このスケコマシが」

ミイファイとナルキが自分を捕らえている。

「変わった挨拶だが、何かあったのか？」

「……えっと、その。ちよつと……」

ミロクが、おろおろしているメイシェンに疑問をぶつけている。それらの全てがどうでもいい。ただ心に思うことは一つだけ……

「僕が一体何をしたああー！ー！ー！！！！」

レイフォンの悲痛な叫びがこだました。

+

「さあ、きりきり吐け、このモテ野郎！」

「何？ そのモテ野郎って。未だに状況が掴めないんだけど」

異様なミイフィのテンションの高さに逃げ出したくなるが、現在ミノムシ状態になって床に転がっているレイフォンにはまともに動くことができなかった。

「とぼける気か。——ならば、これを見てもまだ同じ事が言えるか！？」

「はい？　——なっ！」

とぼけるも何も本気で何故こんな状況になっているのか意味の解らなかったレイフォンだが、ミイフィの突き出した雑誌『週刊ルックン』のある見開きの記事を見て声を失った。

そこには見覚えのあるレストランで高そうな料理を食べているフエリと、コーヒーを啜っている自分の写真が大きく載せられており、見出しには『あのミス・ツエルニに恋人！？　相手は武芸科の期待の新星！？』とあった。

「これを見てもまだとぼけられるか！」

「……………」

なるほど。この記事の事を聞きたかった訳か。

周りを見ると、男子生徒からは嫉妬の眼差しが、女生徒からは好奇の眼差しが向けられていた。

言われてみれば、男女二人だけの食事（自分はコーヒー一杯を飲んだだけだったが）。その言葉だけを聞くとデートか何かのように聞こえるだろう。自分もそのように考えるかもしれない。実態を知らなければ。

一先ず誤解を解いておこう。

「…………これは…………無理矢理に奢らされただけだよ…………」

悲壮なオーラを出して、事実を口にする。

あれ？ おかしいな。雨は降ってないのに周りが濡れて見えるや。

「え？ ……あゝ、えっと、そ、そうなんだ……」

「げ、元気出せレイとん。今、縄を解く」

レイフォンの姿を憐れに思ったのか、ナルキが慰めるように肩を叩き、解放してくれる。憐れむなら、最初から縛らないで欲しかった。

「……まったく、もう。誰だよ、こんな記事書いたのは」
「あ」

自由になったレイフォンはミイフィの手からルックンを奪い、その記事の投稿者の欄を見る。この記事の所為で、朝っぱらから縛られるわ、転がされるわ、散々だ。一言文句を言わなくては気が済まない。

投稿者「新人…ミイフィ・ロッテン」

「……………」

「……………」

レイフォンは記事から目線を外すと、忍び足で教室の外に向かうとするミイフィと目が合った。

ミイフィが笑みを浮かべる。レイフォンも笑みを浮かべる。

ミイフィの額に冷や汗が流れる。レイフォンの額に青筋が浮かぶ。

「ミイ。どこに行くのかな？」

素晴らしい笑顔のままミイフィに歩み寄る。

「い、いや。ちょっとお手洗いに行きたいかなって。だから、できれば用は後で……」

じりじりと後退りするミイフィ。

「大丈夫。僕の用はすぐに終わるから。心配いらないよ、痛みは一瞬だから」

「い、いや、レイとん？ 私は一般人で武芸者じゃないから！ 何をするつもりか知らないけどその辺を考慮して……マジでごめんなさい！！ 悪気は無かったの！ ただ記者としてスクープを逃すなつて！ 解る？ 解るよね！？ むしろ解つて！！」

「君はいい友人だったよ」

「既に過去系！？ ナツキ！ ミツ君！ ヘルプ！ レイとんの目がヤバいっ！」

「すまないが、この『ミス・ツエルニ』というのは何だ？」

「ああ、それは去年ミスコンがあつてだな——」

「放置！？ 痛っ！ レイとん、アイアンクローは止めて！ 痛、痛っ、イタタタッ！ つ、潰れる！ 脳が、脳味噌が出るって！！」

+

「あいたたた、まだ痛い。酷い目に遭ったよ」

「自業自得だよ」

「有ること無いこと書くせいだな」

「事実確認をしなかったミイが悪いと思うが」

「……大丈夫？」

「メイっちゅ。優しいのはメイっちゅだけだよ」

メイシェンに抱き付くミイフィ。

昼休み。メイシェンが弁当を多めに作ってきたということで、レイフォンとミロクはご相伴にあずかっていた。

場所は少し遠出をして一般教養科上級生の校舎が近くにある食堂まで来ていた。

この食堂にはテラスがあり、そこは養殖科の利用する淡水湖が見渡せる位置にある。

席料として飲料類を注文した後、並べられた弁当をそれぞれがつまんでいく。

「けど、助かったよ。昨日の出費がかなりきつかったから」

「ああ。そうでなくても助かる。それに美味しい」

「ほ、本当？」

「？ 嘘を言っただうする？」

「……そ、そうだね。……ありがとう」

「札を言うのはこっちだと思うが……」

「美味しいって、言われると……嬉しい、から……」

「そんなものか……」

顔を赤くしながら嬉しそうにするメイシェン。それを横目にミイフィが思い出したように疑問を口にした。

「そういえばさ……今日はまた、なんでここにしたわけ？ いや、私もいつかはここに来るつもりだったけど」

今日、この場所に来ようと言い出したのはナルキだ。

養殖科の近くにあるこの場所は景色もいいことから、女生徒への人気が高い。

だからそれを調べたミイフィが、いつかこの場所に行こうと話していたのはレイフォンも知っている。

だけど今日、ナルキがいきなりそこに行こうと言い出したことにはレイフォンも疑問に思っていた。

「いや、実はな……ミツ君に頼み事があってな」

少し言い辛そうにナルキは口を開く。

「わざわざここで？」

ミイフィが怪訝そうに、ナルキに問い返した。

ミロクは黙ってナルキの話に耳を傾けていた。

「うん。ここでなければ駄目と言うわけではないんだが、承諾してくれれば、そのまま話を持っていけるからな」

「……大変な事なのか？」

「大変な事もあれば、ただ暇ばかりの時もある。疲れる時もある、まったく疲れない時もある。でも、時間だけはキツチリと過ぎる」

「……悪いが、謎かけは得意ではない。はつきり言ってくれ」

「そうだな。こんなのはあたしらしくないな」

ミロクの言葉に苦笑しながら、ナルキは溜め息を吐く。

「……もしかして、ナツキのお手伝い？」

「ああ、そうだ」

メイシェンの言葉に、ナルキは苦笑したまま答えた。

ナルキの手伝いと言うのは、彼女がバイトをしている都市警の仕事だ。

「俺がか？」

意外な話の流れに、ミロクが疑問符を浮かべる。

「別に小隊から引き抜きをしたいわけじゃない。入ったばかりのあたしに、そんな権限あるはずもない。ただ、武芸科には都市警への臨時出動員枠というものがあるらしい。あたしも入ってから知った。その出動員が今、定員を欠いているらしくてな」

何でもミロクとナルキが知り合いだと言うことを上司に知られ、聞いてみてくれと頼まれたらしい。

だが、ミロクは小隊員の訓練の他に機関掃除のバイトまでしている。それ故に多忙だから、ナルキも無理はしないでいいなんて言っていた。

しかし、ミロクは躊躇う様子も無く、即座に承諾した。

「分かった、やろう」

ミロクの発言に一番驚いた顔をしたのはナルキだった。

「いいのか？ 自分で言っておいてなんだが、小隊員は臨時出動員エリートなんて引き受けないんだ。小隊員がやる仕事じゃないって」

ナルキのこの発言にはレイフオンは首を傾げてしまう。

「それはおかしいことじゃないかな？ 力が必要な時に必要な場所で使われるべきだ。小隊員の力がそこで必要なら、小隊員はそこで力を使うべきだと思うけど」

実際、主として汚染獣との戦いを引き受ける天剣授受者でも、治安維持のために警察機関に出勤を要請される時もある。

天剣授受者の中にはどうしようもないくらい、汚染獣にその力を使うしかない力や精神の持ち主もいたが、それ以外はよほどのことがない限り受けていたし、レイフォン自身も何度か経験はあった。

レイフォンにとっては、小隊員のように権力に与する武芸者が力の使いどころの好き嫌いを語るのは、とても違和感のある話だった。

「同感だな。そもそも一般の武芸科の学生だけで対応しきれず被害が出た時に、『何故小隊員は動かなかった？』と問われて『小隊員エリートのする仕事じゃないからしなかった』などと言われても、それで周囲が納得すると思えん」

「……本当にいいのか？」

「くだいな。俺がいいと言っているのだから、そこまで気にする必要は無い」

「いや……ここまで来てあたしが言うのもなんだが、二、三日考えてからでもいいんだぞ。それでも遅くはない」

「大丈夫だ。機関掃除の仕事や、小隊のことをちゃんと理解してくれるのなら問題無い」

「そういうのはあたしが何とかするよ。あたしが頼んでいるんだからな」

「なら、この話はここまでだ」

まだどこか申し訳なさそうなナルキに、ミロクは手を叩いてこの話は終わりだと言うように切った。

+

+

そんな訳でミロクは、ナルキに連れられてその上司へと会いに行く。

「養殖科の五年、フォーメッド・ガレンだ。よろしく頼む」

小柄だが、大工か鍛冶屋でもやっているのかと言うがっしりとした体格の男がミロクに言う話を要約するところなる。

都市外から訪れるキャラバンや旅人たちが寝泊りするビルに宿泊する流通企業ヴィネスレイフ社に属するキャラバンの一団がいた。

碧壇都市ルルグライフに所属する彼らは、ツエルニで数都市の新聞データと小説や漫画、他にファッション等の雑誌、映画等のエンタテインメントデータを売りに来た。

これに対してツエルニ側は、同じように新聞データとツエルニで作成されたエンタテインメントデータ、農業科で作られた“発表済み”の新種作物の種子を売った。

キャラバンの一団は、データ売買が終わっても宿泊施設に一週間滞在している。

「それ自体はおかしなことじゃない。彼らが自前の放浪バスを所持していなければ、な」

一般に都市を行き来する放浪バスに到着時間の決まりは無い。各々が自由に移動する都市間を渡るのだから、スケジュールなど組み立てられる筈もない。彼らはそのせいで足止めされないように自前の放浪バスを所持していたのだろう。

しかし、彼らはツエルニに留まり続けた。

「何故なら、奴らの目的は普通のデータ売買ではなかったからだ」

つい先日、農業科の研究室が何者かに荒らされていた。調査すると農業科のデータバンクに不正アクセスの痕跡が発見された。

持ち出されたデータは、未発表の新種作物の遺伝子配列表。これ

を不正に持ち出したとなれば、窃盗および学園都市連盟の連盟法違反に当たる。

「奴らが怪しいのだが、まだ決め手になる証拠が不十分だ。

どういう訳か知らんが、連中は事件のあった日から慌ただしい。まるで何かを探すようにあちこち走り回っているそうだ」

ツエル二側が動く前に都市外に出られてしまうと手の出しようがない。そのためこちらは早く動きたいが証拠が不十分。向こうは犯人であるなら早く逃げ出したいが、何故かそれが出来ない。

しかし、ツエル二側に天秤が傾いた。目撃者がいたとの報告があったため、確認を取り、明日にでも交渉人がデータの返還、そしてデータコピーによる不正持ち出しを防ぐため、データ系統の商品と所持品の没収を宣言しに行くこととなったのだ。

「つまり、俺は相手が抵抗した時に備えての戦力ということですか？」

「ああ。向こうが実力行使してきた時の戦力が把握できてなくな。いま都市警にいる武芸科の連中で対人の実戦経験がある奴は希少で不安が残る。

「すまないが期待させて貰うぞ、ルーキー」

笑いながらフォーメッドはミロクの肩を叩く。そこにフォーメッドの期待が張り付いているような気がした。

+

トントントンと、軽快なリズムで食材を切る音がキッチンに満ちる。

「ねえ、ミロク」

キッチンナイフで食材を刻みながら、レイフォンは隣のミロクに話しかける。

「何だ？」

「僕らって、一応お客さんだよな？」

「そうだな」

シチューを鍋で煮込みながら同意するミロク。

「何で僕らが料理してるんだろう？」

「知らん」

放課後、昨日の手合わせのせいで練武館はまだ使えないため、帰ろうとしていた所でフェリが現れた。

曰く、カリアンが内々に話があるとのことだ。

その途中で何日分買ったのか分らないほどの食材を購入。荷物持ちレイフォンと二号はフェリの——正確にはフェリとカリ안의住む、もはや寮ではなくマンションと呼ぶべき建物の一室に案内された。

そして、何故か客分である筈の男二人が料理を作ることになった。ロス兄妹が料理とは無縁の生活をしていることの発覚と、外食だけの食事をしていてなお余裕のある家との貧富の差を見たただけ言うておくことにする。

「さて、本題なんだが……」

カリアンを交えて四人での食後、フェリが皿を片付け、お茶を用意してくれている中、カリアンがレイフォンとミロクを呼んだ理由

を話し始める。

カリアンがそれと同時に差し出したのは、1枚の写真だ。

「この間の汚染獣襲撃から、遅まきながらも都市外の警戒に予算を割かなくてはいけないと思い知らされてね」

「いいことだと思います」

それは当然の事であり、他の都市では普通に行われていることだ。けどそのことに気づかないほど、今までのツエルニは平和だったらしい。

学園都市と言うだけに、電子精霊も細心の注意を払っていたのだろう。

学生の学生による学生だけの都市。

聞こえはいいようだが、悪く言ってしまうえば学生と言う未熟者達の集まりでしかないのだ。

「ありがとう。それで、これは試験的に飛ばした無人探査機が送ってよこした映像なんだが……」

カリアンがレイフォンに渡した写真の画質は、まさに最悪だった。全てがぼやけ、ハッキリ写っているものがまるでない。

これは、大気中に広がる汚染物質のためだ。

無線的なものはこの汚染物質に阻害されてしまい、短距離でしか役に立たない。

唯一何とかするのは念威操者による念威端子の通信だが、それでも都市と都市を繋ぐには無理がある。

この写真には念威操者は関わっていないのだろう。

「解り辛いけど、これはツエルニの進行方向500キルメルほどのところにある山だ」

カリアンにそう言われて、レイフォンもこれが山だと言うことを理解した。

「気になるのは、山のこの部分」

カリアンは写真を指差し、その部分を指で囲む。

「どう思う？」

それ以上は何も言わない。

レイフォンやミロクが先入観を抱かないようにとの配慮だろう。その上でこのツェルニではもっとも知識のあるであろう二人に聞きたかった。

できれば自分の思い過ごしで、間違いであって欲しいと願いながら……

レイフォンは何も言わずに、写真を見る。

写真を離したり、目を細めたりして何度も確認する。

確認し、何度も確認し、そして目が疲れたのか、その目を揉み解しながら確信した。

「ミロクはどう思う？」

写真を覗くように見ていたミロクは自分ほど“これ”との戦闘経験は無いが、それでも同意見のようだった。

「俺では“そう”という事しか解らない。レイフォンの方が詳しい判断が付くのではないか？」

「そうだね……」

お茶を入れてきたフェリが、邪魔をしないようにレイフォンが持っていた写真を覗き込む。

「それで、どうかね？」

「ご懸念の通りではないかと」

「ふむ……」

カリアンの願いを打ち砕く事実を口にする。

「何なのですか、これは？」

理解できないフェリが、レイフォンに問う。

「汚染獣ですよ」

その言葉を聴き、フェリは瞳を丸くして驚いた。

驚いたが……すぐさま視線をカリアンへと向け、先ほどよりもきつく睨み付けた。

「兄さんは、また彼に——いえ、彼らに戦えと言うつもりですか？」

「実際、彼らに頼るしか生き延びる方法がないのでね」

フェリの睨みに動じず、カリアンは淡々と答える。

「何のための武芸科ですか！？」

都市を護る役目を持つのが武芸者——武芸科に存在する学生であり、そのために高待遇を受けているのだ。

それを、限られた僅かな人物を頼るなど間違いではないのか？
他の武芸科の生徒にも対応させろと思うフェリだが、

「その武芸科の実力は、フェリ……君もこの間の一件でどれくらい
のものか解ったはずだよ」

「しかし……」

ツエルニの武芸者は……弱い。

学園都市故に未熟者しかおらず、この間は汚染獣の中で最弱である
幼生体にすら歯が立たなかったのだ。

あの時、レイフォンやミロクが居なかったら……彼らが戦ってい
なかったらと思うと、今でもぞっとする。

「私だって、できれば彼らには武芸大会のことだけを考えて欲しい
けどね、状況がそれを許さないのであれば諦めるしかない。で、ど
う思う？」

本心を漏らしつつ、真剣にレイフォンに問う。

今のツエルニには、レイフォンとミロク以外に頼れる人物がいな
いのだ。

「おそらくは雄性体でしょう。何期の雄性体かわかりませんが、
この山と比較する分には一期や二期というわけではなさそうだ」

汚染獣には生まれ付いての雌雄の区別は無く、母体から生まれた
幼生はまず、一度目の脱皮で雄性となり、汚染物質を吸収しながら
それ以外の餌を、人間を求めて地上を飛び回る。

その脱皮の数を一期、二期と数え、脱皮するほどに汚染獣は強力
なものへとなっていくのだ。

その上で繁殖期を向かえた雄性体は次の脱皮で雌性体へと変わり、
腹に卵を抱えて地下へと潜り、孵化まで眠り続ける。

それを踏み抜き、襲われたのが、前回の汚染獣襲撃である。

「あいにくと、私の生まれた都市も汚染獣との交戦記録は長い間なかった。だから、強さを感覚的に理解していないのだけど、どうなのかな？」

「一期や二期ならそれほど恐れることはないと思いますよ。被害を恐れないのであれば、ですけどね」

「ふむ……」

それを聞き、ひとまずは安心するカリアンだが、次のレイフオンの言葉には、流石にそうは行かない。

「それにほとんどの汚染獣は、三期から五期の間に繁殖期を迎えます。本当に怖いのは、繁殖することを放棄した老性体です。これは歳を経るごとに強くなっていく」

「倒したことがあるのかい？その、老性体というものを？」

「三人がかりで。あの時は死ぬかと思いましたね」

「俺はありません。グレンダンで老性体と戦う資格を持つのは天剣授受者だけなので」

その言葉を聞き、カリアンとフェリが息を呑む。

圧倒的な強さを持つ二人の武芸者。その一人が死を覚悟し、もう一人はその戦場に立つことすら許されないほどの老性体。

その事実、二人は怯えさせるには十分だった。

+

復興作業が未だ続くツエルニ。

深夜に近い時刻となっても多くの学生が都市外縁部の作業場へと向かう、もしくは寮へと帰る流れを作っている。

そんな人の流れから外れた場所に、一つの影が闇に息を潜めてい

た。

放浪バスの停留所からさほど離れていない、大きめの公園の敷地内の雑木林の中で、茂みに隠れるように影は隠れていた。

「おい！　いたか！？」

「いねえっ！　そっちはどうだ！？」

「こっちもだ！　くそっ！　あのがキ、一体何処に行きやがった！？」

「そんなに遠くには行っていない筈だぞ！」

「苦労して手に入れたんだ。さっさと見つけようぜ！」

「！」

耳を澄ませると聞こえてくる声に顔を歪ませる。

複数の足音が近づいてくる。目を瞑り、口を押さえて息を潜める。足音が遠のいていく。どうやら見付からずにすんだようだ。ほっと、安堵の息を漏らす。

しかし、いつまでのこの場所に留まったままではいられない。

周囲の気配を探る。

追手はいない。この場所を大分離れたようだ。

茂みから出て走り出す。

林の中を躓きそうになりながらも必死に影はその場を走り去った。

少女が似たる面差し

早朝。

第十七小隊のメンバーは、訓練のために野戦グラウンドに集まっていた。

今のところ、ここにはレイフォン、ミロク、ハーレイ、そしてシャーンニッドが集まっていた。

珍しくシャーンニッドは時間通り訓練に来ており、代わりにニーナが遅れていた。フェリが遅いのはいつものことだった。

「で、そいつは一体何なんだ？」

シャーンニッドがハーレイの持ってきたそれを見て、苦笑を浮かべながら訊ねた。

手押し車で運ばれてきたそれは、剣だった。

それも、とても大きな。

縦にすれば、レイフォンやミロクの身長と同じくらいあるだろう。まあ、剣といっても木剣だった。ただ、剣身の部分に幾つも鉛の錘が巻きつけられている。

「新型の錬金鋼ダイトの開発をしてるんですけど。基礎密度の問題で、どうしてもこのサイズになっちゃう計算なんですよね。一度完成しちゃえば、軽量化もできるんじゃないけど」

「新型の錬金鋼ダイト？ 確か、ハーレイの専門は開発じゃなかったろ？」
「そうですよ。だからこれは、うちの同室の奴が考えたんです。まっ、データを集めて調整するのは僕の方が上だし、開発自体が、そいつだけじゃなくてうちの三人での共同が条件で予算がおりちゃったから」

「ふうん、めんどくさそ」

「あ、酷いなあ」

「お前さんを馬鹿にしてるんじゃないくて、俺には無理って話だよ」

「……まあ、シャーニッド先輩ならそうですね。」

で、ミロク。これ使える？」

「はあ……」

流石にその馬鹿げた大きさに呆れていたミロクだが、ハーレイに促されて柄を握る。

片手だけで剣を持ち上げる。

手首にずっしりと重量がかかる。

「どう？」

「片手に一振りずつ持つには重すぎですね」

「そっか。ミロクは二刀使いだもんね。一刀ならどう？」

「一刀も使えないことはないですけど、扱えるだけです。使いこなせはしないので。」

けど、レイフォン。お前なら大丈夫だろう？」

そう言って、ミロクはレイフォンに剣を手渡す。

「ちょっと重いけど、まあなんとか……」

言って、レイフォンは少し離れてから、剣を振るった。

正眼に構えての上段からの振り下ろし。元々の重量に遠心力が合わさって、振り下ろした後で体が崩れた。

「ふむ」

一度、深呼吸をしてレイフォンは内力系活剋を走らせる。

肉体を強化した状態で再度、剣を振る。

空気が唸る。いつものように大気を裂くことができていない。引きちぎっている。

「わぷっ！」

巻き起こった突風を受けて、ハーレイが声を上げていたが、レイフォンは気にせずに剣を振る。

下段からの斬り上げ、左右からの薙ぎ、突きと、様々な型を試していく。

鼓膜を支配する風の吠え声を起こしながらも、レイフォンはどうもしっくりいかない様子だった。

傍から見ても遠心力に振り回されそうになる感じが否めない。

「ふっ」

呼吸を一つ、そこからレイフォンの動きが変化した。

剣の重さがレイフォンの重心を揺さぶる。先程まで重心を保とうとしていたが、今度はそれに合わせて重心の位置を修正していく。

剣の重さが起こす体の揺れを力任せに御するのではなく、その重さによる体の流れを制御する。

利用している。

やがて、レイフォンはその場に留まるのではなく、グラウンドのあちこちに移動しながら剣を振り続けた。

重さに引かれた方向に従ってグラウンドを無秩序に移動していく。無秩序に、あちこちに移動していたレイフォンがグラウンドを真っ直ぐに進んでいく。その頃には、レイフォンの動きは最初の頃とはまったく違っていた。

剣を使う基本的な動作とは違う。

剣を振ると同時に地面から足が離れ、体が浮く。宙で身体を回転

させ、そこに剣の重さを利用して次の一撃を放つ。その一撃で起こる力の流れを即座に次の一撃のための流れに変化させる。それを繰り返すうちに、レイフォンの足はほとんど地面に着いていることはなかった。

「……………」

その様子を呆然とシャーニッドとハーレイが眺めている。

内力系活剋が変化、旋剋。

脚力を強化させ、真上に跳躍。

宙高く舞い上がったレイフォンは、さらに剣を振る。

剣が起こす力の流れが、レイフォンの身体を振り子のようにあちこちに移動させながら落下させる。

着地、そして再びの跳躍。

何度も何度繰り返していくうちに、滑空時間が少しずつ延びていく。剣の重量による力の流れを制御して空中を移動するのは地面にいるよりも遥かに難しい。レイフォンは何度も繰り返すことでそのコツを掴んでいるようだった。

十数回の目の着地で、レイフォンは跳ぶのを止めた。

「ふう………」

動きを止め、体内に残っている活剋の残滓と熱を息とともに吐き出す。

「流石だな」

自分のように天翔剋を使うわけでもなく、ただの技量だけで空中を自在に移動したレイフォンに、ミロクは羨望の眼差しを向けながら賞賛の言葉を贈る。

「なんかもう……なんてコメントすればいいのか分らないね」

「うちの後輩は出鱈目すぎんだろ」

ハーレイもシャーニッドも呆れたような眩きを漏らしていた。

「まあ、いいや。ハーレイ。新型の錬金鋼ダイトの開発も結構だけだよ。頼んでた奴できてるか？」

「ああ……はいはい、できてますよ」

そう言うのと、ハーレイはロッカールームに走って行き、ケースを持って戻ってきた。そして、中から二本の錬金鋼ダイトを引っ張り出す。

「銃ですか？」

時に放出系とも呼ばれる外力系衝剋が得意なシャーニッドは、十七小隊では遠距離からの火力支援の役割を担っている。

「こんだけ人数が少なかったら狙撃だけってわけにもいかないからな。まあ、保険みたいなもんだな」

言いながらシャーニッドは、ハーレイから受け取った二本の錬金鋼ダイトに剋を走らせる。

復元された銃型の錬金鋼ダイトを見て、ミロクは目を見張った。

「ごついですね」

銃身部分が縦に分厚くなっていて、上下は刃という訳ではないが尖っている。銃口の周辺にも突起が施されていて、打撃することを前提として考えているとしか思えない造りだ。

彼が普段使っている軽金鍊金鋼リチウムダイオのものは違う、頑丈さに定評のある黒鋼鍊金鋼クロムダイオを使っていることからそれが分かる。

「注文通りに黒鋼クロムにしましたが、劉の伝導率が悪いから射程は落ちますよ」

「かまわね。これで狙撃する気なんてまるきりないしな。周囲十メートルの敵に外れさえしなけりゃ問題無い」

ハーレイの言葉を軽く流し、シャーニッドは手に馴染ませるように銃爪に指をかけ、銃をくるくると回した。

「銃衝術ですか？」

そんな姿を見て、レイフォンがそう訊ねた。

シャーニッドが口笛を吹く。

「へえ……流石はグレンダン。良く知ってんな」

「いえ、グレンダンでも知ってる人は少ないと思いますけど……」

「銃衝術ってなんだい？」

ハーレイがレイフォンに訊ねる。

銃衝術とは、簡単に言えば銃を使った格闘術だ。銃型の射撃武器は、遠距離では圧倒的に優位だが、接近戦では取り回しの問題からナイフや短剣などには一步も二歩も遅れを取る。

それを克服するために銃を使った格闘術が開発された。それが銃衝術だ。

「へえ……そんなのシャーニッド先輩が使えるんですか？」

「ま、こんなの使うのは格好つけたがりの馬鹿か、相当な達人かのどっちかだろうけどな。……ちなみに俺は馬鹿の方だけだな」

そう言って、いくつかの型を取りながらシャーニッドはにやりと笑った。

「……遅れました」

透き通るような細かい声を流し、フェリがやってきた。

ガラス細工のような美少女の姿は周囲に凍りつくような緊張感を与えるが、それに慣れている十七小隊のメンバーはすぐに挨拶を交わしてその空気をなじませる。

「さて、来てないのはニーナだけか」

「そう言えば、ニーナが最後ってのは珍しいな」

「そう言えばそうですね」

シャーニッドの言葉に、ミロクも首を傾げる。

十七小隊の強化に誰よりも血道を上げ、常に一番にやってくる筈のニーナが、今日はいまだに姿を見せていない。

「なくんか、ニーナがいねえとしまらねえな」

シャーニッドが言い、わざとらしく欠伸をする。

その時、

「すまん、待たせたな」

出入り口から声がした。

「遅いぜニーナ、危うく寝そうになるところ——だ？」

シャーニッドが欠伸を漏らしながらニーナの方を見ると固まった。無理もない。

シャーニッドだけでなく、レイフォンも、ミロクも、もちろんハーレイも、フェリですら固まっていた。

ニーナの姿が可笑しかった訳ではない。彼女は戦闘着に身を包み、いつも通りの強い意志を感じさせる凜とした佇まいだ。

では、なぜ誰もが固まったか？

理由は彼女の傍らにあった。

ニーナの前、そこに長い金色の髪の少女がいた。

「……えーと……」

いち早く硬直から復帰したシャーニッドが頭を掻きながら、少女を指差す。

「まさかニーナ……！ その子はお前の隠し——ゴフツッ！」

「そんな訳があるかっ!!」

馬鹿なことを口走ったシャーニッドの脳天にニーナの拳が振り下ろされ、鈍い音を立てた。

+

「はぁ？ 迷子を拾っただぁ？」

「ああ。昨日のバイトの帰りにな」

「放浪バスに乗って来てはぐれたんじゃないのか？ 警察に連れて行くもんじゃねーのかよ、普通？」

「いや、それが……」

「先輩……その子ってもしかして、ツエルニじゃ……？」

レイフォンが少女を指しながら疑問を口にする。

「ええ、それは俺も思いました。面差しがそっくりです」

ミロクも同意する。

「ツエルニ？」

シャーニッドが首を傾げるが、それは流される。

「やはり……お前たちもそう思うか？」

だが、この子は人間だぞ。都市の意識……電子精霊が生身の肉体を持つなど有りうるのか？」

「うーん。それは僕も……」

「そんなん本人に直接訊いてみりゃいいじゃねーか。可愛らしいお嬢さん。お名前は？」

どこからかバラの花を取り出して少女に話しかけるシャーニッド。
しかし、

「……」

少女は黙っているだけで何も答えない。

「おおお……この俺様の質問をシカトとは……」

「馬鹿ですね」

「げふっ」

屈辱に震えるシャーニッドにフェリが追い打ちをかけた。効果は

拔群だ。シャーニッドは沈黙した。

「この子。昨夜から一言も喋らんだ。名前も何処から来たのかも分らんなのでな……。」

ひとまずツエルニに何らかの異変が起こった事も考慮して直接生徒会長に相談してみたのだが……。」

『分かった。では、こちらでその子の身元を早急に調査しよう。その間……どうやらその子も君に懐いているようだし。そちらで預かっていてくれないかね』

「……だそうだ」

「押しつけられましたね」

「それでハーレイ。すまんが訓練中この子の面倒を見てくれないか？」

「オーケー、いいよ。……けど、人間になった電子精霊か。ちょっと採血とかして調べたい気——も」

再び落ちる拳^{てつこ}。不穏な発言をしたハーレイは、幼馴染の怒りの一撃で昏倒した。

「やはり交代で面倒を見よう」

「そうですね」

「別に構いませんが。俺は都市警の臨時出動員になって、今日の午後の訓練は出られませんよ」

「む。貴様、そんなことまでして体を壊したりしないのか？」

「この程度でどうにかなるほど柔じゃありませんよ。バイトの方も折り合いを付けてくれるそうなので、大丈夫です」

「……ならいいが……しかし、都市警に行くならば、この子の事を聞いてみてくれるか？」

「分かりました」

そんな訳で、十七小隊による子守りが始まった。

十七小隊子守り録。

シャーニッドの場合。

歳は幼くとも女性の扱いは慣れているといったところか。

シャーニッドの話に少女は声こそ出さないものの、楽しそうに無邪気な反応をする。

「シャーニッド先輩は、こうゆうの得意そうですね」

「そうだな。だが、あいつばかりに任せてもおけん。そろそろ交代を……」

フェリの場合。

「じゃ、次はフェリちゃんの番だな。任せた！」

「私も……ですか？」

少女がフェリをじーと見詰める。

フェリも少女をじーと見詰める。

「……………」

「……………」

無言のまま二人は、ただ相手を見詰め続ける。

「……………あれは。意思の疎通が出来ているのか？」

「さあ……」

ミロクの場合。

少女はとても楽しそうにしている。

ミロクは洗面で、時折顔を痛みで顰めている。

「俺の髪には、何か興味をそそる因子でも含まれているのだろうか……」

どこか遠くを見詰めて呟くミロクの髪を、少女はいじって遊んでいた。

「ツエルニですね」

「ああ。ツエルニだな」

レイフオンの場合。

「う……え……あ……」

どうしたらいいのか分らず、右往左往するレイフオン。
それをじーと見る少女。

「あいつは子守りが苦手なのか」

「孤児院で育って、慣れてる筈なんですけど」

「ただのヘタレですね」

†—————†

早朝の訓練も区切りが付き、少女を中心に皆和やかな雰囲気とな

る。

（案外皆馴染んでいるようだな）

子守りなどすることになって一時はどうしたものかと思ったが、ニーナはそんな様子を見て安心する。

「だからよお。名前無いと不便だからツエルニって呼んじゃっていいんじゃないかってアリヤ？」

少女は、真っ直ぐニーナに向かって走り、抱き付く。

「やっぱ一番に懐いているのはニーナなんだな」

「むう……」

からかうように笑うシャーニッドの言葉を否定できず、唸るニーナ。

しかし、無邪気に抱きついてくる少女の顔を見ると悪い気分にはならない。

優しく頭を撫でてやると嬉しそうに目を細める。

「隊長。そろそろ俺は都市警の方に行きます」

「む。そうか。すまないが、都市警の方で」

「はい。その子の身元の事ですネ？ 聞いてみます」

「ああ。私も後でこの子を連れて行く。頼むぞ」

では、とミロクは野戦グラウンドから出ていった。

「我々も朝はこれで上がろう。続きは放課後だ。遅れるなよ」
「へーい」

「お疲れ様です」

「……失礼します」

「すまない。待たせてしまったな」

着替えを済ませ、ロッカールームから出ると、着替えが終わるのを待っていた少女に詫げる。

少女はフルフルと首を振る。気にしていないということなのだろう。

「取り敢えず。生徒会長のところへ行こう。何か分かっているかもしれない」

ツエルニの街を少女の手を引きながらニーナは歩いて行く。

それを陰から見る者達がいた。

彼らは自分達の探していたものを見付け、仲間と連絡を取り、集まった。

そして、標的が生徒会棟までの道のりの半ばほどに來た時、彼らは行動を起こした。

「——！？ ツエル……」

一人の男が脇道から現れ、少女を攫っていった。

男は殺戮を使って気配を消していたのか。接近に気付けなかったニーナは不意を突かれ、繋いでいた手を離してしまう。

「待てっ!!」

それを後悔するも一瞬。即座に男の後を追う。

街を抜けて湧水樹の森へ逃れようと駆けるさらに三人の男が現れる。

(!?! 他にも仲間が……)

「貴様ら……一体何者だ!?! その子をどうするつもりだ!?!」

男達は答えず、森の奥へと駆けていく。

「くっ」

慣れない場所を茂みを突き破りながら進んでいるため、ニーナと男達の距離は徐々に開きつつあった。

(いかん。このままでは見失う……どうする? 一度戻って皆を呼ぶか、それとも――)

判断に迷ったその時、少女の助けを求めて手を伸ばす姿が目に入った。

それにより、ニーナは冷静に考える事が出来なくなった。

(あの子一人……私の力で守れなくてどうする!!)

剣帯から鍊金鋼ダイトを引き抜いて復元。

脚力を内力系活剷で強化して少女を抱える男に跳びかかる。

「ツエルニを返せっ!!」

それを見た男の一人が舌打ちをして錬金鋼ダイトの剣を復元した。

「面倒なガキだな」

（錬金鋼ダイト！！ 相手も武芸者か！！）

構わず立ち塞がった男に鉄鞭を振り下ろすが、鈍い金属音と共に受け止められてしまう。

「くっ」

「この程度か……」

一旦距離を取ろうと後退するが、相手が剣を構えて迫る方が早い。後退を止め、鉄鞭を交差させて防御の体勢を取る。

しかし、敵は目の前の一人ではない。

背後に回り込んでいた男に後ろから背中を強打される。

「な……」

体勢の崩れた所をさらに目の前の男に攻撃を受け、受けきれずに吹き飛ばされて地面に転がる。

「う……」

「ははっ。流石は学園都市。武芸者もヒョコばかりだ」

「……貴様ら……何処の都市の武芸者か知らんが……弱者を守るために与えられた天の恩恵である剋の力をこのような事に使うとは……武芸者としての誇り《プライド》はないのか！！」

鉄鞭を杖の代わりに、立ち上がりながら男達を叱責する。
だが、ニーナの言葉を聞いた男は、それを鼻で嗤う。

「本当の戦争も知らん子供が、随分偉そうな事を言ってくれるじゃないか。与えられた物をどう使おうがそれは俺らの勝手だろう？ 大体お前みてーな弱っちい奴に限って誇りだの、正義だの喚き散らすんだよなあ」

再び振るわれる男の剣を受け、ニーナは倒れ伏す。

「——さ。とっとこの都市から出るぞ」

「ったくこのガキ。手間掛けさせやがって……」

「お前らこいつは大事な商品なんだから丁寧に扱えよ」

「へいへい。分かってるって」

「う……ツエル……」

少女に向かって手を伸ばすが、体は動いてくれない。

（守らねば……私があの子を……ツエルニを……守らなくて……は……）

そこで、ニーナの意識は闇に落ちた。

†—————†

「……輩。しっかりして下さい先輩。一体何があったんですか!?!? 先輩!?!」

酷く焦った声によって意識が戻った。

「……レイフォン?」

「大丈夫ですか?」

「何をそんなに……」

焦っているのかと訊こうとした瞬間。フラッシュバック。
気を失う前の出来事が脳裏に蘇った。

「ツエルニ……！！ ツエルニはどうした！？」

レイフォンの胸倉に掴みかかって怒鳴るように問う。

「せ、先輩」

「あの子が……あの子が攫われたんだ！！」

「落ち着いて下さい」

落ち着いてなどいられるかと、一気に捲し立てるように、起きた
事を話す。

「余所の武芸者達があの子を連れて行った……！？」

「そうだ！！ 急いで探さねば！！ フェリの念威で搜索を――」

「待って下さい」

「悠長に構えている暇は無い！！ 奴らはあの子を外部に連れ出す
気だぞ！！」

レイフォンは状況を理解していないのか？ こうしている間にも
奴らが少女を連れて都市から逃げるかもしれないというのに。

だが、次のレイフォンの言葉で、血が昇っていた頭に水をかぶせ
られたような気持ちになった。

「待って下さい。」

どうして一人で追ったんですか？」

「え？」

「相手が複数。しかも人質を取られているという状況下で。一旦退

却して僕らを応援に呼ぶ事は考えなかったんですか？」

心臓を鷲掴みにされたような気がした。

「し、しかしその隙に外に出られては……」

「先輩一人の戦力で向かって行って勝てなければ、意味がありません。一人でどうにかなると思ったんですか？」

「……………」

何も言い返す事が出来ない。レイフォンの言うことが正しく、自分の判断と行動が間違っていたのだから。

「僕らの力はいらないと思ったんですか？」

レイフォンの言葉一つ一つが胸に突き刺さる。

「わ、私は……私はただ……」

私はただ……何なのだろうか？ 何を言っても言い訳にしかないように思えて、続きを言うことが出来なかった。

（見付けました）

「！ フェリ！？」

突然した声に振り向くと、念威端子が浮かんでいた。

「戦闘の気配がして駆け付けてみると先輩が倒れていて。しかもあの子の姿が無いものですから……」

フェリ先輩に頼んで探して貰っていたんです」

（隊長が追っていた者思われる輩が……二名ですが。あなた方のい

る地点から約3キルメル南方にて確認しました)

「二人……？ 確か四人いた筈だが……」

(あの子の確認は出来ませんが。外縁部に向かっているようです)
「分かりました。その二人は僕が追跡します」

「待て。あの子が攫われたのは私の責任だ。私も一緒に――」

「いえ、僕一人で十分です。怪我をした先輩では、恐らく邪魔になります」

「――っ」

私は、一体何をしている？

「じゃ、僕は行きます。先輩は探查子から指示を……先輩？」

つまりぬ意地を通す為に、あの子を危険に晒し。

己の力を過信して、仲間を信頼することすら忘れていた――

「守る……だと……？ 笑わせるな……これでは、これではまるで

……」

まるで正反対の事をしているではないか。

膝をつき、座り込んで拳を握り締める。

胸を占めるのは後悔と、己に対する怒りのみだった。

「……昔。僕は何もかも一人で背負いこんで、取り返しのつかない失敗をした武芸者を知っています」

ぽつりと、レイフォンはそんな事を言っていた。

「……レイフォン……？」

その武芸者とは誰の事なのか？ レイフォンはどこか辛そうな、悲しそうな顔をしていた。

「先輩がツエルニを大事に思っている事は知っています。でも僕は……誰かが、そんな風になるのは嫌なんです。

先輩。今は皆同じこの学園の生徒なんですよ」

そう言って、レイフォンは男達を追跡するために駆け出して行った。

（全く……今後はこんな一人で突っ走るような真似はお控え願いたいものですね）

「フェリ……その……すまない」

（本当に迷惑です）

念威端子越しだというのに、不機嫌ですというのがはっきり伝わる声だった。

「迷……」

こうはっきりと言われると、解っていても堪えるものがあつた。

（それと今しがた。そこから北に4キルメル先に生徒外と思われる人物を二名発見しました。この二人も先程追っていた連中である可能性が高いです。今隊長の許ヘシャーニッド先輩が向かっていますので、合流次第追跡を。ミロクさんには事情を連絡しておきます。警察の方からもそれで応援を得られるでしょう。……責任を感じていらっしやるのでしたら、少しは役に立って下さい）

……ああ、そうか。

普段はやる気を見せないフェリやシャーニッドが力を貸してくれている。

それはつまり――

「……フェリ。私はすぐにその二人を追う。シャーニッドにも北へ向かうように言ってくれ」

（え？）

あの子を守りたいと思う気持ちは皆同じなのだ。

（また同じことを繰り返すとしても？）

「あの子がこの都市から出る事だけは絶対に阻止せねばならない。相手を確認し、外部に出る気配があれば足止めする。その間に応援も到着する筈だ」

（……自己犠牲のおつもりですか？ それこそ迷惑です）

「そうではない。私は……自分一人の力で全てにかしようと決め込んでいた。だが、このような事態を招いてしまったにも関わらず、それでも力を貸してくれる仲間がいる。ならば、私が自分の役目を果たさんでどうする！！」

フェリの呆れたような溜息が聞こえた。

（……本当に……貴女は全くもってどうしようもない人ですね）

「……そうかもしれんな……」

錬金鋼ダイトを復元し、北を向く。

「行くぞ」

救出（前書き）

今年初の投稿となります。今年も引き続き読んでもらえればうれしいです。

救出

「それにしてもフェリ……本当にこんな道筋であいつらに追いつけるのか？」

ニーナは、地下機関部の一人がようやく通れる程度の狭い通路を、壁やら飛び出たパイプやらに身体を圧迫されながらずりずりと進んでいた。

「近道です。彼らのいる下層に降りるにはこの機関部を通るのが最短ルートですから。……まあ、整備士用非常通路なので若干狭い場所ですが……あとせいぜい200メートルなので頑張って下さい」

迷惑をかけた私への嫌がらせにワザと面倒な道を教えているのでは？

ニーナがそう疑ってしまうほど狭い通路の先は見えず、暗い闇が異様な威圧感を放っているような気がした。

「ツエルニの発見は？」

（まだです。恐らく二人組の側にいるのでしようが。探查子を近づけすぎるとバレて振り切られる可能性が……）

「やはり直接近づくしかないか……」

（そうですね。レイフォンが到着した模様です。あと、ミロクさんと都市警の課長に当たる人物と連絡可能です）

「分かった。警察の方と繋げてくれ。レイフォンの方の様子はこちらと警察の両方に聞こえるように」

場所は宿泊施設の近く。

「保護していた少女が攫われたか……こちらでも動きたいところだが、こっちはこっちで人員を割けない状況でな」

ニーナから事のあらましを聞いたフォーメッドは難しい顔をして唸った。

そもそも人手が不足しているからミロクに臨時出動員の話を持ち掛けたのだから、応援をよこせと言っても無理な相談だろう。

「ならば手早く終わらせましょう。それなら警察も動けるのでは？」
「そうですよ、課長。誘拐など許される事ではない筈です。盗難の件を片付けて十七小隊の応援に向かいましょう」

ミロクの言葉にナルキが頷く。誘拐と聞いて正義感を刺激されたのだろう。

「それは解っているが」
（私からもお願いします）

ニーナも会話に加わってくる。
暫く考え、フォーメッドは警察としての義務と、十七小隊に恩を売れることから了承した。

「分かった。奴らの盗難の証拠は十分だ。予定を早めて今から宿泊施設に行くとし——」

（お話中すみません。レイフォンが犯人二人を確保しました。これから事情聴取に入ります）

「ん？　そうか。こっちにも繋げてくれるか？」

（分かりました）

ミロク達は、探査子からの会話に耳を傾けた。

+

ツエルニの街。

普段学生達が住む集合住宅の一つの屋上に、二人の男が降り立つ。

「——やれやれ。ようやく仕事が終わるな……あの子供が逃げ出したりするから予定が狂いまくりだ」

男一人が溜め息を吐きながらぼやく。

「だな。まあ、データの件でまだ警察は何も言ってこないんだ。宿で待ってるあいつを拾って、とっとこんな都市出ちまおうぜ」

「そうだ——な!？」

いつの間にか一人の学生が男達の前に立っていた。

剣帯を吊るしていることから武芸者なのだろう。その少年は見かけに反した落ち着いた様子で口を開いた。

「すみません。少々お尋ねしてもよろしいでしょうか？」

「なっ、何だお前!？」

いきなり現れた少年に男達はうろたえるが、少年は気にせず続ける。

「実は僕達が保護していた女の子が何者かに攫われてしまいました。その犯人らしき人物がこの辺りに潜伏しているようなのですが。何

か心当たりは――」

「また武芸者か……面倒だ。やるぞ」

小声で男は片割れと話し合い。少年を倒す事を決める。

「残念だが。そんなもん知らねえよ!!」

錬金鋼ダイトを復元し、少年に襲いかかる。

男達は思い至らなかった。

手練である筈の自分達に、少年はまるで気配を悟らせることなく接近した。それがどういう事なのかを。

男達はニーナと戦いを経て、油断していた。学生武芸者など恐れるに値しないと。

数秒後。目の前の少年を侮った事を、男達は後悔した。

まあ、もつとも。

油断していなかったとしても、結果は変わらなかっただろうが。

「……やはり貴方達ですか……レストレーション」

少年が復元言語を呟く。

そこからは一瞬だった。

外力系衝剋の変化、蝕壊。

武器破壊の剋技は男達の武器を粉々に破壊し、同時に放たれた衝剋はもう一人の男の意識を奪った。

「なっ、なっ、なっ」

男は首筋に剣を突き付けられ、その圧倒的な実力差を感じ取り、戦慄した。

「何で……お前みたいのが、こんな学園都市なんか——」
「もう一度聞きます。心当たりは？」

少年の顔には何の感情も浮かんでいなかった。

それが男の恐怖をさらに膨らませる。目の前のこいつは、自分を痛め付ける事に何の躊躇いが無いと理解出来たからだ。

「わ、分かった！ 話す！ 話すよ！！」

「ふむ。フェリ先輩」

（はい。会話を隊長と警察に繋がります）

少年が視線で話せと命じてくる。

+

「お、俺達はキャラバンだが……他所の都市から、盗んだデータチップや誘拐した武芸者の子供を別の都市に売っているんだ……」

（何だっ！？）

その声に反応したのはニーナだった。盗難や武芸者を売る、という行為に対し本気で怒りを覚えている様子だった。

その場にいたのなら殴りかかっていたかもしれない。

レイフォンも自身が孤児であるが故に思う所があるが、努めて冷静に尋問を続ける。

「あの少女は何者です？」

「あの子供は藍曲都市コーヴァスの有名な武芸者一族の娘だ。どんな都市だって有能な武芸者は欲しがらるだろう？ それに、退廃都市メオルは知っているか？ 人身売買を合法として認めてる都市もあるから、中には違法行為をしてでも……って考える連中もいるんだ

よ」

「……メオル？ ……では……あの都市の奴隷は……」

「中には身寄りを亡くしただけの奴もいるだろうが、おそらくブローカーに売られた奴だろうな」

「……なんて……事を……」

初めて知る事実と言葉を失うレイフォン。

そこでふと気付いた。

自分の友達は、グレンダンに来る前はどこにいたのか。

「！ ミロク！ 返事をつ！ ミロク！」

＋――＋

「キャラバンだと？ 盗難と誘拐は同一犯の仕業か？ っと、レイヴン？ どうした？ 黙り込んで」

フォーメッドが探査子から聞こえる会話に唸るが。ミロクの様子がおかしい事に気がつく。

疑問には思っていた。

（――それに、退廃都市メオルは知っているか？ 人身売買を合法として認める都市もあるから、中には違法行為をしてでも……って考える連中もいるんだよ）

汚染獣の危機と、都市間戦争という2つの滅びの危機に対して抗いの力となるのは武芸者のみだ。

だというのに、あの腐った都市は一部の武芸者を道具や駒のように使い捨てていた。それこそただの娯楽として。

そんなことが、どうして可能なのかと疑問には思っていた。

「ミツ君？」

「おい、どうした？」

周りで誰かが話しかける声がする気がした。

しかし、そんなものを気にする余裕など欠片もない。頭に血が昇って沸騰しそうだ。

気が付けば、ナルキ達を置いて宿泊施設の前まで来ていた。

久しぶり——いや、初めてかもしれない激しい怒りの感情に引きずられて剄が荒れ狂う。

それを感じ取ったのか、古びたトランクケースを持った男が飛び出て来た。

事前に見せられた書類に書かれていたキャラバンの一人。

ミロクの無秩序に迸る剄の奔流を認め、トランクケースを片手にダイト錬金鋼を復元する。

そうか。お前の……お前達のせいだ。

「俺は……俺達は……」

あんな苦しみを強いられていたのか！

内力系活剄の変化、旋剄。

「なっ!?! ごほっ!?!」

一瞬で数メルの間合いを詰め、衝剄を纏った渾身の拳が男の腹部を捕らえた。

一切の手加減無しの一撃。一般人ならば内臓破裂を起こすほどの

衝撃が男を襲った。

「……はあ……ぐ……」

たまらず男はトランクケースと錬金鋼ダイトを取り落とし、腹を押さえ
て悶える。

ミロクは容赦しない。容赦できるだけの精神的な余裕など存在し
ない。

男の顎を蹴って身体を浮き上がらせ、今度は顔面に拳を叩き込む。
男は吹き飛び、背後の壁にめり込む。

そこでナルキやフォーメッド達都市警が到着した。

「ミツ君！」

「おい！ レイヴン！ それ以上はよせ！！」

フォーメッドが男の姿を認めて制止の声を上げる。

既に男に意識は無い。鼻の骨が折れて血を流していて、これ以上
攻撃を加えたら死んでしまいそうな状態だった。

だが、ミロクはそんな事は知らないと再び拳を振りかぶる。

「待——！」

「俺達メオルの奴隷の痛み……思い知れっ！」

制止を無視しての一撃。

命を奪っても構わないとばかりに放たれた拳が男に届く寸前。

「そこまでにしときなよ。ミロク」

「レイ、フォン？」

駆け付けた友に手首を掴まれて止められた。

「これ以上やったら彼は死ぬよ？」

「あ……」

ようやく頭が冷えてきた。

「らしくないよ。感情に任せて戦うなんて」

「……すまん」

「まだ終わりじゃないよ。隊長の援護に行かないと。大丈夫？」

「……ああ。頭は冷えた。大丈夫だ。ありがとう」

「すみませんが、この人と、その二人をお願いします」

レイフォンはそう言って壁にめり込んだ男と気絶した二人組を指す。尋問が済んだから残った方も気絶させて運んだのだろう。

「あ、ああ。分かった」

「すみませんでした、フォーメッドさん。処罰は後ほど……」

あまりの出来事に呆けた返事を返すフォーメッド達を置いて、ミロクは一足先に駆け出したレイフォンの後を追った。

「『俺達メオルの奴隷』？」

ぼつりと零したナルキの呟きは、その背に届く前に消えた。

+

「フェリ。何があった？」

（ミロクさんが貴女以上に激怒し、犯人の仲間の一人を半殺しにしました）

「何？ ミロクが？」

どちらかという冷静で、常に戦闘では落ち着いて無駄の無い行動をするのがニーナの知るミロクだ。その彼が激情のままに動いたと聞いて驚く。

少女が余所の都市から誘拐された事やそのショックで声が出ない事を聞き、怒り心頭だったニーナだが、フェリに窘められて少し落ち着きを取り戻していた。

（その話は後です。もうすぐ出口なので悟られないように殺戮を）
「……分かった」

ニーナは気配を消して、狭い通路から放浪バスがいくつも留まっている広い空間に出た。

物陰に隠れながら、注意深く周囲を探っていく。

「準備は出来たか？」

「ああ。もう出られる」

「……あいつらだ……」

一つの放浪バスの傍で、先程ニーナを気絶させた武芸者ともう一人の男が話していた。

「子供はどうした？」

「また逃げ出さないように、縛って奥に閉じ込めておいたよ。後はあいつらを待つだけだ」

「そうか。あいつら。何処で油売っていやがる？」

悟られないように一番近くのコテナの陰に隠れる。

（あのバスは……キャラバンとしても動いているとの事ですし、自前のもののようなですね。元は何処からか盗ってきたのかもしれないが）

「あれで逃げるつもりか……」

陰から顔を出し、放浪バスを見る。恐らくあの中に少女がいる筈だった。

剣帯に手が伸び、鍊金鋼ダイトを握り締める。

「行かせるか……!!」

陰から飛び出して行こうとすると、フェリからの制止がかかった。

（駄目です、隊長!）

「何故止める!？」

（真正面から向かって行っても先程と結果は同じです。応援が到着するまで待つて下さい）

「しかし……!」

（隊長が倒れば彼らは逃げるでしょう。能力差から言って、戦闘での足止めは無理です）

「く……」

「どうした？」

「後片付けだ」

不甲斐無いと思いながらも、フェリの指示通り隠れたまま待機する。

（落ち着け。私の役目は奴らを倒す事ではない……この都市から出

さなければいいのだ。だが……何も出来んとは……)

「何だ。またお前か」

「!!」

背後から聞こえた声に、弾かれたように上に跳ぶ。一瞬前にニーナのいた場所を刃が通り過ぎて行った。

空中で体勢を整えると、ニーナを気絶させた武芸者がいた。

「あのまま寝ていれば良かったものを」

気付かれていた。

そう理解して鉄鞭を復元する。

「少女を返してもらどうぞ!!」

ニーナの言葉に男が笑う。

「やってみろ。今度は峰打ちでは済まないぞ」

目の前に迫る凶刃を鉄鞭で受ける。

落ち着け。

自分に言い聞かせる。

目的はこいつらを倒す事ではない。ただ、敵の攻撃を耐える事だけを考えると。

相手の方が実力が上だが、その攻撃を防ぎ、受け流す事はミロクとの組み手で慣れている。

首を刈ろうとする剣を防ぎ、振り下ろされるものは勢いが乗り切る前に弾く。

「ほう……さっきに比べて随分冷静じゃないか」

男が粘りを見せるニーナに感心したように息を漏らす。

「だが——お前じゃ無理だ」

ずぶりと、一気に速度を上げた男はニーナの左腕に剣を突き刺した。

「お前は弱い」

「う、あっ……!!」

（隊長!!）

ニーナの呻きとフェリの叫びが響いた。

「馬鹿な奴だ。一対一ならどうにかなると思ったのか？」

男はニーナの左腕を踏みつけて地面に押しつける。

そのまま傷口をぐりぐりと踏みにじる。

「分かっただろう……誇りや正義なんてただ死に急がせるだけ。力無き理想はただの幻だ。お前は結局何も出来ない。諦めろ」

私には力が無い……

掲げた理想も、やっと見つけた大切なものも、それを守るための力も、いつも私の手の届かない場所にある。

いつか絶望に呑みこまれるのではないかと怯えながら、それらを手に入れようとひたすら手を伸ばしてもがくばかりだ……

——それでも。

「それでも私は、お前達止めてツェルニを救ってみせる。私には志

を同じくする仲間がいる!!」

ニーナの目は、自身が地面に押しつけられ、左腕から流れる血と土埃に塗れてなお絶望に染まっただけではなかった。

「絶対に諦めんぞ」

「……お前……今の状況が分かってないのか？」

男は、ニーナを珍獣か何かを見るようだった。
その時、探査子からノイズが出た。

「？」

（フェリ……？ ……いや……これは――）

（たす……けて……）

（まさか私の探査子が何者かに乗っ取られた！？）

遠く離れた場所ではフェリが驚愕していた。

「なんだ？」

（……………）

「……！ そうか……お前はそこか……」

探査子の様子に気を取られていた男の足を跳ねのけて、左腕で傷など知らぬと衝倒を放つ。

「いけえええ!!」

「しまったっ……」

「なっ!!」

バスに残っていた男が衝剄を防ごうとするが、もう遅い。

衝剄はバスに衝撃音を伴って叩き込まれた。

「バスが……!!」

「あの子は……念威繰者！ フェリの探査子を使って自分の居場所とバスの内部を教えてくれた……おかげで何処を狙えばいいか分かったぞ」

衝剄の衝撃で壊れたのか放浪バスの扉が開き、中から少女が這い出した。

「ぐッ……」

「これでもう外には出られまい……ざまあみろ」

「この、ガキっ……」

静観していた男も鍊金鋼ダイトを復元して近づいてくる。

二体一の不利な状況。加えて瞬発的な内力系活剄で無理に振るったせいで傷が悪化した左腕は限界で動かない。

「いい加減。くたばれ!!」

男達が迫る。

勝機は微塵もない。このままでは殺されるだろう。しかし。

「足止めは果たした……後は……今ここで斃れようとも」

私は第十七小隊を信じる！

覚悟を決めて最後の力を振り絞ろうとした瞬間。

「勝手に覚悟を決めないで下さい」

「同感だ」

ニーナの背後から衝剄が奔り、男達を吹き飛ばした。

「ミロク……レイフォン!!」

（隊長。まだです!）

ダメージが少なかったのか男の一人は起き上がって、少女の許に行く人質に取った。

「!!」

「くっ」

「しまった」

「動くな!! このガキがどうなっても——」

パン。

男が鍊金鋼ダイトを少女に付きつけようしたところで銃声が響き、その手から武器を弾き飛ばした。

「なっ」

「はっはあ。ヒーローは遅れてやって来るってね!」

見れば、シャーニッドが銃を掲げて喝采を上げていた。

今のうちにと。狙撃したシャーニッドに気を取られた隙に近付き、顔面めがけて鉄鞭を振り下ろす。

「痴れ者が!」

今度こそ男は意識を失った。

都市警も到着し、事件は収拾に向かっていた。

「嬢ちゃんは無事保護出来たし。誘拐犯共も警察に引き渡した。これにて一件落着だな！」

「ああ」

「でもシャーニッド先輩はほとんど役に立ってないですよね」

軽快に笑うシャーニッドにフェリの言葉が突き刺さる。

あれこれ話していると、少女が駆け寄り、ニーナにしがみついた。

「~~~~~!!」

傷口を掴まれ、ニーナは声にならない悲鳴を上げる。

「ツエ、ツエルニ……ではなかったのだな……だが……お前が無事で良かった……」

優しく少女を撫でてやる。

そこへ、フェリが復元した重晶鍊金鋼の杖を手渡す。
バーライトダイト

少女の念威を受け、花卉状の念威端子が舞う。

（わたしのなまえは、フィオレっていいいます。たすけてくれて、ありがとう。おねえちゃん）

救出（後書き）

既にお分かりの方も多いかと思いますが、この話はコミック版レギオスを多少改編したものです。本来登場したツエルニに似た少女の名前は出てこないのですが、勝手に決めさせて貰いました。公式に決まっていたらすみません。ちなみに「フィオレ」は「花」という意味です。何となく少女のイメージが花だったのでこれにしました。

目覚める恐怖

ツエルニの一面にある都市警察署の一部屋。そこにはナルキやその上司であるフォーメッドを始め、今回の事件に関わった主要な者達——十七小隊の面々が集められていた。

咳払いをひとつし、フォーメッドが話を切り出した。

「まずは今回の事件の解決に尽力してくれた事に対して礼を言いたい。事件も未然に防がれ、拐かされた子の未来も護る事が出来た」

フォーメッドの言葉は本来めでたい事の筈だ。だが、誰もが喜ぶような仕草を見せなかった。

誰もが真剣な表情でその場に居る。その中で最も雰囲気重いのはミロクだった。前を向いているようで、どこか遠い所を見ているような視線だ。

「解決されたのは喜ばしい。だが、レイヴン……ミロク・レイヴン」
「……はい」

フォーメッドに名を呼ばれたミロクは、感情を感じさせない声で返答を返す。

「保護された少女に関しては良い。元々頼んでいたデータ盗難の件も、同一犯ということで決着は着いた。だが……如何に犯罪者とは言え、相手を重体にしたのはやり過ぎだ。理由を話して貰えるか？
その……なんだ……」

フォーメッドは言い辛そうに口を噤んだ。

ミロクが半殺しにした男は重体で、一步間違えれば死んでいても可笑しくない状態だった。いや、レイフォンが止めていなければ、ミロクは男を殺していただろう。

そのため、その場に居合わせた者の中にはミロクに対して恐怖を抱く者まで出てきてしまった。

理由を明らかにすれば、あるいは何らかの対処も出来るということとで、ミロクに近い者が集められたのだった。

フォーメッドはその理由をミロクが口にしたのを聞いていたが、聞き間違いかもしれない。それに、事実であったとしても勝手に話しているものか判断が付かないが故に、それを聞く場でもあった。

「……あの時言っていた通りですよ。だから許せなかった。それだけです」

「……メオルの奴隷……か。お前さんは、昔そうだったと？」

「なっ……」

フォーメッドの確認の問いに、初耳だった者は驚き、言葉を失う。

「……………」

ミロクは答えない。しかし、この場合の沈黙は肯定だった。

フォーメッドは暫し考えるかのようにしてから頷く。

「秘密ってのには二種類ある。他人に話したくなる秘密と、死んでも話さないと覚悟する秘密だ。俺ではどちらか判断できんが、前者なら話すかどうかはお前さん次第だ。まあ、警察官として事件を解くのに必要などんな手段を使っても訊き出すが……これは違うかな」

「……………」

どれほど時間が経ったのか。ミロクは固く閉ざしていた口を開いた。

退廃都市。腐りきった貴族による支配。道具として使い捨てられる奴隷。

包み隠さず、ただ事実だけを淡々と口にしていった。

実体験を伴ったその話にフォーメッドは眉を寄せた程度だったが、ニーナとナルキの反応は凄かった。

声が出ない、と言うのが相応しいだろう。二人とも言葉を無くしながらミロクの言葉を聞いていた。

一通りの話が終わり、フォーメッドはやや気怠げに溜息を吐く。

「……ひとまず、この事を聞いた他の連中には言い触らしたり、詮索しないように言っておく。他は、まあなんとかフォローしておくとするか」

「ありがとうございます」

話すべき事はもう終わったと、ミロクが部屋を去ろうとする直前で、ニーナが立ち上がり叫んだ。

「ミ、ミロクッ！」

「……何か？」

「あ……い、いや……その……」

ニーナの問いかけにミロクが足を止め振り返る。その表情は無表情で、どんな事を考えているのかが判らない。

そのミロクの無表情に圧倒されて、ニーナは息が詰まったように呼吸を止めた。

何を言いたかったのか、自分ですらまとめる事が出来なかった。結局、言葉が見つからなくてニーナはミロクから視線を逸らした。

「……すまん。何でもない」

「いいですよ、隊長。なんとなく言いたい事は解かりますから」

ミロクはそこでようやく無表情を崩した。浮かんだのは苦笑だった。しかし、どこか泣くのを我慢しているようでもあった。

「同情する必要はありませんよ。哀れんで欲しいとも思ってません。俺がどう生きてきたのかを理解……いえ、知っておくぐらいの気持ちで十分です。」

隊長は怪我してるんですから、きちんと医者に掛かった方がいいですよ」

ただそれだけ言い残し、ミロクは部屋を後にしていった。

ミロクが去っていった部屋には、ただ沈黙しか残らない。誰もが言葉を発する事が出来なかった。

その中で動く者がいた。レイフォンだ。部屋を後にしていったミロクを追うようにしてレイフォンもまた、立ち上がった。

「僕も、失礼します」

「レ、レイとん！」

会釈をしながら部屋を出ようとしたレイフォンは、ナルキの声に足を止めた。

ナルキはレイフォンの傍にまで寄っていき、どこか戸惑ったような表情をしたまま何か言おうとしている。

やがて、意を決したようにナルキが顔を上げてレイフォンを見つめる。

「その……ミツ君は……」

「大丈夫だよ」

ナルキが全て言い終わる前に、レイフォンが遮る。彼女もまたミロクの心配をしてくれているのだろう。

それを安心させるためにレイフォンは頷く。この世の中に変わらない人なんていない。実際ミロクは変わってきている。だから、大丈夫だと伝える。

今回の事でまたいい意味で変わっていく事が出来る筈だと、レイフォンはそう思っていた。

何の因果か、ミロクは捨て去りたいと思っていた筈の過去と関わった。しかし、今回の事で感情を顕わにしたという事は、過去を捨て切れていないのだ。ならば、過去を受け入れて、これから別の生き方をすればいいと思う。

ミロクだってグレンダンに来てからの時間を無駄に過ごしていた訳ではない。

しっかりとミロクはミロクの時間を歩いて来ている。その証拠に、初めて戦場で会った頃と随分雰囲気が変わったのだ。今は、また大きく変わる転機にいるだけなのだと思う。

それを手助けするのが今の自分の役目なのだろう。

一番付き合いが長いのは自分だし、何度も助けられてる分を偶には返しておかないと気分が悪い。

口下手で、過去に囚われそうになるという点では人の事が言えるとは思えないけど。力になれるなら力になろうと、レイフォンは友達達の背中を追い掛けた。

+

+

ツエルニの街並みを先に歩いていたミロクにレイフォンはようや

く追い付いた。

「ミロク」

「……レイフォンか」

声に力が無い。暗く纏った重たい雰囲気は落ち込んでいるように見える。いや、実際落ち込んでいるのだろう。

レイフォンはミロクの隣に立って彼の横顔を見る。普段の様子からはかけ離れた、どこか消えてしまいうるさみにさえ見えた。

暫しの間、二人は沈黙したまま街並みへ向かって歩いて行った。電車を使っても良かったが、今は歩いて帰りたい気分だったので、二人はただ歩いて行く。

「……なあ、レイフォン」

「何？」

沈黙を破ったのはミロクだった。

レイフォンは面倒に思う事もなく、ただ話を聞こうと耳を傾ける。

「俺は……どうすればいいんだろうな？　少し、迷い始めたよ……」

「迷う？」

「ああ。あの都市から出て……グレンダンや、ツエルニに来て……多くの人に出会って、今の俺がいる。」

昔の俺は、ただ生きるために戦い続けてきた。それを疑問に思う事も無く、苦痛に思う事も無く、ただ死なないために。それが、いつしかそうやって生きてきた過去の自分を疎ましく思うようになった。戦う理由も、生きるためだけではなくっていた」

「うん」

「俺は……戦う事しか能が無かった筈なのに。戦い以外のものを望むようになった……そんな気がする。」

だが、俺はそれを望んでもいいのか……それが、分からない」

それは、奴隷という過去を持つが故の迷いだろう。

幼い頃から戦うこと以外に価値が無いと教え込まれた。その弊害。己に戦い以外で自信を持たない、価値を見出せない者が、本当にそんなものを望んでいいのかと、そう迷っている。

幼い頃から戦場に出て、武芸以外にとりえが無く、道に迷っている自分と似ていると思った。

だから、出来の悪い頭だけど、必死に考えた結論をこの友達に言ってみることにした。迷うその気持ちを乗り越える力になれるといいと思いながら。

「過去は変えられない。だけど、乗り越えては行けると思うよ」

「……レイフォン？」

「過去は捨てられないけど、今よりは大事じゃない、って僕は思うよ。後悔するだけの過去なら尚更だ」

天剣授受者という名誉を穢し、孤児院の皆の、デルクの信頼を裏切った自分。

挫折して、後悔してばかりの自分だ。だけど、この過去は捨てられないし、変えられない。

だけど、越えられないものじゃないと、レイフォンは思っていた。実際レイフォンは変わりつつある。

捨てて良い訳でもないし、捨てられる訳でもない。後悔するだけの過去だ。だが、この過去という礎があるからこそ今のレイフォンがあるのだから。

「乗り越えて行けばいい。一步でもいい。不安になるかも知れないけど前に進んで……その上で欲しいモノがあるなら望めばいい。何かを望んだり、願っちゃいけないなんて決まりは、何処にも無いん

だから」

「……レイフォン……ありがとう」

「別にいいよ。友達だろ？ 僕達」

「……ああ。そうだな……」

レイフォンの言葉に、ミロクは苦笑して頷いた。

そこには、もう暗い影は無く、いつも通りのミロク・レイヴンの姿があった。

+

カチャリと音を立てて、病室のドアが開く。

「よっ、ニーナ。元気？」

「病人に尋ねる質問ではないと思うが？」

「まったくもってその通り」

軽薄な笑みを浮かべて入ってきたのは、シャーニッドである。

その後、ハーレイも続いていた。

「……ミロクは、いないか……」

「ああ。寮の方にもいなかった。レイフォンとフェリちゃんもな」

「……そうか。顔を合わせ辛いのかもしれんな。試合が棄権になったのは、ある意味良かったか」

先日ニーナが治療のため病院に行くと、そのまま入院という流れになり、現在に至る。対抗試合があったが、それは大事をとって棄権する事になった。

「って、私達は棄権だが、今日は他の試合があるだろう？ 見に行かなくていいのか？」

「気になるんなら、後でディスクを調達してやるよ。こっちはいきなりの休みで、デートの予定もなくて暇なんだ」

ならば試合を見に行けと言いたいが、止めた。シャーニッドがそういう性格ではないことをニーナは知っている。

しかし、それよりもニーナには気になる事があった。

シャーニッドの言葉に苦笑を浮かべるハーレイが、その笑みが何故か精彩を欠いている様な気がしたからだ。

「しかし、試合に出れなくて凹んでるかと思いきや。あんまり凹みまくってるって訳でもないみてえだな」

「まあな。確かに試合を棄権することになったのは残念だが、この怪我が無ければと思うのは、あの子を——フィオレを助けなければ良かったと思うような事だからな。この怪我を後悔してはいない」

シャーニッドの言葉にニーナは誇るように断言した。

「なるほど。我らが隊長殿には頭が下がる。ま、今日は別の話があるって来たわけ。悪いけど、見舞いは二の次なのよ」

「別の話？」

シャーニッドはニーナの疑問に答えず、何のつもりか鍊金鋼ダイトを抜き出した。

「一度は小隊から追っ払われた俺が言うのもなんなんだけど……」

手に余るサイズの鍊金鋼ダイトを器用に、両手で回しながらシャーニツ

ドは続ける。

「隠し事ってのは誰にでもあるもんだが、どうでもいいと感じる隠し事とそうじゃないってのがあるんだわ。どうでもいい方なら本当にどうでもいいんだが、そうでもない方だと……な」

早業だった。

この場にいる誰にも反応できない速度で戦闘状態に復元させた錬^ダ金鋼^{イト}を——二丁の銃の片方を背後にいたハーレイに向けたのだ。

「シャーニッド！」

ニーナが叫ぶ。一体何のつもりなのかと。

しかし、シャーニッドはいつもと変わらぬ笑みを浮かべたままで、ハーレイは突然の事に硬直していた。

「そんなもんを持つてる奴が仲間だと、こっちも満足に動けやしない。背中からやられるんじゃないかと思っちゃまう。例えば今だと、こいつが暴発すんじゃないか……とかな」

シャーニッドの視線が、ハーレイの額に押し付けられた鎌^{ダイト}金鋼に注がれる。

それは、ハーレイに疑いを持っているということなのか？

「馬鹿な」

それをニーナは否定する。

「ハーレイは私の幼馴染だ。こいつが私を裏切る様な事をするはずがない」

「俺だってこいつの腕を疑っているわけじゃない。裏切るとか思ってるわけじゃない。だがな、たぶん、仲間外れなのは俺達だけなんだぜ」

「なに？」

話の繋がりがわからず、ニーナはハーレイを見た。

鍛金鋼ダイトを突きつけられ、強張った表情のハーレイには、どこか諦めの様な色が混じっていた。

「ハーレイ？」

「……ごめん」

ニーナの問いかけに、ハーレイは観念した様に謝罪する。

「ミロクの方は……まあ、解らねえでもないさ。俺達と顔を合わせるのは気が引けるかもしれないからな。フェリちゃんはあの性格だが、それでも見舞いに顔ぐらい出すだろ。で、生真面目なレイフオンもないくってお前は様子が可笑的い。

……あとは、お前がこの間からセコセコと作っていた武器だ。あれはミロク——いや、レイフオン用なんだろ？ あんな馬鹿でかい武器、何のために使う？」

シャーニッドの言葉を聞き、ニーナはいまさらながらハーレイが大きな模擬剣を練武館に持ってきていたことを思い出した。

その時はフィオレの事で頭がいっぱいだったが、確かによくよく考えれば何故あんなものを用意したのか首を傾げてしまう。

「うちの出鱈目後輩コンビの片割れにあんな武器持たせて、何するつもりだ？ 大体の予想はついているし、だからこそフェリちゃんもそっち側だって決め付けてんだが、出来ることならお前の口から

言って欲しいよな」

「ごめん」

シャーニツドの促しに、ハーレイは再び謝罪し、唇が閉じられた。微かに震えている唇がもう一度開くまで、ニーナは自分が息をしているのかも判らなかった。

そして、ハーレイの唇が開かれ、その内容を聞く。

それを聞いて……ニーナはこんなところでじっとしているわけにはいかなかった。

十
—
十

時刻は昼ぐらいだろうか。レイフォンとミロクの二人は目的地へと辿り着いた。

運が良いのか、悪いのか。タイミングが良いのか、悪いのか。ミロクがニーナ達と顔を合わせ辛くなった次の日にレイフォンとミロクは汚染獣と戦うべくツエルニを出発した。

準備の際ハーレイとフェリと顔を合わせたが、二人とも普段通りの態度を取っていた。そのことに、口にはしていないがミロクもいらぬ気遣いを受けずに済んでほっとしているようだった。

移動にはランドローラーに乗ってほぼ丸一日かった。

日の出前に一度停車し、仮眠を取り、ゼリー状の携帯食を食べ、また移動してようやくいった形だ。

目の前には岩山。岩山に張り付くようにして汚染獣がじっとしている。写真で確認した姿とまるで変化が無い。

写真では感じられなかった威圧感を感じる。写真と眼の前にするのとはやはり全然違う。

胴体は僅かに膨らんでいるが、頭から尻尾まで蛇のように長い。

とぐろを巻いた胴体のあちこちに節のある足が生えている。しかし、退化しているのか足としての用は成していないように見えた。そう。足が退化しているのだ。雌性体になる際、地に潜る為に必要な足が、用を為さなくなるまで退化している。

（どうですか？）

フェリの声が耳に届いた。一瞬返答に戸惑う。

「四期か五期ぐらいの雄性体ですね。足の退化具合で判ります」（そういうもののですか？）

「ええ。汚染獣は脱皮することに足を捨てていきますから。あ、でも雌性体になるなら別ですよ？ あれは産卵期になると地面に潜りますから」

レイフォンがゆっくりとした動作でランドローラーから降りる。それに合わせてミロクも降りて、大地を踏みしめる。

腰の剣帯に手を伸ばし、レイフォンは納めていた複合錬金鋼アダマンダイトと青石錬金鋼ファイアダイトを左右の手に握り締める。

ミロクは四肢に紅玉錬金鋼ルビーダイトを装着し、両手に白金錬金鋼プラチナダイトを持ち、感触を確かめて大きく息を吐いた。

「老性体になった段階で足が完全に失われます。この状態を老性一期と呼んでいます。空を飛ぶことに完全に特化した形であり、最も凶暴な状態でもあります。そこから先、老性二期に入ると、さらに変化は奇怪さを増します。姿が一定じゃなくなる」

（レイフォン？）

ゆっくりとレイフォンとミロクは身体を解している。いまさら、焦ることに意味は無い。

活剱をゆつくりと浸透させるかのように流して、身体に馴れさせていく。戦闘状態へと近づけていく。

フェリの戸惑いの声も遠くなりつつある。意識が戦闘だけに集中されていく。

「姿が一定でなくなるのと同じように、強さの質も同じではありません。本当に気をつけるべきなのは老性二期からです。そこまでなら、今までと同じ方法で対処できる」

「滅多に出会えるものじゃないんですけどね。こんなものに頻繁に出会うのはグレンダンぐらいですから。でも、知っておいた方が良いでしょう。こんな化け物がいるのが汚染獣というものなのだと。知らないで戦うより知って戦った方が何か出来るかもしれませんね。聞くところによると、老性二期からは単純な暴力で襲ってこない場合もあるそうです」

（……二人とも、何を言ってるんですか？）

フェリの戸惑いが、やけに可笑しかった。

「遺言になるかもしれない言葉です」

ピシリ、と音がした。

空気にひびが入ったような、大きな癖にどこかひそやかさを秘めた音だった。

空気が変わる。いや、空気だけではない。汚染獣そのものが変わっていく。圧倒的な存在感を持って全てが塗り変わっていく。

胴体を覆っていた鱗のような甲殻が一枚一枚剥げ落ち、複眼が丸ごと外れて岩山の斜面を跳ね落ちていく。

（報告です……ツエルニの——）

「ツエルニの進路が変わりましたか？」

(……っ)

レイフォンがフェリの言葉を遮るように諮問する。

フェリが息を詰まらせる。沈黙は肯定の印。思わずレイフォンは苦笑する。最悪のシナリオだった。

ツエルニが進路を変更しなかったのは、気付いていなかったからだったのだ。あるいは、単に死体があると思わなかったのだらう。

「……脱皮か。いつかこの戦場にとってはいたが……予想外に機会に恵まれたな」

「まったく嬉しくないけどね」

(何喋っているんですか!?! 逃げて下さい!?! ツエルニが進路を変えたのですよ!?!?)

「「レストレーション」」

フェリの叫びを無視するかのように、レイフォンとミロクはそれぞれの鍊金鋼ダイトを復元する。

「今更ですよ。もう」

「こいつは待っていたんです。脱皮の後は……老性体になる脱皮は、恐らく普通の脱皮よりも腹が空くでしょう。汚染獣の本能を作り替えるのだから。だから餌が近づくまで待っていた。逃す事のない、そのギリギリの距離まで」

死骸にも見えた汚染獣が真つ二つに割れる。中から現れたのは蛇のような巨体。背の虫の翅に良く似た羽を広げている。

人間めいた二対の瞳。サファイアのような青の瞳がレイフォンとミロクを見下ろす。それは爬虫類に似ていた。

「G a a a——！！！！」

汚染獣の咆哮が天を衝く。誕生の産声であり、戦いの始まりの号砲でもあった。

「老性一期……覚えておいて下さい。都市が半壊する覚悟をすれば、勝てるかもしれない相手です」

それを最後にレイフォンはフェリとの会話を打ち切った。もう会話をしている余裕など無い。

同時にレイフォンとミロクはそれぞれの武器を構え、駆け出した。

激闘（前書き）

この話で原作二巻が終わりになります。

激闘

ニーナは生徒会長室に押しかけた。

「どういう事ですか？」

怒りを押し殺した声を受けても部屋の主であるカリアンは平然としていた。

「どうもこうもない。戦闘での協力者を要らないと彼ら自身が言ったのだよ。私は、彼らの言葉を信じた」

「信じるのと放置するのは違うでしょう！」

机を思い切り叩く。カリアンの前に置かれた書類が僅かに浮き、ペン立てが揺れた。

痛くなったのは自分の手だけだ。

「……近づかせるな、とも言われたのでね」
「え？」

「汚染獣との戦いは相当に危険なのだそうだ。どう危険なのかは武芸者ではない私には理解が及ばないが、安全というものを求めた瞬間に死ぬのだそうだ。そんな戦場に、安全地帯で控えている者なんて必要無い。汚染獣と都市外で戦う時は、無傷で戻るか、それとも死ぬかのどちらかしかないと、そう思っていた方が良いとね」

ニーナは息を呑んだ。呑むしかなかった。
そんな場所に二人は今……

叩き付けたままだった拳を握り締めた。

先日の怪我は治りきっていない。左腕に至っては吊った状態のまだ。

しかし、それでも言う事を止める事が出来ない。

「私を行かせて下さい」

「行ってしまうのだね？　今の君は誰が見ても怪我人だ。そんな生徒を危険な場所に行かせる事は、責任者として許可できるものではないが？」

「あいつらは私の部下です。そして、仲間です。ならば、共に闘う事は出来なくとも、迎えに行くぐらいはしてやらなくては……」

「ふむ……いいだろう。ランドローラーの使用許可を出すよ。誘導の方は妹に任せよう」

「ありがとうございます」

「ただし、生きて戻りたまえ。無理だと判断したなら逃げたまえ」

「……逃げません」

「この学園を生かすために、君達は必要な人材だよ」

「あいつらもそうです」

これ以上の問答は無用。ニーナは生徒会長室を飛び出した。

そうして話したのが何時間前か、今彼女たちは荒野を走っている。都市外用装備に身を包み、ランドローラーで。遅れた時間を少しでも取り戻すために転倒すればそのまま死ぬような速度を出して。

『……仲間と言うなら、まずは俺と同じ強さになる事です』

ミロクが口にした、仲間とは対等であるべきだと言う想いから出た言葉。

『僕らの力はいらないと思っただんですか？』

一人で暴走してた時に言われたレイフォンの言葉。

対等でいろいろといった奴は、大事な事を隠してばかりだった。

偉そうに説教をくれた奴は、自分の方が周りの力はいらないなんて口にした。

「……待っている」

行ったところで、何も出来ないかもしれない。得られるものは、自己満足ぐらいかもしれない。

だが、それでも――

「待っている」

私はお前達の許に行く。

お前達がどんな戦場にいるのかは知らない。

ならば、それを知るために、仲間を知るためにその場所に行く。
ランドローラーはさらに速度を上げ、風のように荒野を駆けて行った。

+

「ふっ」

汚染獣の胴体に着地して手を当て、短い呼気と共に剄を放つ。
外力系剄の変化、流滴。

ミロクの手から放たれた衝刺は汚染獣の鱗の隙間を縫って細胞内に浸透し、内部からの破壊を行う。

そのまま二撃目を放とうとするが、

「ちいっ！」

舌打ちして飛び退く。

汚染獣がその巨大な胴体をくねらせてミロクを大地に押し潰そうとしたのだ。

あと少しでも回避が遅れていたら危ないところだった。

ミロクは得意とする双剣ではなく、格闘術で戦いに挑んでいた。それは別に老性を侮っている訳ではなく、むしろその逆。未だかつて経験した事の無い強敵と戦うのに、一番適した戦術が徹し剋による攻撃であると判断したためだった。

ミロクの初撃。斬線を見切り、瞬間的に込められる最大剋量を剣に込めた自身に出来うる最高の斬撃だった。

しかし、斬れなかった。いや、正確には斬る事は出来たが、幼生体や雄性体を相手取る時ほど容易くはなかった。

鱗を一つ切るごとに抵抗が襲ってきた。ガチリとぶつかる硬い感触、その後内部の肉を切る時に感じる泥の中を進むような抵抗、そしてまた硬い感触。

初撃において、自身の最高の斬撃をもってしても、その巨体からすれば剃刀やナイフで切った程度のダメージしか与えられないと理解した。

最強の汚染獣。十分にその脅威を覚悟していたつもりだったが、それでもなお甘かったと思い知らされた。

だが、それを後悔している暇など無い。戦いの中で準備不足など言い訳にすらならないのだから。

次の瞬間。ミロクは双剣を剣帯に戻し、汚染獣に肉薄した。

繰り出す剄技は、流滴。グレンダンの格闘術の名門ルツケンスで身に付けた徹し剄だった。

剣で硬い鱗を切り裂くよりも肉体内を直接攻撃する方がダメージが大きい。それが、ミロクが下した判断だった。

そうして戦い方を変えた時からどれほど時間がたったのかもう判らない。

汚染獣を見る。

あちこちの鱗が？げ、そこから血が零れている。大半は乾き、黒っぽい塊となって所々に岩のように張り付いていた。

翅は一番最初にレイフォンに切り落とされ、今や地上を這う巨大な蛇といったところか……その体を覆う鱗の硬さはまるで鋼鉄で、比べ物にならないが。

左目は少し前に潰れた。潰れた眼窩の下からは未だに血が溢れているが、それも最初の頃よりは少なくなっている。傷口がすでに埋まろうとしているのだろう。視神経まで再生できるかどうかは知らないし、確認する気も全く無い。

これからは左側面。死角に入り続ける事にする。

視界に汚染獣と比べると小さな影が入る。レイフォンだ。その手には一振りの巨刀があった。

複合鍊金鋼だ。

三種類の違う鍊金鋼を、それぞれの長所を完全に残した形で合成させた新型の鍊機鋼ダイト。これには復元状態での基礎密度と重量を軽減することが出来ず、三種類の鍊金鋼ダイトを持つのに等しいという状態にあるという欠点があった。

普通ならばその重さに翻弄される。実際ミロクは自分では扱えなかった。

しかし、レイフォンは使いこなしている。

空中で独楽のように回転しながら落下し、大地に潜り込んだ頭を

もたげようとする汚染獣に向かう。
接触。落下と回転の力を上乘せして、巨刀が火花を散らしながら
鱗と内部の肉を切り裂いていった。

「G a a a——！！！！」

汚染獣の咆哮が天を衝いた。

苦悶に震えようとも力尽きる様子は無い。

レイフォンの斬撃と自身の徹し剄による細胞破壊を数十、数百と
受けてなお汚染獣は圧倒的な生命力を見せつける。

まだ活剄はもつ。だがそれも丸一日が限度だろう。果たして自分
が力尽きるのが先か、それとも汚染獣が力尽きるのが先か……

「いや、弱音を吐くな」

諦めればその先に待つのは死だけだ。

数十や数百の攻撃を打ち込んで駄目ならば、数千、数万と打ち込
めばいいだけの話。

砲弾のように飛来する岩を躲しながら、再び汚染獣に肉薄する。

流滴。流滴。流滴。

連続で通し剄を打ち込む。

「G a a a——！！！！」

自らにまとりつく者を喰らおうと汚染獣がミロクを捕らえる。

迫り来る牙の群れ。

宙に跳び、天翔剄で空を駆けて離脱する。

間隙を狙い、レイフォンが斬りかかっていった。

不思議だった。

錬金鋼ダイトを振り回す。左手で青石錬金鋼サファイアダイトの鋼糸を、右手に複合錬金鋼アダマンダの巨刀イトを持ち、汚染獣に挑む。

それを止めたくて、捨てたくてツエルニに来たというのに、そのことに違和感を覚えずに戦っている。

あれ程の目にあつたのに、あれだけのことをしたのにレイフォンは武芸を止められずにいる。そのことに、まるで違和感がない。

呼吸をすることが当たり前のように。眠ることが当たり前のように。武芸者として戦うことがレイフォンにとって当たり前になっているかもしれない。

『武芸者は人間ではない』

女王アルシェイラ・アルモニスの言葉が蘇る。

幼生体との戦いを経て、レイフォンは再び剣を取る事を選択した。武芸を続ける事を選んだ。

それによって腰にある剗脈の疼きが、使えと騒ぐ衝動が消えた。

武芸者は戦うことから逃れられない。そう思い知らされた。

だから、武芸を捨てられないなら、過去を捨てられないなら乗り越えて行こうと思った。

その矢先に、老性体と戦う事になった。

技術は錆付いている。衰えてなお並みの武芸者を軽く凌駕するとはいえ。動きという動き。思考するスピード。剗を制御する感覚。それら以外のあらゆる戦うために用いられる技術も衰えている。

だが、忘れてはいないのか時折イメージ以上の反応を無意識にしてみせ、それが状況を好転も悪転もさせてみせるからやりにくくて

仕方がない。

ミロクがおらず、一人で戦う事になっていたら悪転をカバーされずに危なかったかもしれない。

「っ！」

動きとイメージのズレで、斬線が僅かに逸れた。

巨刀が汚染獣の肉に飲まれてしまう前に、柄を軸に回転する。逆手に持ち替え汚染獣の胴体に足を置くと、一キルメル先に存在を確認していた岩塊に鋼糸を巻き付け、自分の身体を引っ張るのと同時に胴体を蹴る。勢いの止まった巨刀は重い抵抗と共に抜け、出来上がったばかりの傷口から薄赤い血が噴水のように飛び出す中、レイフォンは距離を取って着地した。

ブーツが大地を噛む。

素早く汚染獣と対峙しながら、レイフォンは複合鍊金鋼アダマンダイトを見た。スリットに差し込まれた鍊金鋼ダイトの一つが煙を上げていた。よく見ればあちこち細かいひびが入っている。

「一つ、折れた……」

スリットからその鍊金鋼ダイトを抜き出し、破棄。

鍊金鋼ダイト一本分の密度と重量が失われ、手にした巨刀は随分と軽くなったような気がした。感覚の違いはまたも致命的なミスを呼びかねないが、だからと言って戦いを放棄できるようなのんびりとした状況ではない。

汚染獣が身をもたげる。

頭を打ったのか、こちらでもミロクの位置も把握していないようだ。

（レイフォン……いいですか？）

躊躇いがちなフェリの声が耳に届いた。彼女の声を聞くのはどれくらいぶりだろう？

「ああ……どれくらい経ちました？」

（一日ほです）

「そうですか……それで？」

（あの、実はここに隊長達が近付いて来ているんです。戦闘の爆発を見て視覚情報を超越せと言って来ているのですが）

レイフォンの意識が飛んだ。精神は未だ戦いに向かっているが、フェリとの会話に僅かに回した意識が真っ白になった。

「どういうことですか！」

（そのままです。隊長とシャーニッド先輩が近くまで来ています。その、下手に伝えれば無理するかと思ったのでいままで黙っていました）

「何をしに、あの人たちは来たのですか」

（見届けに。安全地帯で待っているだけなんて嫌だと）

「迷惑な！ 今すぐランドローラーの電子機器を狂わせて近づけないようにして下さい！」

（それはもうしました。しかし、そうしたら『ならばいい、自分の足で走る』と）

打ったわけでもないのに頭が痛くなってきた。はっきり言って今の状況にその行動は迷惑以外の何物でもない。

ニーナ・アントーク。シャーニッド・エリプトン。いずれも親しい先輩たちだ。この戦いに巻き込んで死なせてもいい人物ではない。もう迷っている暇はない。鍊金鋼ダイトが壊れるから嫌だったが、そんなことも言ってもらえないのなら、一気に決めるまでだ。

汚染獣の動きを見る。接近する新たな獲物に気付いたのか明後日

の方向を見ている。その眼に映っている飢餓はもう限界まできているようだった。単純に数の多いほうを向いた。そういうようなものだった。

「次で決めます。ミロクに奴の注意を逸らすように言って下さい」

指示を出し、駆け出す。間に合うか？ いや、間に合わせる。

内力系活剗の変化、旋剗。

視線の先にいる汚染獣に向かってミロクが炎剗を放ち、胴体の所々が爆炎が包まれる。

ミロクに気を取られ、汚染獣の動きが緩まった。今だ。

跳ぶ。地を蹴り、空中に飛び上がる。

身体をひねり、巨刀を背に隠すように構える。

刀身に膨大な剗が収束し、それをレイフォンは振るう。

天剣技、霞楼。

刀身に収束した剗が消失した。

それは言うなれば、徹し剗ではなく浸透斬撃。

その刃から放たれた衝剗は目標の内部に浸透し、無数の斬撃の雨となって四散する。

レイフォンが天剣授受者となってから編み出した、独自の技だった。

汚染獣が全身から血を噴き出して悶える。

「————ッ」

慌てて複合鍊金鋼アダマンダイトを放り投げれば、中にまだ残っていた剗が衝剗に変化し爆発した。

小規模なものだったが、それでも充分戦闘衣に傷を付けることは出来ただろう。思わず、これが天剣だったらと思ってしまったのは

間違っではないない。失ってからそのありがたみが分かるとは、何とも皮肉な話だが。

「G a、G i、G a a a——！！！！」

そのまま大地に沈むかに思えた汚染獣が最後の力でレイフォンに迫る。

（——しまっ）

技後硬直。
回避出来ないと思ったその時、

「レイフォン！！」

宙を駆けるミロクが間一髪で拾い上げてくれた。
そして、

「使え！」

手渡される白金鍊金鋼プラチナダイトの剣の一振り。

それを手に、レイフォンは再び身体をひねり、剣を背に隠すように構える。

今度こそ——

「くたばれ」

天剣技、霞楼。
再び放たれる浸透斬撃。

そして剣を汚染獣の額に突き立て、飛び退く。

ブラチナダイト
白金鍊金鋼の爆発は額と頭蓋を碎き、衝撃は脳を貫いた。

「G u g a a a a ————— ! ! ! ! !」

最後の力を出し尽くし、二度目の体内を切り刻まれる浸透斬撃を受けた汚染獣は、残っていた片眼も失い、脳を破壊されて今度こそ大地に沈んだ。

（生命反応消失……お疲れ様でした）

フェリの安堵を混ぜた労いの言葉が届く。

「やったか……」

「うん。なんとかね」

しかし、何と言ったものだろうか？ あの人たちは。

遠く、とは言っても武芸者の視力なら十分に見える程度に離れた距離の向こうで、二人の人間がフェイススコープの下で目を大きく開いているのが見えた。

＋—————＋

ニーナは目の前の光景が信じられなかった。

大地がかき回されていた。

荒れ果てた大地を目の粗いやすりで無秩序に削り回したかのよう
に、そこら中に巨大な溝が出来ていた。

その中で、幼生体とは比べ物にならないほど巨大な汚染獣が倒れ

ている。死んでいる。

遠目にまだ生きていた姿を見た時は、絶対的な死を予感させたというのに。その汚染獣が死んでいる。

「本当にスゲーな。お前ら……」

「それはどうも。しかし、何を考えているんですか？ 一つ間違えば取り返しのつかないことになっていたんですよ？」

レイフォンは怒っていた。それだけ心配していたということなのだろう。

しかし、それはこちらとて同じ事だ。

「決まっている。仲間だからだ。私には仲間を見捨てるような事は出来ん」

「見捨てるって……」

「それとも何だ？ 私たちは必要無いと思ったのか？」

「そんな事は……」

ついこの間言われた言葉をそのまま返してやる。

確かにこの戦いではニーナは役に立てなかったかもしれない。だが、これは仲間が必要無いのかという質問だ。

否定しようとするレイフォンだが、その行動を見れば否定することとは出来ない。

「反論のしようがないか？」

にやりとニーナは笑う。この間とは立場が逆だった。

「こんな事は二度とするなよ？ グレンダンではお前達の代わりがいるのかもしれないが、ツェルニは違う。お前達の代わりなんてど

ここにもいない。グレンダンとツエルニは違う。私のやり方もグレンダンとは違う。仲間を見捨てるような事はしない」

「隊長……」

「ミロク。お前にも言ってるんだぞ。聞いているのか？」

ニーナは、反応を示さないミロクを叱るが、それでもミロクは答えない。

「ミロク？」

「……すみません。もう、限……界……」

ばかり、とミロクが糸が切れたように倒れた。

「ミロ……あ……」

僕ももうと、駆け寄ろうとしたレイフォンも倒れた。

「お、おい！」

「大丈夫か！」

慌ててニーナとシャーニッドが叫ぶが、

「「ぐ……」」

二人の寝息で心配は吹き飛んだ。

「寝てんのかよ……」

シャーニッドが脱力して呟く。

「……まったく……本当に、よくやったよ……」

ニーナは、そんな二人を労うように笑った。

+

最初に一言言うでしょう。

誰かを殺しに行くなど物騒な事を書くな。

手紙を読んだ友人が泣きそうな——いや、泣きながら脅迫でもされてグレンダンを追い出されたのかと聞いてきたぞ。誤解を解くのが大変だった。

なんでも誤配で友人のところに手紙が行き、誤って読んでしまったらしい。

そういう事もあるようだから内容には気を付けてくれると助かる。

近況報告に移ろう。

レイフォンは一般教養科から武芸科に転科した。

軽く手合わせしたところ、やや錆付いてようだが、それでも俺より上にいる。さらには天剣は無いが、かつての力を取り戻していくように思える。

俺も放浪バスでの移動でやや鈍ったところがあったが、鍛え直した。

レイフォンに追いつくにはさらに努力が必要だと感じ、個人訓練メニューの改良を考えている。

こんなところか。

学園都市での生活は新鮮なもので、武芸以外でも充実しているように感じる。自分でも上手く言えないが。

手紙ぐらい書けとレイフォンが煩いので返事を書いたが、
どうか？

可笑しなところがあれば次からは気を付けよう。今回は初めて書くという事で大目に見て貰えると助かる。
それでは、また。

クラリーベル・ロンスマイアへ

ミロク・レイヴン

激闘（後書き）

自分の中の目標だった原作二巻分まで書き終わる事が出来ました。感想は少ないのですが、いかかでしたでしょうか？

ひとまずこれからこれとは別に書いている方の作品に集中しようかと思っているので、この作品は暫く更新がないか、不定期になります。ご了承下さい。

このような作品を読んでもくれた方には感謝を。
良ければもう一つの作品もお読みください。

過去と現在（前書き）

この話は三巻のプロローグに当たります。

過去と現在

無数のざわめきがどんなに下から湧き上がってこようと、ここは静かだった。

「ふう……」

思わずため息が漏れる。

リーリンは自動販売機で買った紙コップのジュース片手に、背もたれのないベンチに腰掛けた。

グレンダン上級学校にある、休憩室は吹き抜けになった二階構造だ。昼間などは、この二階部分にも生徒達がやってきて賑やかなのだが、放課後の今では一階部分だけで事足りる。

休憩室はここだけではないし、飲み物などを求めてやってくる運動部連中などは、もっとグラウンドや体育館に近い場所に行く。

そのため図書館に近いこの場所は、割合静かだった。上級生達の一団——おそらく文科系クラブの連中が一階に集まっていたが、彼らの話し声はこちらに届いては来るものの、ここまで届く頃には意味のない音の塊となっている。背景の一部と思ってしまえばうるさくもない。

「ふう……」

もう一度ため息をつく。

全然手のつかないレポートを図書館に放置し、リーリンは紙コップのジュース、熱く、甘いココアに口をつける。

『都市間交流における情報更新の意義と経済効果』

教授がいきなり、リーリンにこのテーマのレポートを押し付けてきたのだ。提出期限は一週間後で、まだ時間があるといえそうなのだが、そもそも上級学校に入ったばかりのリーリンにこなせる課題ではない。それっぽい専門書をひとつ紐解いてみても、そこには意味不明の専門用語が並び、それを理解するために別の本に手を伸ばし、そしてまたその本の内容を理解するために別の本も引っぱり出さないといけない。

「……うう、基礎知識そのものが足りてないのよね。そもその数字が理解できないんじゃないじゃない。まったくもう……どうしろって言うのかしら？」

そんな感じで放課後の二時間を本を積み上げるだけで消費してしまい、始める前から頓挫してしまっている。
憂鬱になりそうな気分を誤魔化すために、制服の胸ポケットにしまっていた手紙を取り出し、リーリンはそれを読む。

+

元気かな？　こちらは相変わらずです。

いや、相変わらずでもないかな？

ツエルニにまた汚染獣が接近していました。今回は脱皮前で感知できなかったのです。

僕はミロクと一緒に戦い、何とか斃す事が出来ました。一人で戦っていたらちよつと——いや、かなり危なかった。

天剣のありがたみが解る一戦でもあったよ。無くしてからその価値が解るなんて、僕はやっぱり馬鹿なんだろうね。

武芸以外の道を探す事を諦めた訳ではないけれど、武芸を捨てた
いという気持ちは、多分もうありません。

リーリン、僕が武芸を否定しきってしまったのは君のおかげだ。
グレンダンという僕の過去に君がいてくれたからこそ、そうなら
ずに済んでいる。

多分、それはとても幸運な事なんだと思う。

武芸は僕の十数年を支えた、今の僕を形作る、きっと大切な一
部のだから。最近そう思うようになって、武芸を失わずに済んだ
のは本当に幸運で、失うのを防いでくれたリーリンも、ミロクも僕
にとって大切な人だと思う。

君と六年の月日を手紙だけでやり取りするのは辛いかもしれない
ね。僕もそれを感じました。

この距離という壁を、僕達はいつか踏破出来るのかな？
出来ると信じたいね。

君のこれからに最大の幸運を。

リーリン・マーフエスへ

レイフオン・アルセイフ

+

手紙を読み終わって……もう既に何度も読み終わっているのだけ
れど、リーリンはぐったりしてしまった。

嬉しくて、呆れて、そして怒ってしまった。

リーリンの事を大切な人と言ってくれるのは嬉しいのだけれど、
ミロクの名前も載っている。きっと書いていないだけで養父や孤児

院の皆の名前だってレイフォンの心の中にはある事だろう。

即ち、レイフォンの大切な人に向けられる感情とはLoveではなくLike。

一体何枚の便箋を犠牲にして、覚悟を決めて書いたと思っているのか……。

リーリンの本心にまるで気が付かないレイフォンの鈍感さは本当に……

「ああ、まったくもう……」

鈍感すぎる、幼馴染の事にリーリンは悪態をつき、更にレポートをやる気が削がれてしまう。もういつそのこと、このままベンチで不貞寝してやろうかと考えてると……

「クッ……」

「？」

かすかな、声を押し殺したような笑い声が聞こえてきた。誰もいないと思っていたのに、誰かいた。

「え？」

振り返ると、リーリンの背後、壁際のベンチに1人の青年が座っていた。

「や、失礼」

リーリンはみつともないところを見られたと頬が熱くなる。

だが、それでも未だに笑っている青年の姿を見て、流石にむっとして睨んだ。

長い銀髪を後ろでまとめた青年で、女性でも嫉妬してしまいそうなほど綺麗な髪をしている。薄着になるにはまだ寒いというのに、両腕が剥き出しになった薄地の服を着ている。

誰も彼もが好感を持てるような甘いマスクで、笑い方にもどこか品があった。

しかし、笑われているのが自分自身では好感なんて持てないし、ハッキリ言って怪しい。

「……どなたですか？ この学校の人には見えませんが」

むき出しとなった両腕は、びっしりとした筋肉が皮膚を押し上げている。

学生という雰囲気ではない。その逞しい腕から予測するに、おそらく武芸者なのだろう。グレンダンを歩いていれば武芸者なんて珍しくもないし、生徒にも武芸者はいるのだけど、この青年が上級学校の生徒には見えない。

「うん、君の言うとおり、ここの学生ではないよ」

青年自身も肯定し、笑みの余韻を残しながらも笑いで体を震わせるのをやめた。

「じゃあ、何か御用ですか？ それなら事務局は……」

「やっ、この学校に用はないんだ」

さっさと消えて欲しい。そう思って事務的に物を言おうとしたリリーンを、青年は制する。

「用があるのは君になんだ、リリーン・マーフェスさん」
「へ？」

「あ、言っておくけど、これはナンパの類ではないからね」

「……なんでわざわざそんなことを言うんですか？」

「うん。なんでだかわからないけど、僕が女性に声をかけるとそういう風に受け取ってしまわれる場合がとて多いんだ。だから、一応念のため」

「自信過剰ですね」

確かに、この青年に声をかけられるとそういう風に夢想してしまうかもしれない。

変なところを……レイフオンの手紙を読んで、唸っているところを見られたり、笑われたりしていなかったらリーリンだってそう思ったかもしれない。

もちろん、その場合は丁重にお断りするつもりだが。

しかし、こんな前置きまでされてしまうと、その容姿とあいまって嫌味だ。本人にそのつもりがなさそうなところが特に。

「そんなつもりはないんだ。僕は本当にそんなつもりはないんだよ？」

「そう言う事が聞きたいわけではないです」

青年はおそらく、理解が出来ないのだろう。そんな気がした。邪気がまるで無く、そういうところが子供っぽい。

だけどそれはリーリンには関係なく、彼の要件と言うものが気になる。ぶっちゃけ怪しいし、あまりいい予感はないのだが。

「それで、一体何の御用なんですか？ 私、これでも忙しいんですけど」

片付ける気力の湧かないレポートも、こんな時は良い断りの材料だ。

武芸者は基本的に高潔な人が多いけど、だからといって武芸者の犯罪が存在しないわけではないし、武芸者でなかったとしても、見ず知らずの男性に用があるといわれてほいほい付いていくつもりはまるでない。

「うーん、その忙しい理由ってもしかして、ランディオン教授のかな？ それなら、もう何もしなくていいよ」

「え？」

「僕が教授に、学校に残ってくれるように取り計らってくれて頼んだんだ。『リーリン・マーフェスは優秀だから、簡単な用ならすぐに片付けてしまう。よし、ちよつと無理なレポートでもやらせてみよう』なんて言ってたから、もしそれなら、しなくてもいいよ」

「……なんですか、それは」

どういう風に驚けば良いのかわからず、リーリンは脱力した。

あの難物の教授にそういう頼み事が出来る青年も謎だが、そんな理由であんな難題を押し付けられたとわかると、なんだか色々、情けなくなってくる。

「それこそ、事務局にでも言って、呼び出すなりなんなりすれば……」

脱力したままそう言うと、青年は平然とした様子で答えた。

「出来るだけ隠密に片付けたかったんでね。……レイフォンにも関わる問題だし」

「……え？」

その答えに、一瞬リーリンの時間が止まった気がした。

「うん。まあ、そこまで気にする事でもないのかもしれないけど、レイフォンが関係するとなると、色々敏感になっちゃう人達もいると思うんだ。だから、内緒で君に会いたかったんだ」

「あなた……一体」

「君にとつては不快な話かもしれないけれど、これもまあ、なにかそう言う……うーん、運命？　そういうようなものだと思うってくれるとありがたいんだけど」

「……はあ」

空返事をしながらも、リーリンはもう理解していた。

この青年が何の目的でリーリンに近づいたのか……それはまったく理解できないのだけど、この青年が何者なのかは理解できた。教授が青年の頼みを聞くはずだ。

彼らの頼みごとを無視できる人間なんて、このグレンダンでは陛下くらいのもんだろう。

そして理解してしまえば、この青年の名前も浮かんでくる。

「それで、私に……」

そこまで言ったところで……

「ひゃっ!？」

いきなり、引っ張られた。

視界が急激に溶けていく。静から動への変化の過程がまるで認識できなかった。薄暗い休憩室の光景が溶けて線になって、あとはもうなにがなんだかわからない。

リーリンは凄まじい勢いでなにかに引っ張られていた。

「ああもうっ!」

凄まじい勢いで引っ張られているリーリンの横を、青年が駆けている。全ての景色が溶けている中で、青年の姿だけが普通に見える事が出来た。つまり、リーリンが引っ張られる速度と同等に動いていると言う事で、流石は武芸者と驚嘆に値する事だが、そんな事をリーリンが気にする余裕は無かった。

休憩室の外にまで引っ張り出されたリーリンは、そのまま宙を舞った。上に引き上げられたのだ。無理な力が加わった痛みはなく、リーリンはただ、なんだか良くわからない力に覆われたように感じながら空へと放り出された。

「きゃっ」

屋上にまで引っ張り上げられたリーリンは尻餅をついたものの、そこでようやく人心地つけた。

学校の周辺を見渡せる屋上には、既に先客がいた。

ぼさぼさの髪に無精髭の、むさくるしいコート姿の男だ。何が気に入らないのかと言うぐらいに鋭くした瞳は、リーリンではなく屋上からの風景を睨み付けていた。

「なんでこんな力業をしますかね、あなたは」

悠々と屋上に辿り着いた青年が、非難がましい目をコートの男に向ける。それでも、コートの男は風景を睨み続けていた。

「お前の話は無駄に長い。イライラする。いったい俺を何万日ここで待たせておく気だ？ その娘と結婚式を挙げるまでか？」

「いたいのなら何日でもどうぞ。あなたはどこにいたって陛下の用をこなせるのでしょうか」

「笑えんな。陛下の用など、俺は生まれてから一度も聞いた事がな

い」

「あなたがそう思っていないだけでしょくに、リントンスさん」

「汚染獣を何億匹虐殺したところで、それは陛下の命ではなからうが」

「この都市を護る事こそが、陛下が僕達に与えてくださった最大の命ですよ」

「お前とは幾星霜話しても平行線だな」

「そうですね、僕もこれ以上人生の無駄遣いはしたくありません」

つまらなそうにコートの男——リントンスが鼻を鳴らし、青年も肩をすくめた。

「……それで、ですね」

緊迫しているのか、和んでいるのかいまいち判断のつかないやりとりで言葉を挟んで、置いてけぼりを食らったリーリンは2人を見た。

何でこんな事になったのだろうか？　そう思いながら。

「えーっと、天剣授受者のサヴァリス様とリントンス様ですよね？　何か御用ですか？」

リーリンは2人の武芸者を、グレンダンの誇る12人の天剣授受者、レイフォンが抜けたので11人だが、その内2人を見つめながら、そう問いかけた。

+

+

熱い歓声が野戦グラウンドを支配している。

『おおっと、第五小隊隊長ゴルネオ・ルッケンスに対し、期待の新人レイフォン・アルセイフ、どう対抗するのか!?』

レイフォンの目の前には第五小隊のバッチが付けられた戦闘衣を着こんだ大男がいた。

その四肢には手甲と脚甲の紅玉鍊金鋼ルビーダイトが装着されている。

（ルッケンス？ ツエルニにルッケンスの武芸者がいたのか?）

一応ルッケンスの門弟であつた筈のミロクからは、そんな話は聞いた事は無かつたが……

レイフォンは悠然と進めていた足を止めてゴルネオと呼ばれた大男を見た。

短く刈り込んだ銀髪に、人型自動機械のように四角い顔と身体。

厳つい顔の中に収まった目と鼻にはどこか愛嬌の片鱗が見え隠れしている。

笑えば以外にいい男かもしれないその目は、今は鋭く引き締まり、レイフォンに向かって拳を叩き込もうとしていた。

その拳に剄ルビーダイトが集まる。紅玉鍊金鋼が反応して赤い残光を引きながら放たれた拳は、途中から巨大化した。

「化鍊剄……っ!」

やはりと思いながら、その場から飛び退く。

数倍にも巨大化した拳が地面を爆散させる。

舞い上がる土砂に混じった剄はそのままさらに変化し、レイフォンに襲いかかってくる。

飛び退きながら剣に収束させた剄を振り抜き、解き放つ。

外力系衝剄の変化、渦剄。

渦巻きながら放たれる無数の剄の塊が、土砂ごとゴルネオの剄を爆発させて撃ち落としていく。

さらに細かくなった土砂が煙幕となって周囲を舞う中、レイフォンは新たな気配が飛び出したのを感じた。

「レストレーションっ！」

甲高い声と共に槍型の紅玉鍊金鋼ルビーダイトを復元した小さな影が宙を舞う。

「炎剄将弾閃くんッ！」

技名が叫ばれ、槍の穂先から炎の塊と化した剄弾が飛び出す。頭上から迫る熱気は無視し、ゴルネオにレイフォンは意識を集中する。

外力系衝剄の化鍊変化、風烈剄。

烈風がレイフォンの頭上を駆け抜け、炎剄を吹き散らす。

レイフォンの背後からミロクが姿を現した。

伏兵を用意していたのは第五小队だけではなく、第十七小队も同じこと。

「これで2対2だな」

「シャンテ！ 奴は任せた！」

「うん！」

白金鍊金鋼プラチナダイトの双剣を復元しながら呟くミロクに、ゴルネオの指示

を受けて赤い髪の少女が迫る。

「うゝ、ニャニャニャアゝっ！」

どこかネコ科の獣のような唸り声を上げながら繰り出される槍の
刺突。

それらをミロクは弾き、逸らし、躲していく。

双剣と槍が奏でる金属音を横に、レイフォンはゴルネオと対峙す
る。

剣が振るわれ、衝剄が奔る。

四肢が唸りを上げ、風が荒れ狂う。

衝剄は風を散らし、風は衝剄を逸らす。

「かああっ！」

ゴルネオが一際強い風剄放ち、地面を抉り、土砂が舞う。

土埃が収まったゴルネオの前には、

「なっ!？」

無数のレイフォンの姿があった。

「千人衝……」

実際には千人もいない、せいぜい数十人といったところだが、そ
れでも実体を持ったレイフォンがゴルネオを取り囲む。

唇を噛むゴルネオに無数のレイフォン達が一斉に襲いかかった。

活剄衝剄混合変化、千斬閃。

動けなくなる程度に手加減された斬撃を身体に打ち込まれたゴルネオは地面に倒れ伏す。

「きゅ」

見ると、シャンテはミロクの風剄に吹き飛ばされて目を回して倒れるところだった。

『あゝっと、ここで第十七小隊隊長ニーナ・アントークとシャーニッド・エリプトンがフラッグを破壊！ 第十七小隊の勝利だゝ！！』

司会者の声が、試合の終わりを告げた。
それを聞きながら、レイフォンはゴルネオに声をかける。

「見事な化鍊剄です。まさかルッケンスの者がツエルニにいるとは知りませんでした」

「……貴様に褒められて俺が喜び、握手でもすると思うのか？」
「いいえ」

目を瞑りながら首を振る。

レイフォンは刺すような視線を背に浴びながら、野戦グラウンド後にした。

デートと最強の盾

「レイフォン、こっちです。遅れないで下さい」

「……はい」

休日。レイフォンはフェリの買い物に付き合わされていた。レイフォンの手には本が詰まった紙袋が提げられている。勿論、支払いは全てレイフォン持ちだった。

先の老性体戦で、遺言だと言って心配をかけた罰だそうである。理不尽だと思わないでもないが、そこは持ち前のヘタレっぷりを遺憾無く発揮し、フェリに押し切られた。

「けど、フェリ先輩。こんな所にお店なんてあるんですか？」

今、二人がいるのは学校に近い公園だった。

「はい。この間、偶然見つけたんです」

「そうなんですか？ ……あっ、屋台なんですね」

公園の片隅に、ひっそりとカラフルな屋台があった。

それはアイスを売っている屋台らしい。

「それじゃ、私はバニラにします」

フェリが屋台の前に立って商品を選ぶ。甘いものが苦手なレイフォンは、迷った末にヨーグルト味のアイスを注文した。
無論、レイフォンの奢りだ。

(懐が……寒い……)

今日だけで一体どれだけ出費しただろうか？

奨学金Aランクで機関部掃除をしているとはいえ、本の代金も含めると中々に痛い出費である。

「結構甘いですね。……レイフォン、大丈夫ですか？」

甘い物が苦手だと以前言った事があるので、フェリが訊ねてくる。出来ればその気遣いを別の所に回して欲しい。主に僕の財布に。

「はい、これは結構美味しいですよ」

愚痴ってもフェリに口で勝てないと解っているので思うだけに留める。

実際、アイスは美味しかった。甘過ぎないヨーグルト味はレイフォンの好みに合っている。

コーンに載せられたアイスを食べながら2人が近くのベンチに向かうと、人の姿があるのに気がついた。

2人組みで、片方は車椅子に乗っている。そしてもう1人には見覚えがあった。

「……あ」

「あ……」

車椅子の傍らのベンチに座り、アイスを食べていた見覚えのある男と目が合い、2人そろって声が漏れる。

「こんにちは、奇遇だね」

ハーレイだ。今日は休日だと言うのにいつものツナギ姿で、薄汚れた格好をしている。

ハーレイは啞えていたコーンを一気に口の中に放り込むと、ベンチから立ち上がってレイフォン達に手を振った。

「こんにちは、今日も研究室に？」

レイフォンはハーレイの格好を見て、そう見当する。

「そ、どっかの誰かさんに付き合ってね。今は頭に糖分入れて、休憩してたところ。ああ、そうだ」

そう言ってからハーレイは車椅子の後部にある握りをつかみ。ぐりりとこちらに回転させた。

後ろを向いていた車椅子に乗っていた人物は、それまでこちらを見向きもしなかった。

美形で目付きの悪い青年。線の細い顔立ちに、不健康な白い肌をしている人物だ。

美形故に女性などの人気が高そうだが、目付きの悪さがそれを台無しにしている感じた。

「こいつ、キリク・セロン。同じ研究室なんだ」

「なんだ？ お前の知り合いならお前だけで片付けろ」

その人物——キリクは迷惑そうに後ろにいるハーレイを睨みつけるが、ハーレイは気にせずに続ける。

「片付けろって言ってもね。ほら、彼がレイフォンだよ」

「……なんだと？」

ハーレイを睨みつける視線が、そのままレイフォンへと向かった。

「お前か、俺の作品をぶっ壊してくれたのは」
「作品？」

作品という言葉の意味が分らないレイフォンに、ハーレイが説明を入れる。

アダマンダイト
「複合鍊金鋼の開発者ね、こいつ」
「ああ……」

この間の老性体戦で使った鍊金鋼ダイトの開発者が彼だということか。
あの時は人嫌いだからと理由で会う機会がなかったのだが……

アダマンダイト
「複合鍊金鋼が剋の負荷に耐え切れず爆発したってホラ吹いたのはお前か？ 本当は壊したから捨ててきたんじゃないんだろうな？」
「おいおい……」

まさかこんなにも口が悪いとは思わなかった。

「レイフォンは嘘を吐いてませんし、きちんと報告もしたはずですが？ そもそもレイフォンの剋に耐えられない鈍らを用意したのはそっちなのに、責任転嫁も甚だしいですよ」
「何だと!？」

しかし、フェリも口が悪く、毒を吐く。
それに対しキリクが眉を吊り上げ、今度はフェリを睨んだ。

「まあまあ、2人とも落ち着いて。アダマンダイト複合鍊金鋼がレイフォンの剋に耐えられなかったのは事実なんだから、改良すればいいじゃないか。

やっぱり複合状態だと密度が圧縮しているせいで熱がこもりやすいんだ。熱膨張で硬度が落ちたり、形状が変化したりすれば壊れるって。だから、連鎖自壊しないようにさっき言った安全装置的な反作用逃がしの構造を試してみようよ」

ハーレイが2人をなだめつつ、キリクに専門的な意見を言った。

「その問題は勿論理解した。だが、お前の考えた構造だと今度は刀身自体の強度が下がる。こいつの全力の力と剄で振り回したら、簡単に折れるぞ」

「いくらなんでもそんなに貧弱じゃないよ。そもそも、レイフォンの剄に鍊金鋼ダイトが耐えられないのが問題であって――」

「だから、それについては――」

「……………！」

「……………！」

キリクが反論し、ハーレイも反論するを繰り返す。飛び出す専門用語にレイフォンとフェリは付いていけずに、白熱した2人から少し距離を取って観察することにした。

「……放って置いていいんでしょうか？」

「好きにさせたらいいんです。それよりレイフォン、アイス溶けますよ」

「あ、そうですね」

そんな会話を交わし、レイフォンとフェリは我関せずと言った感じで手に持ったアイスを片付けることに専念する。

なんとなくだが、ハーレイとキリクは当初の問題から離れたところで議論しているようにも見える。

2人が息を荒げながら議論を止めたのは、レイフォンとフェリがアイスを食べ終えた頃だった。

「くそっ、喉が渴いたぞ」

喉を押さえ、キリクが呻く。

「せっかく補給した糖分が無駄になったじゃないか」

ハーレイも額に浮かんだ汗を、ツナギの袖で拭っている。

もしレイフォンが壊れていたとしても複合錬金鋼アダマンタイトを持ち帰っていれば、この議論ももう少しは楽に——あるいは、そうはならなくとも参考にはなっていたかもしれないが、到に耐え切れずに爆発してしまったために欠片すら残っていない。

「よしっ、もう一度補給して、さっき挙げた問題の再検討だ。ストロベリー」

だが、そんなことはお構いなしに続ける気満々だった。

「望むところだ。チョコにしよう」

喧嘩をしてるのか、アイスをどれにするか決めているのかわからない会話をして、2人がそっぽを向く。

ハーレイが屋台へと向かい、キリクの方と合わせてアイスを購入しに行った。

そのためハーレイが居なくなったことによりキリクの視線が、睨みがレイフォンへと向けられる。

「……なんだ？　まだいたのか？」

どうやらレイフォン達の存在を忘れていたようで、意外そうな言葉漏らす。

「いや、なんて言うか……。貴方の作品を壊してしまつて、すみませんでした」

「別に謝る必要はありません。鈍らを用意したあっちが悪いんですから」

「ちよつ……。！ フェリ先輩！」

レイフォンがキリクに謝罪するが、それをフェリが切り捨ててしまふ。レイフォンは慌てるが、予想に反してキリクは怒っていないかった。

「お前の連れは口が悪いな。まあ、俺もあまり人のことは言えないが」

キリクはフェリに苦笑するも、すぐに元の悪い目付きへと戻る。ひよつとしなくても目付きが悪いのはデフォルトなのだろうか？ 視線はレイフォンから逸らしてキリクは言った。

「……壊した事は別に怒っちゃいない。単なる愚痴で嫌味だ。道具なんて壊れるために作られるもんだ。だけど、出来るならそれは有意義な壊れ方であつて欲しい。使い手の到に耐え切れずに壊れたなんて、技術者にとっては屈辱だ」

相変わらずレイフォンから視線を逸らしたまま、そして不機嫌そうなままキリクはレイフォンに問う。

「……あれは、お前の役に立ったのか？」

「もちろんです。確かに壊れてしまいましたが、普通の錬金鋼ダイトだけならあの状況は切り抜けられなかったかもしれない」

それは本心だ。そもそも普通の錬金鋼ダイトなら到に耐えられる時間も、強度も複合錬金鋼アダマンダイトよりもたなかっただろう。

あの時の戦いは、複合錬金鋼アダマンダイトだからこそ切り抜けられたのだ。

天剣があれば話は早く、もっと楽だったのだが……無いものねだりは出来ない。

「……そうか」

キリクはそれを聞くと満足そうに、車椅子のタイヤに手を伸ばして自分で向きを変え、レイフォンに背を向けた。

「次はもっと役に立つのを作る。お前はそれを活かしてくれよ」
「……はい」

その言葉にレイフォンが返事をし、フェリに促されて公園を後にする。

視界の端では、2つのアイスを持ったハーレイが早足でキリクの元へと戻る姿が見えた。

+

公園を後にして二人は帰路についていた。

「ここまでで良いです。荷物持ちごころうさまでした」

「あ、はい。どうぞ、フェリ先輩」

レイフォンは紙袋を手渡すと、フェリはじっとレイフォンの顔を見詰めていた。

「あの、先輩。……どうかしましたか？」

「呼び方の変更を求めます」

「は？」

「『先輩』だと、他の方と一緒にたにされているようで嫌です。私には別の呼び方をするこゝと要求します」

「ええ？」

いきなり呼び名の事で話題を振られ、レイフォンは戸惑うばかりだ。困りながらも頭を悩ませる。

取り敢えず、思いついたままに言ってみる事にした。

「……フェリちゃん」

「小さい頃から言われ慣れています。創造性の欠片もありません。却下」

「フェリっち」

「馬鹿にされている気がします。却下」

「フェリちゃん」

「意味あるんですか？ 却下」

「フェリやん」

「私は面白話なんてしません。却下」

「フェリりん」

「私に笑顔を振り撒けと？ 却下」

「フェッフェン」

「奇怪な笑い声みたいです。却下」

「フェルナンデス」

「誰ですか？ 却下」

「フェリたん」

「死にますか？」

一瞬のうちに重晶鍊金鋼の杖が復元され、念威端子——威爆雷が
レイフォンを取り囲んでいた。そんなに嫌だったのだろうか？

「……すいません、降参です」

「試合放棄は許しません」

どうしろと……レイフォンは頭を抱えなくなった。

「フェリ」

もうどうにでもなれと、やけ気味に言ってみた。短縮も無ければ、
変形も無い。何かに譬えた訳でもない。素の名前である。

「もう一度呼んで貰えますか、レイフォン」

「？ はい。ええと……フェリ」

「ふむ……」

（あれ？ 意外と好感触？）

フェリは右手を顎にやり、左手はその肘に、少し首を傾げた感じ
でどこか茫漠とした瞳が宙を撫でるように見上げていた。

「創意工夫の欠片も無く、ひねりも無く、先輩に対する敬意も無く、
私に対する親愛の情も無い。そもそも呼び名ではない」

無い無い尽くしでついでに容赦も無い言い方だった。好感触だと思
ったのだが駄目らしい。そう思っていただけに次の言葉は驚きだ
った。

「仕方ありません、これでいいです」

「え？」

「ただし、もっと親愛の情を込めること。先輩に対する敬意は要りません。というか、先輩を後に付けないように、あくまで呼び捨て、いいですか？」

「は、はあ……」

「では、もう一度言ってみて下さい」

「あ、はい。……フェリ」

「結構」

ようやく、ほっと胸を撫で下ろした。
ぬか喜びだったが……

「しかし、不公平ですね」

「はい？」

フェリはそんな事を口に出したからである。

「私だけだとフェアじゃありません。貴方の呼び名も考えましょう」
「ええっ？　べ、別にいいですよ」

だけどフェリはそれを無視し、呼び名の候補をいくつか出している。

「レイ、レイちん、レイ君、レイちゃん、レイっち……どれがいいですか？」

「え？　もうその中で決定ですか？」

「他に何か候補がありますか？」

「いや、自分で自分の呼び名を考えるのは恥ずかしいですって」

「では、レイちゃんにします」

「……ちよつと、考えさせて下さい」

いきなりの話の流れで戸惑い、しかもレイちゃんはないだろうと思うレイフォン。

「なんでですか？ 可愛いじゃないですか、レイちゃん」

「いや、できればカッコイイのが希望というか……」

抑揚のない声でレイちゃんとか言われると、凄く変だ。というかぶつちやけ、とても恥ずかしい。

「じゃあ、閃光のレイとかにしますか？ 毎日、会うたびに『おはようございます、閃光のレイ』『こんにちは、閃光のレイ』『おやすみなさい、閃光のレイ』と、おはようからおやすみまでそれ以外でも私に名前を呼ばれる状況では、常に閃光のレイと呼ばせるのですね？」

「……………」

なんだそれは……

子供ならカッコイイと言って喜びそうだが、レイフォンのように15にもなつてそう呼ばれるとレイちゃんよりも恥ずかしい。なんと言うか……軽く悶えたくなる。

「恥ずかしいですね」

「わかってるなら言わないでくださいよ！！ ていうか、なんで閃光？」

「閃光以外を希望ですか？」

「そういう問題でもないですが」

「わがままですね」

「嘘っ、僕がわがままなんですか!？」

疲れる会話をフェリと交わしながら、レイフォンは内心ではかなり焦っていた。ただでさえ『レイとん』なんて言う渾名がついているのに、フェリにまで変な呼び名で呼ばれるのはご免被りたい。

「では、フォンフォンにしましょう」

「うわっ、大逆転! なんですかその珍獣みたいな名前は!？」

流石にこれには冷や汗を流し、苦虫を噛み潰したような表情をするレイフォン。

「いいじゃないですか、フォンフォン。……お菓子食べます？」

だが、フェリはどうやらこれに決定したらしい。

ご丁寧に先ほどの買い物時、おやつにでも買ったスティックチョコをポケットに入れていたのか、それを取り出してレイフォンの口の前に差し出す。

「……ペット扱いじゃないですか」

「ペットで十分です」

「うわぁ……」

だけどこの言葉には、流石に笑みが消えてしまう。

幾らなんでもひどすぎると思いつつ、

「貴方はペットで十分です。だから、独りでそんなに力む事はないです」

「え?」

フェリの言葉に驚いた。

どうということかと、レイフォンはフェリに問い返そうとしたが、

「さようなら、フォンフォン。また明日」

問い返す暇すら与えず、そう言い残してフェリはレイフォンに別れを告げる。

その背を呆然と見送りながら、レイフォンは今頃気づいたように呟くのだった。

「というか……もうそれで決定なんですね」

+

「本当にいいのか？」

やや不安な声で、ニーナはミロクに訊ねた。

「かまいません」

まるで気負った様子もなく、ミロクは頷く。

練武館でニーナとミロクは顔を向き合わせていた。

自分に何か劉技を教えて欲しいと言うと、『ぴったりだと思うものがあるのでそれを教えます。まずは実演しますね』と快く承諾してくれたのだが……

「いや……だが、いきなり錬金鋼ダイトで殴れ、と言われてもな」

しかもただ殴るのではない。全力で殴れ、とミロクは言っているのだ。

正直、何を考えているか解らない。ミロクが無意味に何かをするという事は無いのだと思うが、一体どういう事なのだろうか、と。

「良いんですよ。幼生体に後れを取る者の攻撃が、幼生体を簡単に蹴散らせる者に通じると思いますか？」

「……それは……そうかもしれんが……」

「大丈夫ですよ。今の隊長では傷一つ付きませんから」
「……言ったな？」

力量の差が有るのは事実で正直反論が出来ないのだが、それでも今のはカチンときた。

クロムダイト
黒鋼鍊金鋼の鉄鞭を構える。内力系活到によって身体能力を強化し、ミロクを見据える。

対して、ミロクは自然体のままニーナを真っ直ぐに見据えている。怯えは無い。感情も見えない。瞳は研ぎ澄まされ静かにニーナを見つめている。

「ふっ！」

短い呼気を漏らし、ニーナはミロクへ向かって疾走した。

身体の捻りを最大限に生かした鉄鞭を振り、ミロクと叩き付けようとする。ミロクは動作をする様子も無い。

一体何をするのか、と思っていると鉄鞭がミロクの体を捕らえ――自分が吹き飛ばされた。

思わず鉄鞭を取りこぼすニーナ。呆然とした顔のまま、鉄鞭を落とした手を見つめる。

まるで硬い物を殴ったかのような感触に呆然とせざるを得ない。手は痺れ、握力が軽く失われている。

「今……のは？」

「金剛剋という技ですよ。俺の鏡反衝とは別系統の防御系統の技です。原理自体は至ってシンプルですよ？」

曰く、これはグレンダン最強の武芸者集団である天剣授受者の1人——リヴァースという人物の技らしい。

あらゆる攻撃を防ぎ、弾く最強の盾の技。

ミロクはレイフォンから教わったらしいが、鏡反衝の方が自分に合うため普段使う事は無いらしい。

「でも、この技は簡単だからこそ難しい、と思ってくださいよ？想像してみてください。汚染獣の牙を、その身で、瞬き一つせずに受け止める事の出来る精神力。隊長に有りますか？」

ミロクが金剛剋は使わず、鏡反衝を使うのもこれが理由だ。ミロクは自分にダメージが来る可能性を極力避ける。

奴隷武芸者であったが故に、不利な状況、相手が自らよりも強い場合もざらだった。だから、それ以上自分が不利になる条件、可能性を切り捨てていく。その結果、主にミロクの戦術は回避しながらのヒットアンドアウェーか、受け流しからのカウンターが主体となったのである。

「さて。金剛剋は基礎固めしていけば実戦でも使えるようになると思うので、今日はボール打ちでもしましょう」

そう言って硬球を持つミロク。

対してニーナは顔が引きつった。やや、足が後ろに下がる。

その様子を見てミロクは苦笑を浮かべる。傍には硬球を入れたカートもある。レイフォンの進言で購入した大量の硬球。それらがす

ぐに投げられるようになっていた。

ボール打ちとは、言ってしまうえば耐久レース。簡単に言えばミロクが延々とニーナに硬球を投げつけ、ニーナがそれを全て防ぎ、撃ち落とし、撃ち返すというルールだ。

単に硬球が投げつけられるのなら問題は無いが、そこに衝剋が込められていたりするとなると話は変わってくる。

内力系活剋で身体能力も強化しているミロクが放つ投球は、衝剋の威力もあってガトリングでも撃たれているかのような錯覚を覚えるのだ。

「往きます」の一言で開始を告げられ、硬球が高速でニーナの下へと向かっていく。

ニーナは鉄鞭で弾き返し、撃ち返す。ミロクは弾き返された硬球を鏡反衝で再び弾き返し、追加の硬球も投げつける。しばらくそれを繰り返すと、練武館の部屋の一つは其処ら彼処で弾丸のような速度で硬球が跳ねまわる空間に早変わりする。

その中心で硬球を打ち付ける音が響き渡る。ニーナが脂汗を浮かべ、必死な顔になりながら硬球を撃ち返している。

ミロクは鏡反衝が使えるので、自分に向かってくる硬球を跳ね返すだけだ。こと飛び道具の類では鉄壁の防御壁を敷いているので、ミロクは涼しげな表情である。

ニーナの気合いの籠もった、だがそれでいて悲痛な叫びが響き渡った。

+

「ヴァンゼ、これを見てくれ」

「どうした、カリアン？」

場所は変わり、生徒会室。

その部屋では主であるカリアンが、武芸長のヴァンゼに1枚の写真を渡していた。

「現在、汚染獣感知のためにツエルニの周りに探査機がばらまかれているのは知っているね？ その1機が持ち帰った映像なのだが……」

「まさか、またか!？」

再び汚染獣が接近しているのかと、ヴァンゼの表情に緊張が走る。だが、それを悟ったカリアンが首を振り、その考えを否定した。

「そう言う事ではないよ。画像は汚染物質で粗いが、それは汚染獣ではない」

そう言われ、ヴァンゼは一安心しながらも穴が開くように写真を見つめる。

暫く見つめ、そして気づいた。

「これは……」

廃都市

朝の清々しい空気を、リーリンは徹夜明けのような気分で感じていた。

何かあった日の翌朝というのは、いつも可笑しな感じだ。

どんなことがあっても一日というのは当たり前前に過ぎていく。それはそうだ。時間は無慈悲なまでに平等なのだから、リーリンがどんなに驚いたところで時間を逆戻ししてくれる筈がない。

学校の近くまでくれば、同じ学校の生徒達が朝の挨拶を交わしているのが聞こえてくる。リーリンもそれに加わりながら、校門まで続く並木道を歩いていく。

「ふう……」

朝から溜め息ばかりが出る。原因は何かは解っているのだが、それに対して自分が解決する事も出来ないという事もまた解っている。

「……溜め息ばかり吐いては幸せが逃げますよ？」

いきなり耳元で囁かれた。

「うひゃあああああっ!!」

素っ頓狂な悲鳴を上げながら振り返った先に、一人の少女が立っていた。

「クララ……」

少年のような格好をした少女である。

しかし、その身は女であり、その顔は美しいとさえ言える。剣帯を下げた短ズボンから覗く足はすらりと細く、肌は輝いている。サイドポニーで纏められた癖の無い長い髪は、奇妙な色合いをしている。そのほとんどは黒いのだが、一部が白い。染めた訳ではなく、生まれ付きそうであるらしい。

「おはようございます、リーリン。何やら浮かない様子でしたが、何かありましたか？」

にこやかな笑みを浮かべて挨拶をしてくる彼女は、クラリーベル・ロンスマイア。

天剣授受者、不動の天剣と謳われるティグリス・ノイエラン・ロンスマイアの孫。グレンダン三王家の一つ、ロンスマイア家の跡取りといわれる人物である。

本来、一般市民にすぎないリーリンは、そんなやんごとなき家柄の人物と気安く口をきける立場ではないのだが、数ヶ月前にミロクの行方を尋ねに学校を訪れた事をきっかけに話をするようになった。まあ、初めて会った時は本当に驚いて声を失ったのだが。

それからちよくちよくと暇が出来る度にレイフォンの昔話やら、ミロクの話やらを聞きに訪れるようになり、彼女の身分や立場を気にしない態度やレイフォンを悪く思っていないという発言から友人と言える仲になっていた。未だにリーリンとしては恐れ多いという気持ちも抜けきっていなかったが。

「おはよう。その、出来ればもうちょっと心臓に優しい話しかけ方をしてくれるとありがたいかな……」

少し恨みがましく言ってみる。いきなり背後からというのは、かなり心臓に悪かった。

「確かに、そうですね。特に殺戮をしている訳でもないのに目の前を通っても気付かれず、暫く周囲をぐるぐると付き纏っていたのに無視されたとはいえ、いささか悪戯が過ぎましたね。反省します」

腕を組んで頷き、反省の姿勢を見せるクラリーベル。しかし、

「……えっと、その……………ごめんなさい」

リーリンとしては、もう何と云っていいのか分からないほど気まづかった。

自分ではしっかりといつもどおりに——少なくとも外見上は——していたつもりだったのに、そうではないとはっきり教えられてしまった。

「いえいえ。私も悪かったのは事実ですから。……で、話は戻りますが。リーリンは何かあったのですか？」

「え？ それは、まあ……………その、ちょっと……………」

如何に王家の人間とはいえ、グレンダンの守護者たる天剣授受者から他言無用と言われており、言いよどんでしまう。

「厄介事でしたら力になりますよ。これでも武芸者で、それなりの実力と自負していますから」

「いや、ホントに大丈夫だから……………」

クラリーベルに言い訳をしながら、リーリンは昨日の事を思い出していた。

「悪いけど、君の身を暫く守らせて貰う」

夕暮れの学校の屋上で、サヴァリスはいきなりそう言い出した。

「あの……」

「質問は受け付けん」

リーリンが何か言うよりも早く、リントンスの冷たい声が遮る。

「うん。君には悪いんだけど、その通りなんだ」

サヴァリスは特に悪いと思っている様子もなく、そんな事を言う。

「でも、レイフォンが……」

再び言いかけ、リントンスの一睨みで黙らされてしまった。

「別に君の普段の生活に支障が出る事はないよ。秘密裏に対応できる天剣が抜擢されているからね。……まあ、事が起こるまでは、という条件付きだけどね。でも、君にはなるべく一人の時間を作ってくれると助かるな。」

あと、君が狙われる事に『何故?』とか、『誰に?』とか質問はしないで欲しいな。君も理由とかそういうのを知りたいだろうけど、判って欲しい」

「……レイフォンに関係あるんですか?」

サヴァリスは確かにそう言った。気になるのは唯その一点だ。

質問は無しと言われたのに、そう出来なかった。

リントンスの視線が一層強くなる。押し潰されそうな威圧感にリ

リーリンは動けなくなる。

「はぁ……言ったのは僕だからね」

サヴァリスの溜め息で視線が外れた。身代わりのようにリンテンスの殺人的な視線を受けても彼は飄々とした様子で頭を掻いていた。

「じゃあ、これだけは教えてあげる。レイフォンに関係する事だよ。だからこそ君に災難が降りかかろうとしている。これ以上は教えられない」

仕方ないといった様子で話すサヴァリスを見て、リーリンは震える身体を抱いた。

（……これが、レイフォンの住んでた世界なんだ）

リーリンは、自分の住む平穏な世界とは違うグレンダンにあるもう一つの世界がそうなのだと思った。

＋――＋

「はぁ、こんな早朝から仕事かよ。……だりい」

都市下部の都市外に繋がる外部ゲートに最後にやって来たシャーニッドが不平を零していた。後ろで纏めた髪は寝癖が残っていて、あちこち跳ねてもいる。既に十七小隊のメンバー全員が集まっていた。

「昼まで寝てるつもりだったのによ」

ぶつぶつと文句を言うシャーニッドにニーナが呆れた。

「お前……今日は休日じゃないぞ？ 昨日何をしていたんだ？」

「イケてる男の夜の生活を想像するもんじゃないぜ？」

「何でもいいからもう少しまともな生活をしろ」

怒るのも疲れたという顔で、ニーナは着たばかりの汚染物質遮断スーツの着心地を確かめている。

「ふむ、随分軽いな。……これは良い」

普段の戦闘衣の下に着られる上に、着た後もすぐ慣れるだろう程度の違和感しかない。せいぜい一枚余分に着ているぐらいの感覚だ。

「へえ、これがこの間あいつらが着ていた奴か」

シャーニッドが自分用に用意されたスーツを興味深げに眺めた後、

「……ふむ」

「何だ？」

顔を上げ、ニーナとランドローラーのサイドシートに退屈そうに腰を下ろしているフェリを、とても真面目な顔で見詰めた。

「……エロイな」

「さっさと着替えて来い、馬鹿者が」

「へーい」

フェリの絶対零度の視線を受け、ニーナに投げつけられたスーツを頭に引っ被ったまま、シャーニッドはだらだらと更衣室として割

り当てられた部屋へと向かっていく。

そのいつも通りのやり取りに苦笑を浮かべながら、レイフォンは今回の任務の内容を思い返していた。

任務の内容は、汚染獣によって滅ぼされたと思われる都市の調査。本来、動かない滅んだ都市なんてわざわざ人員を割いて調査などしないのだが、今回はその都市が何故かツエルニの所有する唯一のセルニム鉱山の近くにいるという非常事態のために調査をする事となった。

内部にまだ汚染獣がいて、次の獲物を求めて潜んでいないという確証がないからだ。

その任務に抜擢され、レイフォン達は汚染物質遮断スーツを着て、都市外に出かける準備をしていた。

「はあゝ」

レイフォンは自分達とは違う集団を見ると溜め息を吐いた。

安全である確証を得るための先行偵察をする任務だが、これは第十七小隊だけでする訳ではない。

都市外用のスーツの現状の数から二つの小隊が調査に選ばれており、もう一つの小隊は前回負かしたばかりの第五小隊である。

第五小隊隊長のゴルネオからはグレンダンでの出来事での恨みのためか、時折視線と敵意を感じる事もあってレイフォンはやや気分がブルーになっていた。

「レイフォン。大丈夫か？」

声を掛けてきたのはミロクだ。

「正直言うと、少しきついね。……けど、ミロクも酷いな。ルツケンスの武芸者がツエルニにいるなら、教えてくれればいいのに……」

レイフオンが恨みがましく言うが、ミロクは肩を竦めるだけだ。

「いや、俺も先日初めて知った。俺はルッケンスの正式な門弟というより、サヴァリスの個人的な弟子（サンドバック）（？）のようなものだったからな。ルッケンスの剋技を教えられたのも彼の趣味によるところが大きい」

「ああ……」

その発言にむしろ納得してしまった。

サヴァリス・クオルラフィン・ルッケンス。

グレンダンの名門ルッケンス家が輩出した二人目の天剣授受者ではあるが、個人として表現するのであれば『戦闘狂』と呼ばれる人物で、戦い以外の事にはまるで興味を示さない。

肉親に対してもそうであったとしても別段不思議ではなく、それならばミロクが話を聞いていないのもサヴァリスが弟の存在を忘れていたのだと考えれば納得できる。

（あれ？）

再び鋭い視線を感じてそちらを見たが、その視線の主はゴルネオではなかった。彼は五年生の隊長らしい貫禄をもって隊員達を掌握し、諸注意を言い聞かせていた。

こちらを見ているのは、ゴルネオのすぐ傍にあるランドローラーの上で胡坐をかいている少女だった。

確か、シャンテ・ライテだったか。

剣帯の色から五年生である事は解る。少なくとも二十歳になろうかという歳では、もう少女ではない。だが、フェリよりは高いが小さな背に童顔という要素があり、レイフオンと同じ年と言われても疑わないかもしれない。

彼女の真っ赤な髪の下にある猫科のきつい瞳が、レイフォンを真っ直ぐに睨み付けていた。

「この間の試合を引き摺ってるのかな？」

その様子を見ていたのか、鍊金鋼ダイトのチェックを終えたハーレイがおもむろにそんな疑問を口にしていた。

「どういう意味です？」

「十七小隊は武芸科うち以外に人気があるって事。華々しいデビュー戦の上に、隊員は全員下級生。隊長は美人だし、アタッカーの二人は目立つ。一般客の目から見れば面白いけど、それを気に入らないって人は沢山いるだろうって話だよ」

「「はあ……」」

いまひとつピンとこないレイフォンとミロクは生返事をするだけだ。

「こんな急じゃなかったら、新しい複合鍊金鋼アダマンダイトを渡せたんだろうけどね」

「……昨日、何か言い合いしてませんでした？」

「そうなのか？」

「うん。まあ……」

あの二人のやり取りは、実際に見てみないとその雰囲気を感じる事は出来ないだろう。だからレイフォンも言葉を濁す。

「昨日キリクと話してたのは、汚染獣用の話だよ。汚染獣と戦うには、従来の鍊金鋼ダイトだとしても耐久性に不満が出てきそうだから。今言ってるは対人用……と言えればいいのかな？」

まあ、とにかく軽量化の代償に鍊金鋼ダイトの入れ替えが出来なくなるタイプなんだけど、こっちはもうすぐ出来上がりそうだったんだ。またレイフォンにテストを頼もうと思ってたんだ。

流石に、ぶっつけ本番を何回もやりたくないでしょ？」

前回の複合鍊金鋼アダマンダイトにしても、実際に使ったのは老性体と対峙した時が初めてだった。

「確かにそれはその通りです」

「先輩。その軽量化した鍊金鋼ダイトは俺にも使えますか？」

軽量化と聞いて、自分も使えるのではとミロクも興味を惹かれたようだ。

「ああ、うん。そうだね。……普通の鍊金鋼ダイトよりは重いけど、複合鍊金鋼マンダイトほどじゃないからミロクにも使えると思うよ。

ミロクの分も作ろうか？」

「是非」

「了解。……えーと、そうなるとミロクは化鍊劉ルビーを使うから紅玉ブラチナは決定でしょ。後は今まで通り白金？ それだけだと芸が無いな。黒鋼クロムとか色々試してみようかな？」

ミロクの申し出をハーレイは快く承諾した。と言うより、既に頭の中で製作に取り掛かっているようでぶつぶつと言いつつ始めて、傍から見ると危ない。

そうこうしている間にシャーニッドが着替え終わり、第十七小隊の準備が完了した。

既に準備を済ませていた第五小隊の冷たい目に見られながらランドローラーに乗り込む。レイフォンとシャーニッド、ミロクが運転し、フェリとニーナがそれぞれレイフォンとシャーニッドの運転す

るランドローラーのサイドシートに乗る。ミロクは隊員全員の荷物と食料をサイドシートに乗せていた。

フェイススコープにはフェリの念威端子が接続され、普段の視界より鮮明な世界が広がった。

外部ゲートが開かれる。

『幸運を。そして良い知らせを期待しているよ』

カリアンの言葉が通信機越しに全員の耳に届き、レイフォン達は荒野に解き放たれた。

+

ツエルニを出てランドローラーで半日、レイフォン達は無事目的地である廃都に着いて第五小隊と共に調査を開始していた。

「……こいつは、ひでえな」

見上げるとシェルターの天井には大穴が空いていた。その下には天井から落ちたであろう瓦礫が放射線状に散乱している。しかも、その瓦礫の縁を、赤黒く染まった血が彩っている。

「酷い匂いだ」

天井に穴が空いているのにも関わらず、シェルター内部には腐敗の臭気がどんよりと内部に充満していた。レイフォンもニーナもシヤーニッドも口と鼻を手で覆っている。唯一ミロクだけはこの手の臭いには慣れていると、その臭気を無視して平然としていた。

なお、フェリはシェルターに入るのを拒否したために、シェルターの入り口で待機している。

「フェリ。生存者はいるか？」
「いません」

ニーナの一縷の希望を込めた問いは、念威端子からのフェリの声に冷たく切り捨てられてしまった。

「くそっ」

苛立ちに、ニーナが床に転がった瓦礫を蹴る。

「それにしても……ここにも死体が無しかよ」

シャーニッドが額にしわを寄せた顔で呟く。

都市のエアフィルターは生きているものの、シェルターの天井にある巨大な穴といい、血で染まった瓦礫と床といい、ここに汚染獣が襲ってきたのは間違えない。

だが、死体が無いとはどういう事か？

汚染獣がこの都市の住民を食べ尽くしたとしても、あの巨大さ故に人間を食べようとすれば食べ残しは必ず出てくる。だが、見渡す限り、そしてフェリの念威で確かめてもらっている限りでは、それは一切存在していない。

「まるで誰かが片付けたみたいだな」

ミロクの小さな呟きが大気に溶け込む。

しかし、片付けたにしても、未だ生存者は一人も見つかっていないし、生命反応があったとしても、それは野生化した食糧用の家畜や魚ばかりだった。

「この前、ツエルニに来た奴っていう線はないのか？ あれなら大群な分、都市民全員を残さず食べ尽くされる事もあり得るんじゃないか？」

幼生体の事だ。確かにあれは多いときは万を超える大軍の時もあったから、死体を一つ残らず食べ尽くす事もあるのかもしれないが、質問を向けられたレイフォンは首を振った。

「それなら、都市の壊され方がおかしいです。ほとんどの建物が上から押し潰される感じで壊されています。幼生体は空を飛ぶのがあまり上手くないので、幼生体の大群なら上からではなく横から押し倒す感じで壊れていないと」

この都市を襲った汚染獣は空から来て、空から去ったはずだ。この破壊規模からいって複数で大挙して来たのかもしれないが、幼生体の大群が襲い掛かってきたという感じではない。

「なら、何者かがここの死体を綺麗に片付けたという事か？」

ミロクの問いに、レイフォンは無言になるしかない。

仮に生存者がいて、その彼もしくは彼女或いは彼らが都市を襲った惨劇を逃れた後、何とか手段を見付けて死体の全てを葬っていったとは考えられない。

念の為レイフォン達はシェルターの内部を隅々まで搜索し、危険が無い事を確認してから地上に上がった。

「くあ、たまんねえ」

先に出たシャーニッドが大きく息を吐き、外気を充分に吸い込む。

地上にも腐臭は漂っているが、シエルターのようなほぼ密閉された空間よりはるかにましだ。

「この都市はどうなっちゃってしまっているんだ？」

都市の不可解な状況に、ニーナがそう零す。

「謎は謎のままでいいのではないですか？ 私達の任務はツエルニの安全を確保する事です。この都市の異常の調査は、ツエルニが到着した後にも余裕があれば可能な事です。汚染獣の反応は無いのですから、危険ではないと思いますけど」

「汚染獣の危険は無いかもしれませんが、この不可解さを放置すれば後々問題になるかもしれないだろう」

「それこそ兄の判断する事です。確かに死体が無い事は気になりますが、まさかホラー映画のようにゾンビになって人を襲うなんて事はあり得ません。下っ端にすぎない我々は、任務である都市の安全確認に重点を置くべきではないですか？」

「……フェリの言う事も一理あるが、私は先行している隊の一員としてできる限りの努力をしたいと考えている」

「その所為で本来の任務を外れては本末転倒だと言っているのです」

小隊で一番偉い隊長と、小隊で一番情報に詳しい念威操者の間での今後の方針に対する意見が対立する。

仲間同士で緊迫した空気が漂うかと思われた瞬間、シャーニッドがまあまあと軽薄な笑みを浮かべて二人の間を割って入った。

「こんなところで不毛な議論するのは止めようぜ。ここら辺で一旦中断して、日が落ちる前に第五小隊と合流した方がいいんじゃないかね？」

既に日は暮れようとしていた。

都市に危険が残っている可能性を考えると、早めに寢床を確保した方が良いのは確かである。

「第五小隊から連絡です。合流地点の指示が来ました」

「そうだな。……話は後にするか。では今から向かうと伝えてくれ。移動するぞ」

フェリに送られた座標による案内の下、レイフォン達は夕暮れの赤い光を浴びながら移動を開始する。

そろそろ街灯が点く時間なのに、周りを見てもそれらが灯る気配は一切なかった。

この都市の噎せ返るような腐臭のせいか、それともあまりに都市が静かすぎるせいか、舞い降りようとする夜の帳と共に、さらに不吉なモノが都市に覆いかぶさろうとしているかのように思えた。

+

第五小隊が見つけた泊まる場所は、都市の中央部近くにある武芸者たちの待機所だった。

「電気はまだ生きていたんだな」

ニーナが感心した様子で入り口前の廊下から駐留所内を見回した。

「機関は、微弱ですがまだ動いています。セルニウム節約のために電力の供給を自律的に切っていたのでしょうか」

フェリは空調によって清められた空気を存分に吸いながら、答える。

都市中を浸食していた腐敗臭もこの建物の内部には存在していない。それが正直、照明よりもありがたかった。

「隊長、ルッケンス隊長から部屋割りのことで話があると」

「わかった。行ってくる」

フェリが第五小隊からの通信を伝えると、ニーナは足早に通路の奥へ消えていった。

段取りとしては、部屋を決めてお互いいつでも連絡をできるようにしてから、食事などの休憩を交代で入る事になっている。

部屋割りも事前に人数分以上の部屋がある事はわかったので、そんなに時間が掛かるわけでもない。

その少しばかり手持ち無沙汰になった時間を、ただぼんやりと入り口を眺めながらレイフォンは待っていた。

「あ……」

「……あ」

入り口から入ってきたのはシャンテだった。

シャンテは十七小隊のメンバーを見て嫌な顔をし、レイフォンはぼんやりした表情を消して瞳を細めた。互いの視線が交差する。

その睨み合いの時間はほんの一瞬。レイフォンはすぐに目を逸らした。

厄介事が起きる前にこの場を去るべきか？ それとも彼女を通り過ぎ、そのまま彼女の悪意を受け流して何事もなかった事にするべきか？

判断に迷っていると、シャンテがレイフォンの目の前に立っていた。

「おい」

その瞳には隠しようもない怒りが浮かんでいる。

「お前、何で武芸を続けている？　またゴルの兄弟子のような武芸者を増やすつもりか！？」

兄弟子という言葉で、レイフォンは身体を強張らせた。シャンテがグレンダンでの事件をかなり詳しく知っている事を悟らざるを得なかったからだ。

それに対する反論はある。ガハルドが剄脈を壊し、武芸者として駄目になったのは、レイフォンの攻撃によるダメージが直接的な原因ではなく、精神的な面での影響が大きい事をレイフォンは知っている。

だが、それが何の言い訳になるというのか。

ガハルドにも悪い面があったとしても、レイフォンが起こした事件である事には違いは無い。

そして、ガハルドの身内の恨みがレイフォンに向かうのも当然の事なのだ。

レイフォンとて、もし孤児院の皆が厄介事に自ら入り込んで自業自得で誰かに大怪我を負わされたとしたら、その相手を恨まずに済ませるのは不可能だろう。感情はそう簡単に我慢できるものではないのである。特にレイフォンのような者にとっては。

「何も言えないのか？　それとも知らん振りか？」

見えない殺気が刃となって喉元に突き付けられたようだった。彼女の怒りは、その赤い髪と相まってか、燃え盛る炎のようなイメージが付きまとう。

レイフォンは他人事のようにその様子を眺めていると解った事があった。

シャンテにはレイフォンに聞きたい事など無い。ただ自らの押さえようのない怒りを発散させたいだけなのだ。

その怒りがゴルネオの怒りに共感してのものなのか、それとも武芸者のモラルから発生しているのかは解らないが。

「何とか言え!!」

レイフォンの無言の態度に焦れたシャンテが怒鳴ったところに割って入ったのは、氷のように冷たく、鋭ささえ感じられる声だった。

「……弱い犬ほど良く吠えますね」

「なっ、何だっ!? てめえ! 何の用だ?」

いつの間にかフェリが傍にやって来て、シャンテを冷ややかな目で見ていた。フェリはシャンテに睨まれるものの怯んだ様子はない。

「彼が何で武芸科にいるんだ? そんなのは、貴女達が弱いからに決まっているでしょう。本来なら彼は一般教養科に所属し、武芸に関わる事などなかったでしょう。それが、貴女達が実戦の時に弱すぎたからこそ、おまけに負け戦を前にして逃げるような腰抜けが多かったからこそ、こうして彼がその尻拭いをしないといけなくなっているのです。守護者たりえない武芸者なんて、それこそ社会には不要です。」

今、武芸科が他の生徒たちからどのような目で見られているのか知らないわけではないでしょう? 二年前の自分達の無様を棚に上げて他人を罵る。プライドばかりが一人前で実力が足りない武芸者なんて有害でしかありません。顔を洗って出直してきなさい」

現在の武芸者の総数は、自主退学者のために例年より一割ほど減っている。

おまけに都市の復興・復旧や武芸科強化のために補正予算が使われたために、武芸科に対する目は武芸科以外の上級生を中心に厳しいのだ。

もしも負ければツエルニを卒業する事で得られるはずの資格がなくなるのだから、上級生としては焦り、怒るのも仕方のない現状であつた。

「なっ、このっ……て、てめえ……」

シャンテが怒りでぶるぶると震え、その手が腰にある剣帯の方へ伸ばされる。

それを見て、近くにいるレイフォンや、遠くで事態を傍観していたシャーニッド、見回りから怒声に何事かと様子を見に来たミロクの表情が一変した。

口喧嘩ぐらいならまだどうにかなるが、鍊金鋼ダイトを使うとなると大怪我にも、下手したら死にも繋がる恐れがある。

その一氣に高まった緊張を制したのは、廊下側から急いで走ってきたゴルネオだった。

「そこまでにしろ」

「ゴルっ!? でもっ!」

「ここで争いを起こすな。出発前にも注意しただろうが!」

「むううううううっ!!」

ゴルネオはシャンテの小さな頭に拳骨を落とすと、シャンテはゴルネオの太い足を殴り付けて通路へ消えていった。

「すまん、うちの隊員が迷惑を掛けた」

「……全くだす」

「ちょっ……フェリ先輩」

相手から謝ってきたというのにそれを配慮しないフェリの頑な態度を見て、レイフォンはフェリを小突いて撤回を促すものの見事に無視された。寧ろこちらが睨まれる。その瞳は「先輩と呼ぶな」と語っていた。

「あいつのレイフォンに対する敵意は、俺に影響されたものだ。決して第五小隊全体でのものではないことを承知してほしい」

「そうですか。……それでは、貴方も納得していないと？」

「……ツエルニの小隊の隊長の一人としては、その力が必要だと理解している。だが、個人としては納得できるはずがない」

「……」

レイフォンを見ないようにしてそう言うゴルネオの瞳の奥には、シャンテの以上の怒りの炎が燃え燦っているような気がした。

+

部屋割りを決めて、ニーナとだけ簡単な打ち合わせを済ませると、第五小隊は第十七小隊に関わろうとしなかった。割り当てられた部屋も彼らとは大分離されている。

第十七小隊が使っている応接室には、食欲をそそる匂いが漂っていた。

「……まあ美味いんだが、男の料理しかないというのが、なんというか……少し残念な感じだな」

シャーニッドの視線を女性陣は黙殺するどころか、反撃までして封じ込める。

「そう言われるとシャーニッド先輩も作っているかのように聞こえますが、貴方も私達と同じじゃないですか」

「仕方ないだろう。不味い料理など誰も食べたがらないからな」

「俺でも簡単な酒のつまみぐらいは作れるぜ？　まあ、それは置いてだ。高級住宅に住んでいるフェリちゃんはともかく、貧乏寮に住んでいる筈のニーナが料理ができないってのはどうかと思うぜ」
「放っておけ」

電気も火も使えることは確認したので、冷たく味気無い携帯食を食べるよりは、と考えたレイフォンとミロクが食料品店からまだ使えるものを探し出して調理したのである。

青野菜系は全滅していたが、芋や養殖場の魚がまだ生きていたので、メニューに苦勞することはなかった。

簡単に済ませたのだが、なかなかの好評のようなので料理長のレイフォンとしては安心して胸を撫で下ろすことができた。

「ふむ、これなら問題ないな」

「何がですか？」

レイフォンが聞き返すと、ニーナは上機嫌そうな顔を向けてきた。

「鉱山での補給は早くても一週間はかかって、その間は授業が休みになる。これを機会に強化合宿でもやろうかと考えていてな」

「へえ、合宿ねえ」

シャーニッドが乗り気ではない声を出した。

「これまでの対抗戦で報奨金もいくらか貯まってきたからな。隊の予算に余裕が出来たのもある。生産地区でいいところがあるそうだからな。そこでじっくりやる予定だったんだが、一番の問題は食べ

物だった」

「あそこら辺じゃ、店もないか」

「ああ。あいにくと、私は作れん」

「俺もきちんとしたのは無理だ」

フェリは無言だったが、今の状況と家の全く使った形跡のなかったキッチンを考えたとおそらく無理なのだろう。

「だから誰か料理のできる友人に頼もうと思っていたんだが、レイフォンとミロクの二人ができるなら大丈夫そうだな」

二人で作るなら負担は減りそうだしなと付け加えると、ニーナはほっとした顔でお茶を飲んでいた。

しかし、合宿ともなると栄養の事も考えなくてはいけなくなる。そうなると自分達では不安が残る。リーリンに手紙で指摘されたように、栄養バランスを考えて作るのが苦手という欠点をレイフォンはよく自覚している。

ミロクも作れるには作れるが、そもそもがまともな食事が食べられれば満足という考えがあるので、やはりバランスを考えるのが苦手だ。

（メイにでも頼んでみようかな？）

レイフォンの頭に浮かんだのはメイシェンだった。ミロクと昼に弁当と食べさせて貰っているから、料理の腕に問題は無い事は判っている。ただ人見知りが激しいので、来てくれるかは微妙だ。それでも合宿期間中のメニューを考えて貰えばいい。

と、そんな事を考えているレイフォンにニーナが再び話しかけてきた。

「レイフォン。……あの、そのだな……」

あの一度決めたら真っ直ぐが信条のニーナが、珍しく何かを言いよんでいる。

レイフォンが続きを促すと、ニーナはそのままごとさせていた口を大きく開いて言葉を発した。

「さっきの諍いのことについてなんだがな」

その言葉にレイフォンはやはりと思った。

あの場にゴルネオが現れたのだ。ならば、ゴルネオと話し合いをしていたはずのニーナもあれを聞いていて可笑しくなかった。

すぐにでもレイフォンに詳しい事情を聞きたいと思う気持ちを抑えて、食事の後という事でレイフォンもリラックスでき、全員が集まっているこのタイミングを見計らっていたのだろう。

ニーナの瞳には、不退転を示す意志が宿っているような気がした。

「あの幼生体との都市防衛戦を見た時から、何故レイフォンほどの実力の持ち主がここへ来たのかずっと疑問に思っていた」

ツエルニは学園都市だ。故に武芸者は基本的に都市を出ることが許されるような二流、三流どころの若い武芸者が集まる場所である。

レイフォンほどの優れた武芸者が都市の守護から離れてやって来ることなど、通常ではあり得ない事なのだ。

そう、何か特別な事情がなければ。

「ミロクの事もあるから、レイフォンにも同様に何か複雑な事情があると考えていた。だから、今まで私も無理に聞く気はなかった。どんな事情があるにしろ、都市を守るという意思をあの時や老性体戦で命を懸けて戦うレイフォンから感じられたからな。」

私がレイフォンを十七小隊に受け入れたのもそれが理由だし、今の事態になるまで下手に詮索するつもりはなかった」

場の空気は先ほどの食事中和やかな雰囲気とは一変して、ニーナから醸し出す真面目で緊迫した空気がレイフォンだけではなく、周囲にまで及んでいた。

「……ニーナ。別に無理して聞く必要はないんじゃないのか？ 今回の諍いだって最近何かがあったから起きたんじゃないかって、昔に何かがあったから起きているんだろ。ゴルネオだってレイフォンが入学してから今まで何も行動してねえんだから、視界にレイフォンが映らなければ今まで通り自重するだろうさ。後一日放っておきゃ、自然に解決だ。誰だって過去をほじくり返されるのは嫌だろう？」

「……私もシャーニッド先輩と同じ意見です。あと事情を知っている者として付け加えるなら、ゴルネオの恨みは第三者から見たら完全に逆恨みです」

「俺も同じく知っている者として言わせて貰うのならば、何故ゴルネオ・ルッケンスがここまでレイフォンを目の敵にするのかが理解できない。そんな事情です」

「やはりミロクは知っているか。だが、フェリも事情を知っていたのか。……そうなると当然生徒会長も知っていると考えた方が良いな」

「そう思って結構です。なぜか本人が黙っているんで代わりに私が言いますが、都市の最高権力者が隠した方が良くと判断しているのに加えて、その最高権力者は過去に何かがあったレイフォンが武芸科に入るのをちゃんと許可しているのです。」

——隊長。貴女にそれを暴く権利が、そしてレイフォン個人の気持ちとトップの意志を無視してまでする必要があるのでですか？」

「……別にそういうつもりはない。過去を暴こうとか、興味本位だとか、そういう気持ちから聞いているわけではない事はレイフォン

も信じてほしい」

「はあ……」

暴くという物騒な言葉から、レイフオンはニーナがレイフオンの過去を聞いたらどうなるのかを考えた。

そして、ニーナは潔癖性の高い武芸者だからと考えると、レイフオンの表情と予想はどんどん暗くなっていく気がした。

「ただ、知らなくてはならないと考えている。このまま先送りにすれば、確かに別に今まで通り過ごせるようになるのかしれない。だが、レイフオン。お前はそれでいいのか？ 今避けてもどこかで偶然出会ってまた口論になるかもしれない。今はゴルネオの理性が勝っている、時が経つにつれて変わるかもしれない。

……レイフオン。お前は言い掛かりを付けられても全然反論しなかったな。それは言葉が思いつかなかったのか？ それとも罪悪感か？ あるいはそれは部外者の私には判らない。

だが、お前は私の部下で仲間だ。困っているというのなら助けてやりたいし、力になる。所詮は事情を知らない者の戯れ言かもしれないが、それが私の本心だ。話してはくれないか？」

ニーナに話したところで、この問題は解決できないという予想は未だ変わらなかった。

だが、考えてみれば今までニーナに迷惑を掛けてきたのも事実なのだ。

この任務で協力し合わなくてはならない筈の第五小隊の小隊長と個人的な事情で仲が悪い。それが小隊全体の微妙な距離感にまで繋がっている。それは今こうして第五小隊が離れた部屋で泊まっているという事実が端的に示しているのである。

ゴルネオが公務になるべく影響を出さないように気をつけていても、隊長の影響力とはそれほどまでに大きい。

その申し訳のなさでニーナの善意を無視するという罪悪感でレイフォンは、話すべきか迷いが出てきていた。

ミロクは良い。彼は全てを知りながら、自分の事を友達だとツエルニにまで付いて来てもくれた。

フェリも同様だ。彼女も事情を知りながらも軽蔑もせず、普通に接してくれた。

だが、ニーナは？ シャーニッドは？ ここにはいないが、ハーレイはどうだ？

彼女達は全てを知った上でも、レイフォンを仲間だと言ってくれるのか？ それが怖い。怖い？

そこに至って、レイフォンは十七小隊のメンバーの事を大事に思っている事に気がついた。

始めはただの成り行きのようなものだったのである。

ただ小隊に入る必要が出て来て、ミロクという近しい人物がいて人数が一番少なかった十七小隊を選んだと言いつても良い。

その知り合い程度に過ぎなかった人達が、何時の間にか仲間になんかアップしている。

汚染獣戦後も深くレイフォンの過去を探られる事もなく、小隊メンバーとしてミロク共々受け入れられたからだろうか？

数ヶ月という期間、勝利を目指して共に訓練を重ねて対抗戦に出てきたためだろうか？

そこまで考えたレイフォンは、認識が変化した理由なんてどうでも良いことに気がついた。

彼女達に過去の事が詳しく知られたとしても、レイフォンが彼らを仲間だと思って気に入っているのは変わらない。それならば、たとえば過去をどう思われようと今をどうにかしていけばいいだけの話だ。

その事実が、レイフォンの長い沈黙を破った。

「そうですね。……それでは、僕の過去に何があったのかを話したいと思います。ミロクも何か補足する点があったら頼むよ」

「いいのか？」

ミロクが暗に話したくなければそれでもいいと言ってくるが、レイフオンは首を縦に振った。

「うん。僕は嘘を吐いたり、誤魔化したり、隠し事するのは向いてないみたいだから」

そう。そんな事は、それこそガハルドの一件で知っていた筈だった。

まるで失敗を次に活かせていないなど、自嘲しながらレイフオンは己の過去を語り始めた。

昔語り

皆の視線が集中する中、レイフオンは自らの過去を語っていく。

「僕は小さい頃……それこそ物心つく頃から武芸を始め、才能があった為に早くから戦場に出るようになりました。グレンダンの武芸者は完全に実力主義で、実力があれば生まれや年齢を考慮されず公式試合や汚染獣戦にも参加出来るので、色々な試合や戦場に積極的に参加していたら、十歳の頃に天剣授受者になっていました」

天剣授受者を夢見ている普通の武芸者達が聞けば、怒り狂うような話かもしれないが、それがレイフオンにとっての真実。

「天剣授受者とは何だ？」

ニーナが聞き覚えの無い言葉に首を傾げ、訊ねる。

「槍殻都市グレンダンで最も武芸に優れる者に与えられる称号の事です。称号の与えられる者は最大で十二人。グレンダン王家秘蔵の鍊金鋼ダイトである天剣という特殊な鍊金鋼ダイトを授けられる、グレンダンで最強の武芸者である証でもある称号です。

授受の条件は、必要とされる公式試合数、及び汚染獣戦の参加回数——つまりは周囲に天剣授受者に相応しい実力を示す事と、天剣授受者決定戦での優勝。求められるのは、通常の鍊金鋼ダイトでは耐えられないほど大量の剉を持ち、老性体と一対一タイマンで勝利するだけの実力

——純粋な強さです」

「……嘘だろう？ そんな存在に僅か十歳で？ 私が十歳の頃は、満足に鍊金鋼ダイトを握らせても貰えなかったぞ」

「グレンダンは汚染獣と戦う機会が極端に多いんですよ。だから武芸者は数よりも質が求められ、才能があれば戦場に出るのが一桁の年齢というのも珍しくはないです」

そう言ってからシャーニッドが眉を寄せているのに気が付いた。

「シャーニッド先輩。聞きたい事があれば、どうぞ。僕は話が下手ですし、時間があるので疑問があればその都度お答えします」

「悪いな。……汚染獣と戦う機会が多いって、一体どのぐらいなんだ？ 年齢を考えりゃ、必要数戦うにしても数が多くなきゃ条件満たせられねえだろ？」

「そうですね。……大体週に一度、下手をすると毎日のように襲ってきますね」

その頻度にニーナとシャーニッドは目を剥いて驚いている。

他の都市では、汚染獣が襲ってくるのは数年から十数年に一度、少なれば数十年に一度といったところだ。

初めてそれを知った時は、レイフォンはその平和さに驚いたし、グレンダンが狂った都市と呼ばれるのにも納得してしまった。

「……話を戻しますね。僕は幼くして武芸の頂点に立ちましたが、それに満足出来なかった。出来れば良かったんですが、出来なかった。そもそも僕は天剣授受者になりたくてなった訳ではなく、お金を稼ぐために戦い、その結果、何時の間にか天剣授受者になったからです。」

孤児院の皆がもっといい生活を送れるように、もっと高い教育を受けられるようにと、僕の育った院だけならまだしも他の孤児院も助けたくて、より多くのお金を求めています。

そんなある時、僕は知ったんです。高額な賞金が得られる闇の賭け試合の事を」

賭け試合と聞いて、ニーナの顔が引きつる。

武芸が穢されたと、そう思ったのだろう。多くの人々が、武芸を外敵から都市や人々を守るためにあるものとして神聖視している。

特に武芸を志す者達には、その考えは根深い。ニーナはその中でもかなり深い方だろうからだ。

「そして、最終的にお金を稼ぐために賭け試合に出ている事がグレンダン中に広まり、僕はグレンダンを追放されました」

「端折り過ぎだ。バカか、お前は」

ミロクに頭をはたかれた。

殺気が無いから避ける事が出来なかった。恨みがましく見るとミロクだけでなく、フェリも呆れた顔をしていた。

「何故賭け試合に手を染めたのか、ゴルネオとの諍いに繋がるガハルドの事が全く触れていないだろう？」

「あ……………そうか」

頭をさすりながら指摘された個所を補足していく。

「そもそもの切っ掛けは、グレンダンで起きた食糧危機でした。孤児院の皆がどんどん痩せていったり、飢えて死んで……………年を越せなかったりしていく中で、僕だけが武芸者であると理由で優先的に食べる事が出来て……………食糧危機を乗り越えた後も、皆が死なないようにするには、助けるにはお金がいるという強迫観念に衝き動かされ、それが何処かの外しているとも、皆が僕に望んでいた事はそんなお金ではなかったのだと気が付く事もなく、ただひたすらに走り続けました……………」

ブレーキなんて付いていなかった。レイフォンはただ『お金を稼ぐ』という目的のために全力で武芸の道を走り続けた。

なまじ才能が有り、独りでどうにかする事が出来たから、レイフォンはどうしようもないところまで踏み込んで、挫折してしまった。別にそれを後悔してはいない。

自分のした事で孤児というレイフォンの多くの仲間は助かり、「こんな小さな孤児院にも援助をしてくれてありがとうございます」と、「貴方のおかげで孤児たちの生活が豊かになりました」と、「貴方のおかげで子供達に高い教育を受けさせてあげる事が出来るようになった」と、感謝の言葉と笑顔が得られた。自分の武芸で救われた孤児^{なかま}がいた。

その結果だけは、間違っていないと思えるから。
ただ、家族のほとんどに理解を示されず、裏切り者と罵られ、物を投げつけられたのが哀しかっただけ……

「……少し、それでしたね。」

——僕が闇試合に出ている事が広く知られる事になったのは、ガハルド・バレーンという武芸者が僕が闇試合に出ている事を知り、天剣授受者を決める試合でわざと負けろと脅迫してきたのが原因です。

僕はその強迫に乗らず、試合中の事故に見せかけて殺そうとし、失敗した。その後、ガハルドの告発によってグレンダン中に僕のしてきた事が広がりました」

「……」

「……」

ニーナは言葉を失い、シャーニッドは難しい顔で黙りこんでいる。

「誤解のないように言っておきますが。別にレイフォンは闇試合に出ていたり、武芸者を一人殺そうとしたから天剣授受者を辞めさせ

られた訳でも、都市を追放された訳ではありません」

『え？』

ミロクの言葉にレイフオンを除く、全員が疑問を持った。どういう意味なのかと。

「対外的には、『天劍授受者がグレンダンの武芸者の代表的立場にある以上、グレンダンの武芸者の規範とならねばならない。それを破ったレイフオン・アルセイフには天劍授受者たる資格無し。天劍没収の上、都市外への退去を命じる。猶予は一年』と、これが理由ですが。」

最も問題だったのは、レイフオンが天劍を持つほどの者の力の脅威を都市の住民に知らしめてしまった事です」

「その通りです。実際、陛下がすぐに僕から天劍を剥奪して追放しなければ、暴動が起きていたかもしれないですよ。」

陛下に言われたんです。『気付かせてはいけないのだよ。我々武芸者や念威繰者が“人間”ではないという事を、人類に、本当の意味で気付かせてはいけないんだ』と。

武芸者や念威繰者が、自分達を守ってくれる筈の存在が、ふとした拍子に自分達を傷つける凶器になるのだと、しかもただの人間に對抗する手段が無いという事を気付かせちゃいけない。もし気付かれては都市が終わる。汚染獣でも、戦争でもなく、人の暴走によって都市は死ぬんです」

それら全てを知ったのは、アルモニスに打ちのめされた時だった。

『君の幼い狡猾さが、そういう事態を引き起こしそうになったんだよ。分るかな？ 幼いからという理由で許されるものではないし、君が幼いからこそ最悪の事態を呼ぶ事になりかねなかった。人は弱い。武芸者もまた弱い。武芸者なくして人は汚染獣や戦争の脅威か

ら生きる術はなく、人なくして武芸者は社会を維持できない。群れなくては生きていけないのは人も武芸者も同じ。この共生関係は維持されなくてはいけないのだよ』

そう言われた。

「……ゴルネオは、それでレイフォンを毛嫌いしているのか？」

「おそらく、別の理由でしょう。ゴルネオ・ルッケンス。ルッケンスはグレンダンの格闘術の名家で、ガハルド・バレーンもルッケンスで格闘術を学んでいる。彼からすれば、僕は同門の兄弟子を駄目にした仇になるでしょう」

「しかし、それでもあそこまで恨むのは良く判らないですけどね。

俺は一応ルッケンスに出入りしていたから知っているんですが、ルッケンスは今グレンダンで落ち目になっています。ガハルドはレイフォンを恐喝し、天剣授受者というグレンダンで特別である地位を穢した人物と言われています。殺されかけたとは言っても生きていた訳ですし、武芸者として再起不能にもなりましたがそれは彼自身の精神状態が原因と言われています。だから、ガハルドを同情する武芸者は少ないんですよ。

そもそも武芸者の律を外れたレイフォンを許せなかったのならば、何故試合前にしなかった？ 恐喝をしたのならば所詮はお前も同じ穴のムジナだという声もあったぐらいです」

ニーナは暫く考えをまとめるように黙った。

「……私の答えは出た。レイフォン、私はお前の味方になるぞ」

「はい？」

「お前がもっと私利私欲のために動く奴だったらどうしようかとも思っていたのだがな。杞憂だったようだ。都市外追放処分で、もう充分に自分の罪を償っているのだというのであれば、私がこれ以上

何か言う必要もないだろう」

「怒っていないんですか？」

潔癖症のあるニーナの事だから、闇試合や殺人未遂でてっきり怒られると思っていたのだが。

「無論、武芸者として許せないという気持ちはある。だが、私はツエルニに来てからのレイフォンを知っている。私の知るレイフォンはグレンダンでの失敗を繰り返すような奴ではない。そう信じている。だから問題ない！」

ニーナらしい言葉で、何処か楽観に似た結論を言い切られてしまった。

「シャーニッド先輩は？」

「俺に言わせると、お前らって歳の割にハードな人生送り過ぎだろって、感想だな。……人生と青春をもっと謳歌しても罰は当たんねえぞ？」

「シャーニッド先輩ほどお気楽に生きるのもどうかと思いますね。しかし、先輩が言う又何故か彼らが薄っぺらい人生を送って来たかのように錯覚するのが不思議です」

「……フェリちゃん。最近、俺に対して酷くない？」

先程までの緊張した空気が無くなり、和みそうになった瞬間、

「っ！ 外、南西二百メルに生体反応。ただの家畜ではありません
！」

フェリがはっと顔を上げて叫んだ。

「！ 先行します」

「俺も行くぞ！」

待てというニーナ達の声置き去りに、レイフォンとミロクは窓を突き破って一陣の風となった。

レイフォンは活剏で身体能力を強化し、暗い都市を駆ける。鍊金^{ダイ}鋼^トを鋼糸状態で復元し、先行させて夜気を切り裂きながらフェリの示した方向に向かう。

並走する形で、ミロクもレイフォンの隣で街並みを駆け抜ける。

「何だ？」

「山羊？」

目的の場所に辿り着いたレイフォンとミロクは、夜の中からぼんやりと姿を浮かばせる四足の獣を見た。

それは、雄々しいまでに放射状に角を生やした黄金色の牡山羊だった。

+

サイハーデン。

道場主であり養父のデルク・サイハーデンがその技の全てを伝承している武門である。

グレンダンでは天剣授受者を輩出する事のない武門は衰退し、消滅していく。しかし、レイフォンが天剣授受者となるまでサイハーデンという流派は無くなる事はなかった。その流派を収めた武芸者の生存率が極めて高いためだ。人に、汚染獣に、普通の武芸者が戦って勝利し、生き残るにはどうすればいいかを追求し続けた結果である。

そのサイハーデンの背の高い鉄柵に囲われた道場の敷地にある多

少手狭な居住空間にリーリンはいた。

「お疲れ様、お養父さん」
「うむ」

すでに初老といってもいい年齢に差し掛かった男——デルク・サイハーデンが、訓練用の模擬刀を握って道場から出てきた。

その気配を背後に感じながら、リーリンは食器を洗っていく。

「リーリン。最近、変わったことはなかったか？ 誰かに何処から見られているような」
「え？」

と、デルクがいきなり尋ねてきた。リーリンは、その言い様に確信に近い響きを感じて固まった。

「どうして？」
「ここ最近奇妙な気配や視線を強く感じる。人のものであって、人でないというか……この感覚を知っているような気がしないでもないが、それとはまったく別のような気も——」
「お養父さん……？」

いきなり言葉をきったデルクにリーリンはどうしたのかと尋ねるが、デルクは無言のまま手に持っていた模擬刀を置くと、懷から鍊イット金鋼を取り出し、復元する。

「リーリン、下がっている」
「……どうして？」
「今夜の気配に殺気が混じった。……来るぞ」

いきなりの事に戸惑いながらも、リーリンはデルクの言葉に従ってデルクの背後に隠れると、デルクの眼前の壁が粉碎された。

もうもうと立ち込める土煙の向こうから、浮浪者のごとき身なりの男が現れた。

差し込む月光に照らされ、男の顔が明らかになる。

「何？」

「……え？」

その顔には見覚えがあった。

恨んでも恨みきれない人物。しかし、きっと恨む事は間違っている人物……

「ガハルド・バレーン……」

デルクが唸るようにその名を呼んだ。

+

レイフオンは鍊金鋼ダイトを剣の形に復元し直した。

「なんだ……これは？」

奇妙な感覚が体にまとわり付く。足から頭までと同じ高さまで伸びた角は無数に枝分かれして夜の闇を押しつけている。その角にも目がいってしまうが、その大きさも獣にしてはかなりもので、頭までの高さでレイフオンと同じくらいはあった。

ただの獣——家畜の類ではない。

その圧倒的な存在感がレイフオンの身体を萎縮させている。殺気でもぶつけてくれば、戦闘に意識が完全に切り替わって身体

がほぐれると思うのだが、敵にその様子はない。

ただ、静かな湖のような青い瞳で、レイフォンを見つめ続けている。

その瞳を見て、レイフォンはさらに気持ちが悪くなってきた。

まるで獣の姿をした人間に見られているような妙な感覚。

今までに見た事も無い理解不可能な存在の筈なのに、その瞳を見ていると何となく理解できてしまいそうな矛盾から気持ち悪い。それに対抗するために、レイフォンは剣を握る手に力を込めた。

「ミロク。どう思う？」

「……」

黄金の牡山羊に対する警戒を怠らないまま隣にいる筈のミロクに語りかけるが、反応が無い。

「ミロク？」

不審に思い、ちらりと横を見て驚愕した。

ミロクは全身から冷や汗を吹き出させ、硬直していた。

汚染獣戦はともかく、対人戦においてはレイフォンをも凌駕する戦闘経験を持つであろうミロクが、瞬きを忘れたように目を開いたまま石像のように動かない。

（……こいつは、危険だ）

黄金の牡山羊は全く反応せずに悠然とその場に立ち、レイフォンとミロクを見下ろしている。

汚染獣ではないはずだ。餌である人間を目の前にしたときの食欲が感じられなし、汚染獣とは違う“何か”のだと、レイフォンの感覚が主張している。

向こうに敵意はないようだが、自身の直感とミロクの反応が『こいつは危険だ』と告げている。

「……お前達は、違うな」

低い声が当然レイフォンの耳に届いた。

「この領域の者か？　ならば伝えよ」

「……喋っているのは、お前か？」

牡山羊の口は閉じられたままだ。だが、それでも声は響いてくる。

「我が身はすでに朽ち果て、もはやその用を為さず。魂である我は狂おしき憎悪により変革の炎とならん。新たなる我は新たなる用を為さしめんがための主を求める。炎を望む者よ来たれ。炎を望む者を差し向けよ。我が魂を所有するに値する者よ出でよ。さすれば我、イグナシスの塵を払う剣となりて、主が敵の悉くを灰に変えん」

理解不能という恐怖がレイフォンを貫いた。

だが、解らない事をいつまでも考えても仕方がないと思い、レイフォンが行動を決心した。

（捕まえて、詳しい事情を吐かせる）

今のミロクに援護は難しいと判断し、一人で前に出ようと足を動かそうとしたが……

「しかと伝えよ」

距離が縮まっていない？　レイフォンの目による測定が敵との距

離が縮まっていなと主張している。

牡山羊が移動したのか思つて凝視してみるものの、そのような様子は一切ない。

「どうして……」

牡山羊への注意はそのままに、ゆっくりと足に視線を動かすと、その足は地を強く踏みしめたままだった。

石像になったが如く、レイフォンの身体は剣を下段に構えたまま固まっていて、動いていなかったのである。

（まさか……）

剋に乱れはない。体力だつて万全の状態だ。老生体との戦いをも一度やれと言われてもどうにかできる体調も保っている。

それなのに、身体が動かないのだ。

（ミロクだけでなく……この僕まで……吞まれている？）

牡山羊の全身から溢れだした存在感に、レイフォンまでも押さえ込まれていた。そうでなければどうして動けないのか判らない。

「お前は……何だ？」

レイフォンは吐き出すかのように重たい声を漏らしながら、活剋の圧力を増していった。

自分の萎縮を、恐怖を別のもので埋めるために、レイフォンは体外に溢れる活剋の余波が漏れることも気にしていない。

レイフォンの意志に従い、大気は剋の波動で揺れ、地面にある小石は焚き火でもするかのように次々と爆ぜていった。

「やめよ、お前が相手にしているのはお前自身よ。我は道具故に何者ではなし。何者でもなきものは切れまい？」

まるで天から降りてくるかのように声が響く。重さが伴っているかのように、その声はレイフオンの脳天を打ち、意識を眩ませる。

（動け……動け動け動け……）

念じ続ける。

今掛かっているのはレイフオンの命だけではない。

すぐ隣には友達^{ミログ}がいる。背後にはこんな自分の味方になってくれると言ってくれたニーナ^{なかま}達もいるのだ。

（行かせる訳にはいかない）

その為には戦わなくてはならない。一度ついた逃げ癖は、次回再戦するようになった場合に深刻な事態を引き起こすだろう。

敗北の記憶を引きずったままでは上手く動ける筈が無い。今この瞬間に一矢報いなければ……心が折れることは絶対にあってはならない！

「あああああっ」

叫び声が最後の引き金を引いた。

周囲に漏れ出していた活剷が衝剷に変換し、爆発した。

レイフオンは地面を抉りながら、一直線に牡山羊の元へ向かう。

剣身に衝剷込めて、大気をも巻き上げながら振り上げる。

剣に満ちた衝剷が解き放たれ、夜気が引きちぎられ、爆音がその余韻を飾った。

「見事……」

声が、空気に溶けるように尻切れにレイフォンの耳に届いた。
手応えは……無かった。

目の前に牡山羊の姿が無い。気配を探っても感じられない。

「……かつ、はっ、はっ……はぁー……」

重圧から解放されて膝をつき、酸素を求めるかのように荒く息をするミロクの声を、レイフォンはどこか壁越しから聞いているように感じてしまう。

「フェリ……アレはどこに行きました？」

「わかりません……いきなり反応が消えました」

大量の剉を吐き出したために、全身がひどく空虚になっている気がする。

身体と感覚が引き離されてしまい、何もかもが現実感が無く、まるで夢の中に迷い込んでしまったかのような感覚。

先ほどの圧迫感は嘘のようになっていくことが、レイフォンのその感覚を助長させていた。

「何だったんだ、アレは……？」

ぼつりと呟きながら、レイフォンはあの獣が言っていた言葉の意味を考えていた。

我は道具。主を求める。炎を望む者。変革の炎。イグナシスの塵を払う剣。

アレはこの都市の人が作った生物兵器のようなものだろうか？

だが、それでは汚染獣との戦いに使わなかったのがおかしい。
レイフォンは自分が納得できる答えを見つけることができなかった。

+

翌日も調査は続行された。

昨夜の出来事は第五小隊にも報告したおり、フェリと第五小隊の
念威操者で都市中を探查したが、昨夜の牡山羊を見付ける事は出来
なかった。

だが、別のものが見つかり、第五小隊と第十七小隊はその場所へ
移動していた。

「まさか、本当にこうしていたとはな……」

ニーナが溜め息と共に呟いた。

レイフォン達の目の前にあるのは生産区にある巨大な農場だ。

遠くを見渡すと、まだ十分に収穫可能な野菜がその青々とした葉
を空に向かって延ばしている。

そして、それとは対照的にレイフォンの目の前にある畑はかき乱
され、野菜特有の腐敗臭を漂っていた。

しかし、レイフォン達の視線を釘付けにしているのはそれではな
い。

そこにある土を簡単に被せただけの小山の列だ。

「……墓……か」

ぽつりと、ミロクがそう零す。

小山の大きさはバラバラで、大きなもので一軒家ほど、小さなも
のは部屋の一室に収まるほどの大きさでしかないものが無秩序に配

置されている。

かなり雑な作りで、穴を掘りその中に放り込んで土を被せた、その行為がすぐに連想できるくらいだ。

だが、都市一つ分の“食い残し”を埋葬するのはこれが精一杯だったのだろう。

「……これがレギオスの世界の敗北か。……痛ましいな」

ニーナがそう呟くのと同時に黙祷している。普段飄々としているシャーニッドも軽口を叩くことなく黙然と小山の列を見詰めている。レイフォンも小山の列を無言で眺めている。

都市全員の命、すなわち数万、下手をしたら十万を超えているという膨大な量。

それだけの墓を作るのにどれほどの時間と労力を掛けたのだろうか？

小山一つ一つ自体は簡単な作りなので、それほど時間は掛かっていないだろう。

だが、この広い都市から遺体を探し、運び、土を掘り、埋める。それだけの長い時間を死体で向き合って過ごしていても、めげずに完遂させるとは、正直すごいで表せる範囲を超えていた。

「……おいつ、何をしている！」

張り上げられた声によって、レイフォンは現実に戻された。

見ると、第五小隊の面々がどこからか見つけ出してきたスコップで小山を掘り崩そうとしている。

「掘り返して調べる」

ゴルネオは硬い声で答えた。

「何だと？ そんな事をする必要がどこにある？」

「……まだこれが墓だと決まった訳ではない。だから調べるのだ。それに、墓だとしたら誰が埋めた？」

「それは……」

「生き残りがいるという事があり得ないのは今までの調査で解っている筈だ。ならば、昨晚見たと言う獣がやったとでも言うつもりか？ 馬鹿馬鹿しい。獣がそんな事をするものか」

ゴルネオの言葉に乗っかる形で、シャンテが鼻で笑った。

「だいたい、その話だって本当かどうかわからないじゃん。見たのも察知したのもそっちだけ。うちでは確認できなかったんだから」

シャンテはゴルネオの肩の上に乗りながら、こちらに疑いの目を向けて言い放つ。

「貴様……」

身を乗り出したニーナを誰よりも早く止めたのはシャーニッドだった。

「ゴルネオさんよ。雁首そろえて野良仕事なんてする必要もないだろ？ うち他所を回らせてもらうぜ」

「……勝手にしろ」

ゴルネオはニーナの肩を掴んでいるシャーニッドを暫く見詰める
と、そう吐き捨てた。

「そうさせてもらう。……まっ、夕方にはツエルニが来るんだし、

晩飯が肉料理でないことを祈らせてもらおうわ」

シャーニッドの一言で、スコップを抱えた第五小隊の面々が洗面を浮かべた。

「それじゃあ、そういう事で。さっさと行こうぜ」

シャーニッドに促されてレイフォンたちはその場を離れた。

先頭を歩くシャーニッドはニーナと何かを話している。

珍しく、ニーナがシャーニッドに先輩に対して向ける敬意と感謝の念のこもった視線を向けていて、それを受けたシャーニッドがおどけて買いかぶりすぎだと肩をすくめている。

レイフォンも言い争いになる前に素早く鎮火してくれたシャーニッドに感謝の念を送っていた。

直接言わないのは、シャーニッドの人柄的に、それをしてもしーナのように飄々と受け流されるだけだからだ。

シャーニッドのような対応など、レイフォンには無理だ。当然、ミロク、ニーナ、フェリにも無理である。

もし、シャーニッドがいなければあの言い争いはどんな風に発展していたのだろうかと思ひながら、レイフォンは足を進めた。

+

「……いいぞ、埋めなおせ」

どこかうんざりとした声で、命令を下すゴルネオ。

それに従い、第五小隊の隊員達が掘った穴を再び埋めていた。

小山の中にはやはりと言うか、死体が埋まっていた。そのどれもが五体満足ではなく、残骸のような肉片と骨ばかり。

どう考えても、これはこの都市の人達の死体だろう。

ちゃんとした埋葬とは言えなかったが、やはりこれが精一杯だったのだろうとも思う。

「問題は、誰がこれをしたか……か？」

残された問題となると、まさにそれだ。一体誰が死体を埋めた？それがわからない。まさかとは思うが、本当にレイフオン達がついていた牡山羊が埋めたとも言うのだろうか？

有り得ないと首を振り、その考えを否定する。時間はもう昼を回っていた。

夕方にはツエルニが到着して、迎えが来るので、それまでに原因を探っておきたいところだが……

「……ん？」

作業が終わり次第休憩を取り、それから都市をもう一度調べなおさなくてはと思ったゴルネオは、ふと気が付いた。肩が軽い。

「そう言えば、シャンテはどこに行った？」

ぐるとと辺りを見渡してみるも、赤毛の副隊長の姿はどこにもない。

小山を掘り返している途中に肩から降りてどこかへ行ったのだが、そういうばそれから戻ってきていない。

隊員達に尋ねても、誰も居所を知らなかった。

「……まさか、あいつ」

嫌な予感がした。

ゴルネオは隊員達に作業を続けるように命じ、活剋を走らせて生

産区から出た。

+

携帯食で昼食を摂り、一休みした後レイフォン達は機関部の入り口の扉を開けた。

「やはり、電力が止まっているな」

何度スイッチを押しても動かない昇降機に、ニーナは仕方ないと呟く。

「ワイヤーで降りるしかないな。念のために遮断スーツを確認しておけ。フェリはここに残ってサポートを頼む。ミロクは護衛だ」

「了解しました」

ここに着く前にレイフォンの肩から降りていたフェリが頷き、念威端子がフェイススコープに接続される。

それを確かめると昇降機の床に穴を開け、レイフォンは鋼糸を使い、ニーナとシャーニッドはワイヤーを使って下へ降りていく。

機関部の電力が止まっている故に、照明は無い。当然真っ暗であり、フェリの念威のサポートがなければここは暗闇が支配していただろう。

念威による暗視機能により、青みを帯びた視界が広がる。

辺りには太いパイプがいくつも巡り、その隙間を縫うように人間の通路が設置されているのはツェルニに似ている。

似ているが、まったく同じと言う事ではなさそうだ。

入り組んだパイプの密度はこちらの方が上で、まるで迷宮の様に見える。

ツェルニの機関部の通路もそうだが、これはそれ以上だ。

腐敗臭がここにはなく、その代わりにオイルと触媒液の混ざった臭いに、かすかな錆の臭いが溶け合っている感じがした。

「空気がおもっくしいねえ。お前ら、よくまあこんな所で働けるもんだ」

シャーニッドは渋面を浮かべながら感心するように言った。

「明かりがあればもう少し広く感じられるんだろうがな」

「機関部で照明弾撃つわけにもいかんだろ。なに火がつくかわかりやしない」

（俺が行けば、ライトの代わりが出来るんですが）

「全体のサポートを行うフェリにはそれなりの護衛が必要だからな。仕方がない。フェリ、何か異常はあるか？」

（現在のところは何の反応もありません）

フェリの返答に、ニーナが小さく頷く。

「そうか。ならば、暫くうろついてみるか。昨夜の反応の主、隠れているとすればもうここしかないだろうからな」

「隊長は信じてくれるんですか？」

レイフォンは意外そうにニーナを見た。

牡山羊を見つけたのはフェリだが、確認したのはレイフォンとミロクだけだ。

第五小隊のメンバーはフェリの言葉と二人の証言を信じている様子はなく、レイフォンだって冷静に考えてみれば、あれが現実のものとは考えづらい。

「当たり前だろう。お前達の言葉を信じない理由がどこにある？」

「……まあね。お前らがそういう嘘を吐くキャラとも思えんし」

ニーナの言葉にシャーニッドも同意する。

「それに、私には当てもある」
「え？」

続けられたニーナの言葉に、レイフォンが首をひねった。

「この都市がまだ“生きている”のなら、いてもおかしくないのがひとつあるだろう？」

「あ……」

そう言われて、レイフォンの頭の中に童女の姿をした電子精霊の姿が思い浮かぶ。

「お前達が見たのはこの都市の意識。私はそう考えている」
「成る程……」

「まずは機関部に辿り着くことが先決だな。二手に分かれるか。私とシャーニッド、レイフォンは1人で大丈夫か？」

ニーナの言葉に、レイフォンは頷く。

「何もなければ1時間後にここに集合だ。行くぞ」

その言葉を最後に交わし、レイフォンは1人でパイプの入り組んだ迷宮を進んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4252n/>

二振りの剣

2011年9月5日22時20分発行